

川柳塔

平成十七年四月一日発行
創刊大正十三年 通卷八五一号

白川協加盟



No. 851

850号記念川柳大会特集

四月号

川柳玉島創立

40周年記念大会

と き 5月24日(日) 午前9時半開場
ところ 新倉敷鳳凰殿(倉敷市玉島乙島)

(☎086・522・1135 JR新倉敷駅からバス10分)

兼題と選者

「よろこび」 橘 高 薫 風 選
「生きる」 寺 尾 俊 平 選
「舞う」 高 杉 鬼 遊 選
「進路」 八 木 千 代 選
「待つ」 河 内 天 笑 選
西 川 けんじ 選

出句締切 午前11時半

◎各題2句・席題なし・欠席投句拝辞
事前投句 「声」 田 辺 灸 六 謝 選

◎事前投句は出席予定者のみハガキに2句連記、4月30日までにお願します。

会 費 2000円(昼食・記念品発表誌呈)
前 夜 祭 5月23日(土) 午後6時から

鳳凰殿宴会場・5000円

宿 泊 グリーンホテル・S5000円

◎宿泊希望の方は事前投句ハガキに月日・人数など詳細を併記してください。

出句及び連絡先 713-8103 倉敷市玉島乙島4385 田辺灸六

(☎086・526・1325)

主 催 川 柳 玉 島 社

第13回国民文化祭・おおいた'98

川柳作品募集要項―燦々と詩歌が光る豊の国―

応募受付期間 4月1日(水)～6月30日(火)(消印有効)

事前投句(各題2句・共選・未発表作品に限る)

「駅」 荻原 柳 絮・佐藤 真砂延
「半 島」 小松原 爽介・野口 初 枝
「風」 大 木 俊 秀・早 川 双 鳥
「人 間」 小 嶋 旬 月・斎 藤 大 雄

応募料 1000円

応募方法 大分県実行委員会作製の「募集要項」を御覧の上、所定の応募用紙を使用のこと。

応募先

〒879-5100 大分郡湯布院町川上3758-1
第13回国民文化祭湯布院町実行委員会

事務局「文芸祭」川柳係

発表川柳大会 10月24日(土)10時～15時

湯布院町立由布院小学校体育館

当日投句

(二句共選)

「碑」 外 山 あきら・兵 頭 まもる
「竹」 坂 本 柳 峯・森 中 恵 美 子

賞(予定) 文部大臣奨励賞 他多数

問い合わせ及び募集要項請求先

〒879-5100 大分郡湯布院町川上3758-1
第13回国民文化祭湯布院町実行委員会事務局

(電話0977-18412604)

主催者 文化庁・大分県・(社)全日本川柳協会・他

感動をありがとう

橘高 薫風

三月六日、夜来の雨はすっかり上がり、春光燦々として川柳塔誌寿八百五十号を祝福するかのようである。

梅田の阪急三番街、大阪の名産品売場で大会委員長黒川紫香さんとバツタリ。

「これから新大阪駅へ熊本からの二人を迎えに行きます」とのこと、九十翁のこのやさしさが川柳塔の底力、マグマなのだと思う。

地下鉄谷町九丁目を降りると楊井二南さんの後ろ姿が見えた。九十一歳である。おそらく今日の最高齢者だろう。ありがたい。氏は大正十三年の『川柳雑誌』発刊当時から学校（大阪高商）の先輩麻生路郎先生に師事し、後輩に住田乱耽氏がいた、いわば八百五十号の草創期の人。

やる気充分の常任理事たちの企画運営の大会に、私の目に飛び込んだお二人の最ペラン、おのずから頭が下がる。

大会は寺尾俊平氏のお話、これは俊平！

新子・薫風三人の同期の桜の出会いと、初心時代を振り返り、将来川柳界のためになろうと誓いを交わしたこと、その後のエピソードをユーモアを交えて語られ、最後に川柳塔の将来を祝福して結ばれた。川柳塔社同人誌友の皆さんは等しく感動を得られたものと思う。

時実新子さんには、兼題「さくら」の選を通して、同人誌友の句のレベルの高さを確認させて頂いた。新子さんは今少し厳選の方が良かったかなと言われているが、先ず粒揃いであったことに私はわれら仲間の大きい力を感じた。

懇親宴は、大会出席者の半数近くが参加、熱気と和気で盛り上がった。

青森、熊本、唐津、今治、島根、鳥取、富山、横浜と、遠来の諸兄姉が二十程のテーブルに陣取り、常任理事が分散して接待に当る。

山本翠公日川協事務局長、小松原爽介時の川柳主幹、田頭良子番傘川柳本社編集長らが最後まで雰囲気と一体になって頂けたことを心からありがたく思います。

今回の催しは、選者に木本朱夏、野口節子さんを登用、司会を高須賀金太、山本希久子（大会）、吉村一風、大内朝子（宴会）の新顔が担当した清新さが目に立ったが、これも成功だった。

新年号の発表後、一番に出雲市からの二十一名の参加申し込みがあり、本社の氣勢の上がつた日から大会への感動の予感が身に沁みて感じられた。

同人の拡張をお願いした前日の役員会とともに、大会が平日の開催となつて、出席不可能となつた方の多くに心からのお詫びを申し上げ、最大の反省事項とする次第です。

散会後の仲間の笑顔と目の色、満足感を確かめ合った握手に感動が走る。

川柳塔社は、人の和の上に天の時を得たと感じたのは私だけではなからう。万感をこめてありがとうを申し上げます。



座右の句

上の子は足だけ母にふれて寝る

(弓削平)

私の句

平凡な夫の影へそつと生き

福原辰江

川柳塔 四月号 目次

題字・中島生々庵／表紙・直原玉青

■巻頭言 感動をありがとう

嘘 ケ

川柳塔 (同人吟)

自選集

川柳の群像 傍島静馬

古川柳歳時記『鶯・雲雀・燕』

水煙抄

大空のころ (87)

秀句鑑賞

同人吟
水煙抄

渺湖抄

橘高薫風 … (1)

玉置重人 … (2)

橘高薫風選 … (4)

東野大八 … (52)

清博美 … (54)

西田柳宏子選 … (58)

橘高薫風 … (79)

田中叶 … (56)

田中紀美代 … (83)

八木千代選 … (80)

嘘 ケ

玉置重人

秋茄子がおいしい

仲のよい茶碗



昨年秋の本社句会で主幹に抜かれた句である。自分でも気に入ったので玄関の

短冊と替えておいた。日頃は亭主の川柳に知らんフリをしている家内が、目ざとく見つけて「へーこれってどこの茶碗ですわん」とジャブを飛ばしてきた。「うちのに決まったあるがな。川柳はちよつとぐらい嘘ケのある方がええねん」と三十六計を決めこんだが、二人暮らしの我が家では、時々ある諍いである。三年ほど前、家内が一ヶ月ほど入院した時に、悪性の病氣かと動転して、すぐに勤めも辞めて主夫業に早変りしたが、その時に

妻病んで米研ぐことのむつかしさ

の句ができたが、敢えて言えばこの句にもすこし嘘ケがあって、現役の頃には仲間の食事を我流で作っていたので、今でもみそ汁のひとつぐらいは何かこなせるのである。

その頃の職場である地下鉄勤務は三十分刻みで持場が変わるため、外食するのも時間的に追われるので、泊り勤務の誰かが食事の用意をしたものだが、その役がいつも私に回って

茴香の花

「枕」

一路集「陽氣」

「先輩」

初步教室「ソフト」

『川柳塔』八五〇号記念川柳大会特集

波部白洋・中井ゆき・伊藤寿美・相馬銀波・久保正剣

エッセー「ジャンジャン町」復活

各地柳壇（佳句地十選／坂田和歌子）

芦田静江さんを送る

柳界展望

四月各地句会案内

■編集後記

宮西弥生選 …… (84)

大角正道選 …… (86)

菊池トミエ選 …… (86)

田辺炎六選 …… (87)

吐田公一 …… (88)

(90)

桑原道夫 …… (113)

(114)

川島諷云児 …… (129)

(130)

(131)

(132)

座右の句

遠き人を北斗の杓で掬わんか

私の句

救世観音まぶたの奥のほとけさま

(薫風)

嵯峨根保子

きて、泊り勤務の時は本来の仕事は殆どした事がなく、メシ炊きに専念したものである。

勿論、私の仕事は仲間達が自分の休憩時間を割いて代ってくれるのである。

十五人分の昼食と夕食と夜食を、素人が一人で作るのだから結構忙がしく、何より困るのはその日の献立である。市場でいろいろ聞いたり、割り引いてももらったりしたものであるが、何分、素人のことだから豚汁やカレーぐらいがセキの山で、ややこしいものはデザートが出来合いの間に合わせるのである。

たまにカヤクごはんや、ちらずしなども作るがこれには仕掛けがあつて、前日に家内に頼みこんで材料一式と下ごしらえも全部まかせて、あとは家内に教えてもらった通りに掻きまわして出来上がりだが、これが結構喜ばれて、他の班の食事当番の人達もよく作っていたものである。

そう言えば、同人某氏もよく当番をしていて、彼の野菜サラダは絶品で、その作り方をひそかに盗んだこともあつた。

現在は家内もすっかり元氣になつて、男子厨房に入らずを決めこんでいるが、折りにふれてちらしずしの話など持ち出されて、サカナにされている。

難敵の中の一人は妻である

この句も多分に嘘ケのある句で、家内が難敵などであらうはずがない。



橘 高 薫 風 選

数珠玉の一つに隠す過去の罪

岡山県 荻野 鮫虎狼

亡き人の名前は海に向いて呼び

広告に騙される欲持ち合せ

錯覚の恋も終って髭が伸び

妥協せぬ海ほろほろの石を抱く

振り向けば総理頭を下げたまま

鳥取県 鈴木 公弘

猫好きな人の話を聴いている

感情をころして笑うのも仕事

歯並びの良さに油断をしてしまふ

春雷を怖いとおもう罪があり

風が止むまで本心は明かさない

愚かさを比べて夫婦かもしれない

献体のカードに署名して和む

弘前市 高橋 岳水

鬱の身にかき混せて飲むソーダ水

鴻毛の身の恙無くめぐる春

晩学の目玉を洗う虫眼鏡

長き夜のクロスワードを妻と解く

寒灯がボツンとともる老いの部屋

和歌山市 牛尾 緑良

許し合うものあり春の野に立ちて

冬を旅してまた遅くなる女

奇跡など当てにはしない父の靴

花粉症近づく梅がほころんで

少し春バレンタインのチョコ届く

悪友という名の君を信じてる

竹原市 小島 蘭 幸

晩学のノートが十冊になった
僕は頑固だ煙草を吸ったことがない
バレンタインデー男が水を飲んでゐる
朝のバイト昼のバイトをもつ妻よ
恋人とバドミントンはのどかなり
運転免許も取った振袖も買った

堺市 桑原 道夫

男盛りと少しは思う旅カバン
堤防の上で六方踏むは恋
卒園の唄を港の坂で聞き

跳び箱を跳ぶため生きてきた少年
失恋や紙石鹼を食うごとし
河豚ちりや家族の喉のいじらしさ

西宮市 奥田 みつ子

忙しい今が一番しあわせか
全力投球あとは静かに空を見る
少し怖くて少し楽しみ扉を叩く
思いがけぬ喜びもあり白い梅
いたわってくれる人あり春はそこ
そして三年蠟梅今も蕾つけ

吹田市 古川 喜美子

雪の日の挨拶雪のことばかり

闇の雪山に真向う露天風呂

雪の朝恋人みたいパパとママ
一つ打つ夜の時計へ降りつむ雪
虎の子を増やす時々里がえり
サーカスの虎に鞭ふる美男美女

鳥取県 岩崎 みさ江

記念樹の育ちに老いを納得す

女です猫です爪も磨きます

目をそらせてはいけません鏡から

大夕焼けの真つ只中にいる命

露の身の今かげろうとなる花野

変り身の速さこの世は万華鏡

大阪市 西出 楓 楽

そう言えば近頃空をみていない

たがえたか上げた刀をおろす場所

還暦まだK点越えをするつもり

残された日からの自作自演劇

その日からラジオをつけたまま眠る

元氣出すのが亡夫への恩返し

岸和田市 岩佐 ダン吉

過疎の村家族が表札に残る

衣食住足り列島が寒くなる

生きぬいて重ねた罪もたんとある

以下略に私もされていたらしい
焼酎の湯割り濃い目のうれしい日
分校が消えたときさげない末尾

和歌山市 川上大輪

異常乾燥ブチブチ切れる少年よ

花一輪話し相手が欲しくなる

マアマアとボチボチだけで済む話

物忘れこれも特技に入れておく

禁の字を外して旨い酒たばこ

猿にしておくには惜しい猿がいる

岸和田市 高須賀金太

エルニーニョ二十四節気狂わせて

近ごろの女性触れても崩れない

近ごろの男風邪にもだらしがない

節操のなさが服着ている政治

免疫のない子菌にもナイフにも

禅僧の境地になれず余白の美

米子市 茂理高代

明けまして少し良い事あるように

盲いても未知の世界で模索する

行き違う心に雪が積り出す

葱坊主誰が教えた恋心

幸せを求めすぎたか耳鳴りす

雪が降るよとただそれだけで暮れてゆく

入りたい傘は開いてくれません

戦争も平和も人が殺される

この線の向こうに行くとき帰れない

思考力散漫になる昼の月

仮想敵つくり自分にネジを巻く

黒石市 相馬一花

未亡人にするぞと妻を驚かす

スリッパをハの字に脱いでいる嫁御

大物が死ぬと儲かる新聞社

下取りのきかぬ夫のネジを巻く

スナックにストレス代も置いて出る

黒石市 千葉風樹

手演搏む少し残っている父権

ロボットの埃を払うしかない手

定年の手前で大砲を捨てる

月明り招いてさみし部屋の間

豆を撒く三面記事の中へ撒く

弘前市 斉藤 蒔

幻想の炎静かに目を閉じる

豊作を占う氷柱伸びている

きりたんぼの鍋に樵のうたがある

五輪歡喜津軽の空も平和なり

甘酒がとっても旨いバスツアー

砂川市 大橋政良

雪しきり揃い衣裳の祈りかな

弘前市 佐治 千加子

カトレアを見つめる女外は雪

待つだけは待ったと艶を吐く花芯

窓開けて亡夫恋う夕の牡丹雪

捨てられぬ夢抱いたまま老いにけり

弘前市 中山 雅城

別れるも母の愛なり布袋丸(蓮如上人五百回忌 5句)

内陣の左に御座す蓮如さま

名号の書に生きている蓮如さま

蓮如さま奨め給いし正信偈

蓮如忌や南も北も五百年

弘前市 岡本 花匠

忙しさにゆとり忘れた盆の窪

問わず語り本音もこぼれ波が立ち

気が付けば思い出の道恋の町

芽吹く春ころの森もざわめいて

雪解け川私を無視の貌になり

弘前市 一戸 ツネ

寒中です降るぞ降るぞと鳴る太鼓

趣味ですか道楽ですか靴に聞く

流れ星ぼとりと落ちた吹き溜まり

生き延びて甘さ辛さの渦に棲み

安堵感神よ仏よありがとう

登山口何時もの道も武者振り

弘前市 櫻庭 順風

からからに渴いた喉に錫杖清水

ミヤキンバイと会う日は嬉しとも嬉し

ミチノクコザクラと会った日忘れまい

教え子と久闊を叙す岩木山

弘前市 須郷 井蛙

考えに考え抜いてとうふ汁

三ランク下げても農に嫁が来ず

スキヤンダル目玉に売れる週刊誌

皿数の割には満腹しない夜

どの会もみんなお酒で締めくくり

弘前市 相馬 銀波

花言葉みんな素敵な春の章

少子化のうねりも過疎におし寄せる

風向きは過剰減反低米価

号令がまた減反の理事監事

聞き流す時 補聴器を罪にする

弘前市 高瀬 霜石

背負い籠に石またひとつまたひとつ

逆光の近よりがたきシルエット

お隣のテーブル興味ある話

キヤッチボールをしますもうひとりの僕と

重い靴僕より若い人の死の

弘前市 蒔苗果林

さわやかさ雪を下ろして冬忘れ
掘るほどに空と通じるような雪
行くあてのないのに駆けて堅雪野
あちら花こちらはいつも見とれ雪
絵手紙に春待つてますと愛い蕾

弘前市 小寺花峯

ストーブの側で拗ねてる花暦
半目の石を睨んで日が暮れる
言い訳の傘から垂れている雫
この次は俺か俺かと計報欄
咲く花も拗ねたつぼみもシクラメン

弘前市 今生恵子

地球儀を座右に置きたいニュースみて
地球儀をなぞりこの星小さきもの
啓蟄の虫も戸惑うエルニーニョ
疾風きてもうすぐ春だ旅のこと
コンビニで弁当買っている背広

十和田市 阿部進

お前あなた呼んで呼ばれて古希迎え
あつ爛のおかわりがでる喜寿祝
五十年妻と刻んだ金字塔
勲五等内助の功のお陰です
大吉とでたおみくじにでた笑顔

青森県 諏訪柳々

末法へ続く道かも湧くマグマ
内弁慶張り子の虎は野を恐れ
古文書バカ仮名文字一字に夜が更ける
三人席真ン中やたら澄ましてる
聖域の汚れた幕が一寸開く

青森県 西谷大吾

白魚のいのちいたたく旅の宿
吊橋を揺らして渡る虚栄心
檜山の道案内に断られ
日めくりを日課のごとく剥ぐ無職
輪の中で風向きばかり見て孤独

町田市 竹内紫鏑

宅配かメールか老いて耳ざとし
辞書と住み電話もウイルスも来ない
法事の日長老としてよくしゃべる
納骨にチラリ姑の白い壺
通院にくぐる母校の門古色

横浜市 菊地政勝

ワイキキの浜で平和な夢を見る
楽園に戦仕掛けた国を恥じ
ジェスチャーにイエスとノーで我を通す
律気にも出されたものは食べ尽くし
時差惚けのせいになっている物忘れ

横浜市 菱田満秋

住みついた野良が最も媚をうり
混んでいる電車で電話かけてくる
ためらいをポストの音に断ちきられ
ゆとりある時間が探し物で消え
折り紙も白と黒とが残される

横浜市 清水潮華

四半世紀過ぎて同じ眉を描く
役員に推され雑用言いつかり
税務署に呼ばれ税額増やされる
短足がブーツ寒さに負けました
気持よいまどろみ貰い乗り過ぐす

富士宮市 渥美弧秀

孫からの謎かけ遂に降参か
残雪を吹き上げ森は震動す
“花”歌う夫の瞳に虹を見る
宅急便果物妻のお気に入り
粉雪舞う空の彼方の温い故郷

静岡県 蘭田模脊

抱き合せ政治の狭間へリポート
神に祈り神に頼らず陽を仰ぐ
編棒の先に躍れり春の彩
金融国会関わりもなく落葉焚く
お化粧を終えて女が風へ出る

富山市 舟渡杏花

試し書きうつかり好きな人の名を
春愁や並んだ枕うとまし
舞台暗転ああ首根っこ冷えたまま
胸を張る情けのわかる馬齢とや
雪催い知らずにすめばよいものを

富山市 酒井輝

豊かさに溺れて不況だと思ひ
万歩計裏に住所を書いて出る
通訳をせぬから温い故郷訛り
戻れない旅に出るころ謎が解け
官僚のクローン賄賂も税も食べ

富山県 増田紗弓

雪の夜アシュレに恋をしてひとり
気品とは雪の山脈見てほしい
ひとすじの鬼を一匹飼っている
飲みなさいお前も飲めと日曜日
ありふれたはなし静かな酒になり

大山市 早川盛夫

気の向いた方が行き先ひとり旅
昨日まで笑っていたのにツンとする
居るだけでいい父さんの咳払い
愛されて妻に厚着をさせられる
ビールには不思議な腹をもっている

大阪市 河井庸佑

先行の気力へ体ついてこそ
根回しの手応え押しの手に変える
ゆつくりと英氣養うみどりの日
自己過信巧くおだてに乗せられる
不況風受けて戸惑う風見鶏

大阪市 津守柳伸

いのししの末路人里恋しがる
歳月や波打際のボランテア
足跡をたどるビデオを巻き戻す
諦めにすぐ慣らされる電池切れ
蘇州杭州ゆつたり乗れぬクラクション

大阪市 稲本凡子

進まない時計にかえている余生
負けん気が病気に勝てんなと思つ
宇宙旅行順番待ちで終りそう
遺族年金子に残すもの何もし
肩の荷をおろしてくれる嫁が来る

大阪市 大塚節子

喜寿と古希女が二人離かざる
グラスワイン光って透ける春宵よ
母退院春がそこまで来てました
要するに結論としてまだ続く
忙しうても冬は去り春も来た

大阪市 寺井東雲

ふんわりと頭をのせた妻の膝
いい香りレモンの輪切り蝶になり
坂道で老化見られるまけてくる
我が社では社長なんでも頑張るぞ
親方のアゴのうごきを理解する

大阪市 辻川慶子

煮ころがし孫ほしくなる夕ごはん
居心地がよくて円から出られない
夢抱いて翼が飛んでゆく四月
風花舞う如月亡母の七回忌
草餅の先ずお雛さま仏さま

大阪市 清水利武

減税の飴がいつまた鞭になる
寒い冬耐えて奇麗な花が咲く
サリン撒いた割には刑が軽いじゃん
夜桜へ炭火の肉が焦げている
政界を逃げ場にしてる詐欺男

大阪市 松尾柳右子

駅通りだけ明るく灯るかその村
行き先は終着駅だ寝て行こう
校門のさくらにナイフ似合わない
双児ちゃん入学祝も二倍つき
騒々し猫もコギャルも春が来た

大阪市 北 勝 美

慣れっこに手際のおきよ替えおむつ
時どきはきつい言葉も出る介護
行平で炊けばやさしい粥の出来
雑音苦言 時には便利遠い耳
ついて行くだけの八十路を喘ぎつつ

大阪市 榊 本 路 児

神獸鏡古代の声を映してよ
石仏の泪の跡に苔生える
七十九俗塵こびりついたまま
元旦に雑草図鑑見てる僕
鉋屑確かに生命こもってる

大阪市 藤 田 頂 留 子

うぬぼれて居るからよを見せずに行く
銭湯になじみ噂がほーら来た
バラ色の約束うたがいもちながら
夢にしたまるもんかと父の意地
何も彼も生きてる事の美しさ

大阪市 本 間 満 津 子

じゃ又の又は健康から貰う
なにか上げるにも言い訳せんならん
がっかりを越して笑うてしまうミス
胸のうち私がわたしとの会話
喧嘩する気なら言い分たんとある

大阪市 神 夏 磯 典 子

前列に強そうなのが並んでる
悲しみのハンカチ捨てぬ友の忌よ
鬼よりも恐い子供が多くなり
本読めば目薬 歩けばサロンパス
側室のようにすまして座る犬

大阪市 町 田 達 子

透明のことばに遠いこと多し
欲望の電車に乗った果ての記事
風光るばちばち冒険したい足
車好きのタロー犬の身忘れてる
我が家の節分 鬼も福も仲よしで

大阪市 井 上 白 峰

次世紀を視野に大地へ種を蒔く
つり銭に夢を抱かせる貯金箱
埋み火がくすぶり出した花だより
頼られて頼って歩む老いふたり
あり余る世に人生も使い捨て

大阪市 板 東 倫 子

合格の孫がやさしい瞳にもどる
究極の贅は閑居の日なたぼこ
シャトーブリオン女の魔性疼き出す
酒談義冬の美学はフグ料理
モザイクの少年虚勢の刃持つ

大阪市 川内 叭笑

偶然のえにしをくれる旅の宿

ハイテク化心忘れた物造り

ベランダの月に見られた盗み酒

期限無し過疎地花嫁募集中

門徒にも救えぬ過疎の寺一つ

大阪市 渡部 さと美

大きい掌頭にのるとみな溶けて

春の月小さい事は言うでない

空もよう二転三転ヒカリ号

奈良の里歩けば石垣の美学

やりました女王ヒミコというみどり

大阪市 奥田 良子

思い出はお寺の屋根のハトポツポ

わがくらし全部知ってる梅の壺

年毎に空白ふえる日記帳

本棚の金の背文字はインテリア

美人だが嫌なタイプの細い眉

大阪市 福岡 雅楓

檻一重私と虎の位置かわる

弱者にはなりたくないが年が増え

パンがないアントワネット笑えない

首都圏が騒ぐ五輪のこぼれ雪

好奇心持てないあの世の一人旅

大阪市 中田 あい子

湯煙に国なまり聞く旅たのし

明日知れぬ身をばわからぬ明日にかけ

御寮人さん送る斎場に虹かかる

寒の雨一日 日記は雨一字

気は焦り身はついてこぬ七十七路

大阪市 川久保 睦子

日記閉じ今日の私も眠ります

まだ煙のこっぺいますか玉手箱

人情がわかるピエロが瘦せていく

愛ならば言わずにおこう何事も

恋ならば話しておしまい過去の事

大阪市 玉置 英子

走る馬騎手が栄誉をうけている

将来の職業決めている五歳

清酒なら飲まぬがにこり酒は別

虎飾る今年は雛と入替えに

献立に困りまたまた切抜帳

大阪市 黒崎 恭子

やきいもがほこほこ匂う家中に

雑炊が好きな息子へ具をいっぱい

カルピスは初恋だよと言った君

あせりかなピンクのセーター着てみよう

大気澄む地上は荒れてすさみゆく

大阪市 小林周信

じいちゃんがよくてつまらないゲーム

淡雪を褥に眠る落椿

ビッグバン社運も祈る寅の年

尾は踏まず虎口覗かぬ世の平和

一宿一飯遠く見詰める名護の街

堺市 楊井二南

決意したからには矢でも鉄砲でも

気の逸る時は身軽に動作する

弁解は鹿爪らしい顔で聞く

握手してからの親しみ倍加する

謙遜をするとか分かっていて褒める

堺市 近藤豊子

離かざる去年はこな雪ふっていた

かまくらに神棚がある児らが居る

ほどほどに飲むことおぼえ三十歳

同僚と飲んで帰って寝つかれず

議員三期めブランデーのかおり嗅ぐ

堺市 志田千代

この一年張り子のトラの肩のこり

のんのさまばあちゃんの手もそえてやる

祖母の手や幾何学模様花雑巾

婿殿にばかり酌するお母さん

ジャンボ迷路更に迷路の新地下街

高石市 浅野房子

飼いだに咬まれた傷は治らない

バージンロード往生際のわるい父

縦糸を抜くと崩れてきた絆

おかめだがいつでも側に妻がいる

残された淋しさ逝った者知らず

豊中市 田中正坊

妻ようやく六十五歳おめでとぅ

貧乏性いつも何かをしている妻

生きているただそれだけで僕の勝ち

流水のない海を行く碎氷船(北海道の旅 二句)

氷爆の帰りに遭うた猛吹雪

豊中市 吉田あずき

月凍ててわが身にびしり亀裂入る

芥川賞直木賞なしほっとする本棚

如月に夫と姑の忌がめぐる

ひとり撒き一人で拾う福の豆

白銀へ挑む研ぎ澄まされた技

豊中市 井上直次

現金(げんなま)を贈って貰ったことがない

アバウトの好きな友なり待たされる

爺われの財布くすぐる電話くる

ご近所の雪も集めて孫のなるま

雪が舞う休めと言わぬ万歩計

豊中市 松岡久留美

どん底に落ちた同士が助け合い

老夫婦ラストダンスに憩う夜

下っ端が夢を見ているトーシユーズ

鍵っ子の願う我が家の夕べの灯

預かって身動き出来ぬ家の鍵

豊中市 江口明光

鏡台に笑われながら結ぶ帯

花道を転んでばかりいる父で

引き継いだ二葉に水をやっている

起工式またふるさとが壊される

おしゃべりの舌にキリトリ線がない

豊中市 滝北博史

好きですと年賀状にも書いておく

夫婦でも同じではない願いごと

パパとママ別れないよう祈る子も

水仙のこと長々とラブレター

願うこと古希すぎでから一つだけ

豊中市 板山まみ子

風邪ひきに嫌われている三面鏡

家出れば物わかりよい顔をする

スカイビル郷土料理のしじみ汁

リングさえむけないナイフ人を刺す

色のない背中が並ぶ朝の駅

池田市 栗田久子

佗助の落ちて地面を画布にする

和の情緒長野五輪は鐘で開け

国民の眼は真実をあぶり出し

本能は理性を越えて走り出す

どんな夢 神獣鏡は見てたやら

箕面市 椎江清芳

大好きな酒に命を狙われる

ご無沙汰の方がよろしい医者の方

無理すなと遺影が言っているお通夜

五七五不満言うには短すぎ

フルムーン松江の宿の蜷汁

箕面市 岩津ようじ

MOF担の功績知ったその逮捕

しゃぶしゃぶと聞けば少うし羞恥心

きさらぎやガン再発の検査待つ

オベ話痛い痛いともり上がる

連続ドラマ不倫が実りホツとする

吹田市 茂見よ志子

保証期限切れゆく我が身負けまいぞ

肥後守昔はみんな筆箱に

嫌味だとしても素直に丸く聞く

朗らかなお人と分かる声のトーン

生活費落としなんぼの事やある

吹田市 瀬戸 まさよ

佳き時代春の小川とともに消え
主従の礼生きている天皇家
風邪流行る二月びくびくする私
カルチャーへ前職脱げぬまま座る
曖昧な返事で濁す処世術

吹田市 栗谷 春子

こちらまでほころんでくる桃の色
おぼろ月今も吹けますハーモニカ
左手に杖持ちかえてお焼香
写真からおうと声かけられたよう
さびしいよからす雀の減ったこと

吹田市 山本 希久子

人形の吐息私の吐息雛の宵
窓全開春の匂いをかいでいる
猫の恋唄があろうとなかろうと
育てたように育つ娘のマイペース
目を閉じる大きな世界見るために

吹田市 石原 靖巳

アバウトが嫌いで何時も隅にいる
残高は分からぬがよし余命表
喜怒哀楽男はみんな酒にする
家中のメモで賑わうカレンダー
お噂は聞いていますと如才ない

茨木市 藤井 正雄

駅に出る歩幅それぞれ雪の朝
ペンギンのように母へと風呂上がり
虎の子の一点守り切るエース
見違える定年からの庭の四季
小遣いをくれる形で出る懐炉

茨木市 井上 森生

七桁の便りここにも古い友
赤飯に涙 老母も九十三
溪流の鯉を肴に夫婦酒
朝歩く還暦祝いのスキー帽
氷雪長野レースを終えたい笑い笑顔

茨木市 堀 良江

ジュースよりしゃりしゃり噛んでいるりんご
実力は互角気力で勝ち進む
入ったら出るのが怖いたこの壺
みつともないわたしをじっと見る私
胎動の日から子育て地ぞうさま

茨木市 島元 ふみ

妻の愚痴封じるようにテレビつけ
さざ波もスパイス二人切りの部屋
自分より気になる子らの夫婦仲
ハングリー知らない孫も受験生
長火鉢鉄瓶のお茶美味しそう

高槻市 川島 諷云児
残命を測るものさしみつけたい

血縁の温さを過信した迂闊

晩生の余白を埋める原稿紙

臓器あげます古い僕のでよかつたら

川柳が今の僕には常備薬

高槻市 故芦 田 静 江

大成閣紫檀いろそえ絵の温み

左近の桜春をかなでる代がわり

銀嶺に五輪やすかれ鐘のなる

定年に命の椅子がおびやかす

護身のナイフ魔性にさせた声がわり

高槻市 井上 照 子

甘酒を京の茶店で兄妹

当たり年良し悪し心強くもつ

娘のおでんフウフウ食べる風邪の床

姑母の忌に明治の強さ語り合う

心理学知識及ばぬ世代来る

高槻市 傍 島 克 治

煩惱をくすぐるように春の風

サイコロを妻にふらして従いてゆく

悔いなき日送れと月日過ぎてゆく

減価償却無価値となつて生きている

口だけが反省してる振りをする

守口市 森 川 まさお
ふぶく道人現われてすぐ消える

雪もよいおいでおいでをする女

のど飴を夫婦そろつて舐めており

夢でしか会えない人がふえてくる

年の豆数えず少しだけ貰う

寝屋川市 北 岡 波留吉

苦勞して大学出たが無位無冠

卒業日一際映える白い杖

亡妻に似たこけし求めて一人旅

迫力で激流上る雑魚の群れ

綿密なプランに借りる妻の知恵

寝屋川市 坂 上 高 栄

一駅を過ぎた居眠り春の午後

折り折りの花が迎える里の駅

野焼きの火煙棚引く子の背丈

一盛りの味褒めてやる屑蜜柑

開発の盲点を突くエルニーニョ

寝屋川市 太 田 とし子

足もとが酔うて嬉しい人となる

福恵比寿 枯れない笹を下さいな

居酒屋でひとりで待った招き猫

笑おじやないか今日一日を生きたため

部屋中が鏡だったら狂うだろ

寢屋川市 森

茜

曙覧のうたに習いたのしみ見つけだす

口答えるマニユアルを見るアニメ

ファミコンの孫さそいだす夕暮

身構えた相手も苦勞人らしい

弾んでる電話へキャッチホーン鳴る

寢屋川市

富山 ルイ子

両雄は立たず顔色見てばかり

今年こそ南船北馬してみよう

名物にうまいものあり我が故郷

誕生日同じ縁の深い柳友

神の目に適う生き方して逝きぬ

寢屋川市

堀江 光子

雪の日の早々と灯のともる街

雪下ろし長野の雪を横に見て

縄暖簾うちでは見せぬ顔がある

別れゆく酒へ別れを口にせず

飢え知らぬ政治のつくる福祉法

寢屋川市

籠島 恵子

わたくしもいっそと思う寒椿

行きはよいよい帰り忘れている切符

春ですよ無言電話にホーホケキョ

あなた任せの人ばかりでゆく見舞

失札を詫げる電話だ手短に

寢屋川市

酒井 勇太郎

時と金ゆとり出来たら車椅子

小金持ちなのにバーゲン逃さない

沖繩の苦悩を知事の顔に見る

雪まつり病母が連れて行けと言う

割り引いて見ても倅に過ぎた嫁

寢屋川市

江口 度

民間は大手を振って袖の下

バス停より我が家までが冬である

妻の留守今日オムライス明日カレー

レモンティー卓を囲んで妻多弁

足音の軽さを妻に見抜かれる

枚方市

八田 敏

妻介護出来る老軀が有難し

金婚まで押せるか妻の車椅子

マンションの新居でせめて若い夢

介護する妻と競うか物忘れ

この歳で迷うことあり欲もあり

枚方市

森本 節子

耳よりも目で見た記憶たしかなり

暇かけて蛸一匹のやわらか煮

枕三分目覚めるときは明日の朝

意地わるな雲に日ざしを断ちきられ

三日がかり年の数だけ豆を食む

枚方市 海老池 洋

不景氣の影に賀状の虎吠える
自分史を繰るあんな風こんな風
妻の顔ほくろは二三あつた筈
湯の町をからんころんと五六人
お紋りよお前も用の済んだ顔

枚方市 前 たもつ

長野五輪子らの主役は素晴らしい
虎の尾より恐い地雷を踏みつける
医者値上げ風邪など引いてやるものか
首都圏鎮圧積雪十糎
雪おんなアムロシューズでやってくる

交野市 福崎 しげお

大蔵の肅清なるか元検事
シャブシャブが見事にばらす裏の顔
マイク持つ卒寿古稀より背をのぼし
齒の治療すんでおしやべりもどる妻
百の豆食べる練習福は内

東大阪市 森 下 愛 論

吟醸酒空の碧さへ吸い込まれ
酒瓶も話もつきて世を愚痴る
一滴の雫垂らして飲み足らず
潤滑油そろそろ切れて生あくび
塗り下駄の素足見つめて花の街

東大阪市 安 永 暁 子

今日あすと急ぎはせぬが娘の見合い
咬みはせぬよく見ているうちの犬
明日のこと念には念を入れて寝る
ごくろうさん丸いポストに雪積る
堂々と息子挨拶眩しすぎ

松原市 玉 置 重 人

江り止め願書はたと出してある
矢面に立つ気しつかり食べておく
遺言を書き替えている貸金庫
家訓などないがしつかり流す汗
悪人ではないなうどんをすする音

松原市 小 池 しげお

この俺は偽者だったかも知れず
気どつても大阪弁が出てしまふ
根性をつくつてくれた他所のめし
小銭入れ常識だけは知っている
傘立てが大事なことを言い忘れ

藤井寺市 吉 岡 美 房

しみじみと飲めばしみじみ春の雪
雪の降る音聞く猫とわたくしと
どの神のおかげか合格通知来る
指切りが花の咲くのを待ちかねる
追い風も帰りはきつと向い風

藤井寺市 高田 美代子

羽曳野市 酒井 一壺

ゆうべのことも確かに過去になつていく

あたたかくなつたと渡る淀屋橋

お花見へ少しお洒落な帽子買つ

夕焼けを見つめて何故か涙ぐみ

リタイアをふと考える春の闇

藤井寺市 福元 みのる

仲良しはジュース飲むにも同じもの

貧しくも夢多かつた日を思う

半世紀雪の思い出遠くなり

日々ニュースサスペンスより度肝抜く

政官財の膿出し切つて新世紀

藤井寺市 中島 志洋

金婚の妻にやりたい我慢賞

カタカナの花の名前は直ぐ忘れ

ワンマンがまた吠えている会議室

七癖にも一つおまけ酒の癖

プライドを持てと鏡に励まされ

藤井寺市 鴨谷 瑠美子

新しい相手を連れた寒雀

人恋えば雪はさみしいものでなし

雪積もりやがて城ごとデコレーション

血の筋が火の輪をくぐる虎になり

許してる貌はうしろも前もなし

僕はもう何も言うことありません

まだ生きているのですかと俺のこと

入院へ長い付き合いカレンダー

カレンダー一度も買ったことはない

寅年へ心機一転カレンダー

八尾市 内海 幸生

グルメ旅こんな笑顔で暮らせたら

仏壇に叱られそうな日が暮れる

明日はあす今日はお酒で締め括る

遊び好き仕事も好きで生きている

酒グルメ旅好き男が秘める芯

八尾市 宮西 弥生

二月はさけて通れぬ亡母の忌よ

さわやかな笑顔長野で教えられ

三寒四温春待つ梢はおしやべりに

いつの世にどこでも母の字は通る

おでん屋で昔の借りをおもい出す

八尾市 高杉 千歩

披露宴九十歳と並ばされ

ウエストの合わない春の服ばかり

嫁に書く便り女のながばなし

同じよう育てて花の咲く咲かぬ

楽しかったを繰り返す母の筆

今更に出雲は寒し旅に来て

八尾市 宮崎 シマ子

愛を口にして女辭を待っている

この花は本物きれいに枯れてゆく

雪どけにじわじわさびし雪女

しみじみと父子と思う同じ嘘

八尾市 生嶋 ますみ

手術終え夫ひたすら眠るのみ

にぎりこぶしゆるめて孫は昼寝する

着飾って母がつきそう試験場

夫の酌すなおに受ける年はじめ

首ひとつ息子は高く釘を打つ

八尾市 高橋 夕花

古いノートに友がいて私がいる

如月やジョーカークイン 入り乱れ

お手玉に孫とわたしの数え唄

世の乱れ甘い梅干し氾濫する

喪の明けた女に微笑むお雛さま

八尾市 吉村 一風

脱サラへ男の厄をぶつつける

無口の父しゃべらされてる母の酌

ままごとに夫婦喧嘩をみられてる

いじめには負けぬ父子で竹トンボ

うれしくて言いたくて寄る縄のれん

今年また桜にあえた御蔭さま

八尾市 大内 朝子

振出しに戻ると空は青かった

甘酒の一本箸が恋をする

大根の花のかんばせ亡母偲ぶ

桜かて人かて散るはあつけなし

八尾市 村上 剛治

相槌で話引き出す聞き上手

入社式みんな光っている卵

恥重ねいつかでてくる人間味

手加減をしていたはずがされている

甘い水飲んで転がり落ちてゆく

八尾市 村上 ミツ子

ほどの良い風にいのちを貰う風

有無を言わせず陽は昇り陽が沈む

出来ないことがいい時だつてあるのです

大切なものが隠れている余白

楽しいことも毎日やるときつくなる

八尾市 篠原 いつふみ

嫁はんに奢ってもらた回りすし

消防署の前でガス栓思い出す

まあまあと子のめし粒を食べてやり

お世話してお世話になります天下り

合格の一足早くサクラサク

岸和田市 芳地狸村

節分の福湯がのどにあたたかい
厄除けの護摩木みつめる温い顔
ひいらぎのやすらぎ代が二千円
福豆のさばきに光る年男
頑固さが誰よりわかる父の背

岸和田市 原 さよ子

好きな道老化を防ぐ友がいる
手のしみて笑い合ってる老い二人
新成人背広の孫のたのもしく
味よりも量をよろこぶ孫二人
手作りの手に乗るほどの雛飾る

岸和田市 古野 ひで

ひとひらの雪より淨き心欲し
枯淡とや心も背中も丸い老母
オリンピックの申し子みたいに
亡父憶う心と結ぶ金メダル
晴れやかな御顔陛下のおん拍手

岸和田市 田 中文 時

二人三脚嫌だと共に二本足
骨抜きにされて与党にしがつき
四月馬鹿気付いてよと朝の靴
唯一の理解者自動酒販機で
年金の暮しひっそり井の蛙

岸和田市 長谷川 呂 万

金も欲し若さも欲しい古稀の僕
恋人にそっくりレモンの香と気品
留守電へいつもと違う声になる
預かった間無口の九官鳥
観光へ銃が護衛のピラミッド

岸和田市 井 齋 一 齋

来年の密約鬼に笑われた
隠し持つ火種も尽きた金融危機
葉桜に気炎を上げる温暖化
大勢の足音聞いて桜散る
求人欄おれの年からбойコット

岸和田市 寺 田 甚 一

廃業の骨アメリカがすぐ拾い
有難味知る金ラフに使えない
裁判は忘れた事件蒸し返し
監督するバンクにみんな天下り
そこはかとなない梅の香がすぐ逃げる

岸和田市 藪 野 けい子

妥協して二代世帯で住んでいる
当選の番号たのしい年賀状
ばあちゃんに子ばなれさしている震災
低金利タンス貯金に手間いらす
初キッス青いレモンの味がする

貝塚市 池田 寿美子

晩学にあれやこれやの好奇心
良い聞き手詮索しないことにする
あの世へも電話をしたい路の臺
メダルより長野五輪に手をつなぐ
豊かさを越える貧しさ世紀末

富田林市 片岡 智恵子

仏壇の扉に幼子の指紋
来世のことはタンポポ風まかせ
これからのガイドが欲しい雪だるま
玄関で用を済ませるおつき合い
披露宴続いて飽きるフルコース

富田林市 松本 今日子

その家の歴史なめつくすような火事
丹後出石こんな静かな町がある
おつかいの豆腐つぶして孫帰る
聞き役に徹するつもり酒がある
出生も訃報も聞いた冬日長

河内長野市 井上 喜醉

雑念を背負い慣れてる寺の苔
金的が揺れる苦労はもうご免
涙ほど年金減税してもらい
空の旅地球の屋根は美しい
切り札を奥歯へ挟む古狸

河内長野市 加島 由一

賽は投げられた終電車見送る
微笑んでいる何もしてやれぬから
殺し文句使いこなせず終わる恋
家中の手をすり抜ける伸び盛り
鏡台の妻の指図でゴミを出す

和泉市 西岡 洛醉

二人連れ如才無い声旅の宿
桁の傷ばちばち補修夫婦橋
生涯を一夫一妻心得て
花言葉並べて春を待つ心
ささやかな平和一合の美酒に酔う

大阪府 榎山 隆盛

風四月ダークのベール剥ぎにくる
おふくろの味を知ってる店へゆく
お賽銭だけの付き合い杜社巡り
浮気する名うての人で愛妻家
半月の見事に浮かぶ爪が伸び

大阪府 八十田 洞庵

追憶のページにのこる花結び
視野の隅思わぬ人が消えている
手の届くところには居ない人を好く
春風に才女は何故かときめかず
子に残すルールみじんも曲げられぬ

京都府 都 倉 求 芽

耳あてて聞こうか春のくるレール

黒っぽくなった土 春匂わせる

誰もいぬ勝手で蜩春の唄

三月危機ああ春なのに春なのに

ジパングもガタがきましたマルコ・ポーロ殿

京都市 山 海 友 熙

振り返ることを忘れた雪椿

何れ散る人も桜も美しく

淋しさを越えてさくらの咲く町に

桜咲く方へ振り向く影法師

亡夫の筆 考えごとが多くなる

京都市 大 河 未 佐 子

ねんねこをゆすり駆け引きする路店

ご指名に女冥利のツーショット

黒を着て薄紅ひきて尚おんな

齢の差のまさかに隠れ恋の道

ぼろ着ても虚飾の城に籠もるより

京都府 稲 葉 冬 葉

いちご大福昨日の愚痴は消えている

爆弾宣言してからの低速度

球根の頭がのぞくそこに春

民宿の仔犬五匹にご対面

添うてみな分らんかった癖があり

奈良市 天 正 千 梢

骨太の政治家はしい五里霧中

敢闘賞優等生の返事して

サロンパス カルタのように張ってあり

エレベーター故障知らずできまじめで

おいしいおいしいと芸のない批評

奈良市 宮 口 笛 生

学級閉鎖我が家もみんな風邪を引き

大根の風呂吹き寒い夜の汗

私には酒は薬と決めている

傍目から心配されてのんでます

鍋やきでぬくもって出る冬の街

生駒市 北 山 悟 郎

濁ってる世の中酸素が未だ少し

晴れ舞台心晴ればれ背が伸びる

介護する娘の皺数が気にかかる

うらぶれた錦の御旗未だ担ぐ

梅見酒木枯しの中舌鼓

大和郡山市 坊 農 柳 弘

金婚式付かず離れず夫婦傘

菜の花の蝶に嫉妬の桜花

柿の木の新芽しつかり法隆寺

浪速紀行八百八橋川幾つ

酒のアテ上手になった下戸の妻

和歌山市 桜井千秀
ポスターの個性社運を担ってる

一瞬のためらいチャンスだったのに
車に住んで住所不定の旅もいい
サントルチアは大声あげて歌いたい
一人相撲四股踏んじやっただけのこと

和歌山市 堀端三男

恩師の叱る声に返事をして覚める
司会者の一句が会を和ませる

鍋囲む二人は周囲見えません
無学の母が厳しく論す罪意識
両手に花世界記録と金メダル

和歌山市 池永正甫

ニッポンの空を忘れた奴唄

向かい席ナガスネヒコが脚を組む

夫婦岩小さい方が夫だな

横文字の歌聞かされて年送る

鬼の眼を並べたようなカメラ陣

和歌山市 青枝鉄治

公僕が死語と化してる永田町

金で生き金で自滅の金バッジ

取り巻きに当たり散らしている小者

買って出た仕事に首を締められる

起承転結そろそろ結に立ち向かう

和歌山市 垂井千寿子
家計簿の雑費に潜む虚栄心

大蔵省の鼠で国の蔵が揺れ

御法話へ眠気払いのノートかな

ドーナツ現象 分校みたいな小学校

オウム教重い法廷まだ続く

和歌山市 福本英子

ありったけの笑顔と興奮長野から

拾うて欲しそうに一円玉光る

占いに大正生れの欄が無い

たらたらと聞いた話に色が無い

湯どうふで男を値踏みしてしまう

和歌山市 木本朱夏

辛抱に限界がある蕎麦の花

春節の淋しき宵のものの影

教会の椅子の固さに雪解音

母の忌に年々褪せる寒桜

手の中の卵と春を待っている

和歌山市 福井桂香

ミュージアムへ春の足音たしかめに

斜めから大蔵省へ豆つぶて

開会の鳩風船が舞う長野

五輪開幕横綱の四股響きたり

フィナーレの歓喜の歌は晴れやかな

和歌山市 山口 三千子

走って来た道の記憶がはなれない
笑い袋勉めて自分になじませる
老人手帳届いて齢を自覚する
傷跡は癒えぬ形状記憶して
福は内心の鬼も外へ出す

和歌山市 宮口 克子

先輩の轍頼りに従って行く
程々のところで枝葉切り詰めて
どの世にもアマセミプロという順序
締めくくってお茶がぬるくて締まらない
そむかれて二人三脚から自立

和歌山市 岩本 美智子

地唄舞 雪に紛れてはん女逝く
手で囲う寒風に咲くパンジーを
五輪へは大雪つれてエルニーニョ
波立てど立春の海春の彩
春の光たつぷり溜めるポケットへ

和歌山市 堀畑 靖子

オーロラをこの目で見たいパスポート
人さまに恵まれ今の私あり
トランクひとつ持って消えたい時もある
海が好き山が好きだと多情なり
お化粧の乗りに響いている喧嘩

和歌山市 玉置 当代

被災地の道なお険し初春の雪
ハート弾むと靴も踊ってくるピエロ
ヒロインは自分と思ひ込んでいる
欲張りな私と人のいい夫
四世代何とか丸く棲んでいる

和歌山市 細川 稚代

パンジーが健気に耐えるふぶく夜は
にやにやと鬼が仏に囁いた
可も不可もなく世間に鈍い父
事なかれ主義でその他の群にいる
桜草君の咲く日を待ちわびる

和歌山市 榎原 公子

騒音の真っ只中に母を置く
九十二歳旅立ちへ娘は介助する
限られた生命いまさら母想う
病室の窓にやさしい曇り空
抱き上げる度軽くなる母の膝

和歌山市 山根 めぐみ

一天の風になりたい竹とんぼ
餅肌の女でいたい塩美容
風と狂う女の音をそつと消し
まいまいこんこして母を恋う水澄まし
たたんでも畳んでも出る嫉妬心

和歌山市 楠見章子

バージンロード父の歩幅はオイチニノサン
ライバルの眼で花むこを斬る夫
あしたが見える小さな窓もある新居

新居はソファーマイ座布団を提げていこ
通帳はもとのままでとアドバイス

和歌山市 川上富湖

錆止めをたっぷり塗っている絆

ロングランそんな予感の夫婦劇

ねずみ算一円玉が笑い出す

てまり唄毬は路地から出たがらぬ

根気良いとろ火にいつも論される

和歌山市 木村初子

孫成人キリつと結ぶ青いタイ

人生マラソン走りつづけてまだ未完

納得のいくまで句読点打たぬ

実南天日毎色増す日向ぼこ

精いっぱい己のために咲いて散ろ

神戸市 山口美穂

甘いのか苦いのかバレンタインチョコ

裸木は静かに季節を待っている

鳩時計ねむたい声で鳴いて春

にくまれ口もきくけど卒寿の母可愛い

心ゆるして話した唇がさむい

神戸市 中村ゆきを

君が代を歌えといわぬが少年よ
ポストまで啓蟄の風受けながら

お揃いのルック奥さん杖となり

甘酒へ夫婦でかける桃の寺

ドリンク剤再就職の風に立つ

神戸市 池田善守

ありがたや今朝も元気に布団あげ

楽すぎてたまに苦になる定年後

叱りきし子に叱られる齢となり

女性歌手舞台装置を着てるよう

何事も他人を気にする根なし草

神戸市 木村貴代子

大通りリングの実る町に住む

勉強を口実主婦の集う午後

バラ真紅心の傷は癒えぬまま

被災三年仮設難民放置国

口惜しく腹が立つのも生きる内

尼崎市 春城 武庫坊

白内障の眼に賑やかな寒の星

リストラの後の動静聞かず雪

ふところの野心がひどく冷えてくる

掘り炬燵日々の手順を狂わせる

寒いでんなど言うより外にない寒さ

尼崎市 春城年代

坪庭にも二月の風の荒みよう
それからは涙も出ない私小説
粹がつてみても雪降る日は寒い
百歳媼そも若き日の朱をとどめ
牡丹雪今亡き人の湧くごとく

尼崎市 長浜澄子

引き金になったレモンのひと滴
肩ツンと押して静かな喫茶店
芯のある女を生きている野バラ
身の内にはマグマもバクも棲み余生
さぞかしと月日を偲ぶ寒見舞

西宮市 秋元てる

この外に正解はない赤いバラ
穴を出た蟬だ振り向く事はない
終り方さえ満足に決められず
鬼は外遠くに聞いている二人
霜の朝人が変ったよな便り

西宮市 林はつ絵

はじめから老人だったわけでない
殻を捨て少しセンチになつてくる
効くと聞き有無を言われぬ弱味あり
全身の裂け目つづくり生き延びる
こんな時飲めない者の知恵しぼる

西宮市 門谷たず子

生薑湯妻のぬくさを飲んで寝る
受験戦争済んで家族の乱気流
遠眼鏡ぬくい家族と見えますか
入院の準備も慣れて寒い春
春愁や老いに逆らうことはない

西宮市 牧渕富喜子

水仙がひそひそ噂する冬日
むかし昔を付けて話せば眠くなる
血圧計さあ初場所が終わったヨ
当り前の事新鮮に見える雨
生きるとは水栽培の根の如し

西宮市 西口いわゑ

お願いをすることはかり仏様
再会の酒は甘うてほろ苦し
てのひらの星に凡人気づかない
なかなかの人物とみた初対面
決断をするとやさしい冬の天

西宮市 亀岡哲子

防災訓練今年も陽ざし柔らかい
君もいたなら四年生だよ追悼文
生れ変わる町よベランダ星満つる
全自動の湯にのほほんと三年目
三年目産れた孫も笑い初め

西宮市 山本義子

いも粥をふと思いつく寒月夜
わが家流粕汁うまくだき独り
ちゃんこ鍋一式揃い一人前
きりたんぼ食べた湯宿はきつと雪
窓外の雪を眺めている平和

西宮市 久保まさお

山茶花が咲きこぼれても遠い春
国内の憂さを蹴ちらし金メダル
頑なに父を真似てる懐手
八十路来て噛みしめてみる吾がいのち
春風やオーバー脱ぎて退院す

伊丹市 小熊江美

振袖の孫は我が家のシンデレラ
一病とバランス取ってうまく生き
一人住み風邪も引いてはいられない
初孫の日増しの知恵が楽しみだ
騙されていても嬉しいチョコレート

宝塚市 嵯峨根保子

こころにも思い出というカレンダー
叱られる人が無いのも寂しいね
苦労した話は一度きりでよい
NAGANO金なみだを拭うこともせず
今年またよき旅のあれカレンダー

川西市 氏林洋敏

レスラーと喧嘩するには弱すぎる
怒る前急にやさしくなる言葉
足止めのためにお酒を用意する
マイホーム五寸釘には縁がない
葬儀屋が心得ているお葬式

加古川市 吐田公一

割り切ってしまえば楽な二度の職
愛妻の弁当励ます二度の職
二度の職家計黒字とおだてられ
諫言へ左遷辞令が下りてくる
祝盃に映る苦闘と喜びと

相生市 中塚礎石

公園の椅子で羅漢の日向ぼこ
こぼれ種落ちたところは無農薬
仲直り嘘と真が握手する
まね事の疑似餌に男くらいにつき
電車待ち寒い噂を背で聞く

岡山市 井上柳五郎

有限とさとの齡や空気水
喜怒哀楽人生のデコボコの道
この人はだあれ鏡に老いた俺
ではまたと受話器置くのを譲り合い
ひっそりと芽を抱き春を冬木立

倉敷市 田 辺 灸 六

友の計が続くよ乾燥注意報

年毎に齡が荷となる枷となる

七十路坂越す氣しばらく雨宿り

背負う荷を減して老後に身構える

父の背を越えて跳び出せ蛙の子

倉敷市 小 野 克 枝

敗けいくさ知らぬ勲章光り過ぎ

破れ障子に祈ったこともあり夫婦

生き死にの話きらいな薬瓶

朝露にまぶた重たき野の仏

折り鶴よ翔んで宴の絵になろう

倉敷市 井 上 富 子

千手観音あなたも爪を染めますか

お茶漬がちらついてきたバスポート

洗いざらしの木綿と肌の合う妾

老人ホームに錨をおろす支度金

晒一本男の祭り雪が舞う

岡山県 福 原 悦 子

凶の易逆手に女立ちあがる

安泰な一家の杭は父が打つ

スーパ―にない愛想の店がある

降る雪に孫と童話を温める

明日開く花も答を抱いている

岡山県 大 石 あすなろ

許す気で老父が熱燭つけてやる

雪しんしん降れば無口の度がすすむ

過去問わず語らずそんな仲間です

花活けるとてもやさしい瞳で活ける

風を読むことを覚えて熟女たり

岡山県 山 本 玉 恵

ふんわりと情けをつつむ地藏尊

羽根のない女で自問くり返す

下戸で居て上手に酒の句を並べ

ゆつたりと朝の空氣の中に立つ

雪が舞う一途に愛を追う背なりに

岡山県 矢 内 寿 恵 子

我がドラマ十七文字で温まる

一輪のバラにもあった炎の匂い

改革へ左右にゆれるトラの首

活け花の作法も時代を越えている

年金が引き算上手にする暮し

岡山県 小 林 妻 子

茶碗だけ小さくなって喜寿の春

無防備になれて私の冬ごもり

寛大な犬と留守番の悪事

コーヒー店だったカラオケやっている

如月の風古里は銀世界

岡山県 富坂志重

孫叱る加減に迷う祖母の愛
胸の綻び母を尋ねて縫いに行く
号令をかけて動いている私
若い木の告白を聞く森の精
今のうちと言う時間が見当らず

岡山県 二宗吟平

坊坊と五十男を可愛がり
お元氣にと賀状をくれて左様なら
故郷に山川あつて知人なし
入院の従兄はこの連ればかり
狭くとも我が部屋があり本が読め

広島市 森田文

病人の熱弁聞いて軽くなる
告白になんにちかかるチョコレート
自在なる水本性を疑わず
野に放つ火のごと松が枯れてゆく
落ちを付けるわけではないがノーという

竹原市 森井菁居

少年Aも少年Bも童顔で
人工の干潟と見抜く渡り鳥
週刊誌騒がせ別れる気はあるの
いつも通りに還暦の誕生日
こだわりを持つと玉露が美味いなり

竹原市 三宅不朽

妻の背にみちづれとある能登の果て
香林坊安川久留美妻という
平泉寺一揆浄土や苔の海
中谷家朱泥の底をゆれる稗
朝市を諸国の人の肩に触れ

竹原市 古谷節夫

お日さまに感謝野良着が良く似合い
喝采は妻に贈ろう花を添え
自画像の仕上げの色が未だ見えぬ
七人の敵もペースが落ちている
年々歳々お酒が旨くなり

竹原市 時広一路

ドナーカード人の善意が詰め込まれ
チューリップ開いて吉報やつて来る
軽い口軽い錨を持っている
いくつもの愛を重ねてバラの芯
水溜り百面相の僕が居る

竹原市 石原淑子

春風に大根の花愛一途
たわいない会話恋しい単身赴任
まろやかな風に微笑むネギ坊主
新品種チューリップとは言いにくし
二人きりピエロの仮面はずれない

平成の眞ナイフと少年と

広島県 藤 解 静 風

ナイフしか握れぬ少年に育て

げんこつをおろそかにしたばつだろう

握らせてキリからピンにしてもらう

老いらくの恋は低温やけどかな

柳井市 弘 津 柳 慶

策もなく暴力へ教師逃げ歩き

ゆれ動く心へ赤いバラが咲き

ドラマもう終幕となり青春符

倒産へ社長2号邸へ消えたまま

盲愛がひ弱な子供に育てあげ

宇部市 平 田 実 男

快適なトイレ オアシスかも知れぬ

子に見せるほどの背中にまだなれず

ウォーミングアップの妻がいる安堵

打たれても良いが出る杭にはなれず

玉手箱沢山持っている総理

美祢市 安 平 次 弘 道

取り巻きも減り弱点を握られる

ピエロにはすこし鼻が高すぎる

六地蔵雪の温さを知っている

蔵書印亡父も意外なものを読み

深呼吸して落武者として耐える

相和して妻が背を押す上り坂

赤ちゃんが笑って寝てるとんな夢

蝶と会う夢を見ている花の種

雪女のもだえかベタ雪霏々となる

ベレー帽息子も同じ趣味仲間

鳥取市 岩 原 喬 水

老骨に春の名残りが少しある

母ちゃんの苦勞にメダル捧げます

三面鏡苦勞を越えた皸映す

トントんと儲けた株が命取り

火消壺天女に会えばまだ燃える

鳥取市 前 田 一 枝

露天風呂夜空の星が降るよう

ダムの底桜もつぼむ春近し

平社員過疎地でやっと役がつき

水車 詩にならない水不足

間違いの電話にみんなしゃべつちやう

鳥取市 両 川 洋 々

罌掛けたその手で握手しておこう

金メダルやれぬが妻よりがとう

罪深い手でトントんとネギ刻む

善人の祈りへ天が味方せぬ

天罰か阿修羅の海を泳がされ

鳥取市

西村 黙光

飲む打つ買う願っています安楽死

縁切れば呆けてしまふと酒の私語

妻の寝言タイムトンネルくぐらせる

同床異夢妻の眼鏡と度が合わぬ

老いてなお勝手気儘な赤いバラ

鳥取市

武田 帆雀

三人も一人ストーブ温かい

襖は消えたエビソード花になる

紀伊国屋書店で探す俺の骨

老妻が疲れて帰る皿洗う

切っ先は真綿に包み宴の中

鳥取市

植田 一京

山里の春遠からじこぬか雨

仁王門激しい恋の果てくぐり

調子よく翔んで着地が見当らず

九十の母にあげたい金メダル

子守歌ラストに唄ってくれないか

鳥取市

美田 旋風

またひとつ煩惱残り火を灯す

両方の顔立て梯子酒となる

苔の群れ日陰に誇る美の賛歌

母米寿祝う酒樽子らと割り

少年の心をマンガから探す

鳥取市

春木 圭一郎

スナックへ行くと元気になる私

スナックでしんみり話聞くもよし

即興で一句を書いてキープする

デュエットで恋人気分人妻と

勝った日は友とスナックはしごする

鳥取市

倉益 一瑤

雪しんしん姑の欠けたる湯豆腐よ

それぞれに出合いと別れある橋だ

しつかりしろとわたしを叱る子を叱る

地藏描く地藏のぬくみ欲しくって

主義のない口紅薄く薄く塗り

鳥取市

杉本 孝男

音たてて崩れた自信どこへ行く

後継ぎがしつかり者で早く老い

絶妙な間合い拍手を呼ぶ話術

山頂を極めたスリル絵に描けぬ

弱音など吐かぬ親父が涙溜め

鳥取市

坂田 和歌子

お気軽にたつた二人の暮らしです

環瑠の雫は恋の涙かも

君の古巣を聞けば哀しい難民よ

阿弥陀様ほんとに太い首まわり

特別な意味が有るのよあのリボン

倉吉市 野口節子

青写真広げて傘寿まだ達者
昼行灯と言われるほどのことはない
かがり火に照し出された胸の内
放したらどこまで行くかわからない
許すと決めた日から雨もりしなくなる

倉吉市 山本玲子

白旗を振っても所詮妻なんだ
義理チョコも本命となる可能性
すったもんだいい按配な丸になる
タイムバーゲンわたしを煽るスピーカー
一人居て二人と語る寒雀

倉吉市 松本よしえ

少年の心が病んで街は雨
わたくしと一緒にボロになった家
球根が太る為なら花も切る
美人湯と言う銘水を汲みに行く
雪のせて昨日と違う松の所作

倉吉市 最上和枝

嘘を書く時の言葉を選っている
髪切って女一つの覚悟する
髪を茶につっぱっている青リンゴ
忍の字が春咲く力溜めている
愛がある君とベアのバジャマ着る

米子市 鷺見正子

少年よ何故に硝子の靴を履く
盃を持つと可愛い父になる
スキップをしよう娘が嫁に行く
海を見て暮らす引退したマスト
運命やいかにと続く紙芝居

米子市 澤田千春

人垣をくぐって覗く好奇心
児の画いたクレヨンの絵に嘘はない
よろこんだ風が砂絵を画いてゆく
三叉路で突然影が姿消す
もつれ糸とかす仏の手のひらだ

米子市 木村春枝

春一番花のたよりを聞かせてよ
エルニーニョ変らぬ色のさくら待つ
クレヨンで幼心を描いている
団欒の中に孤独がふとよぎる
オリンピック若いパワーの中にいる

米子市 林荒介

ふる里の杜に支配をされている
一本のロープを辿る昨日今日
ふる里の川を跨げば海に出る
今日を書く等身大の日記
爪痕を残す五輪に湧いている

紙かぶと今日の戦は始まった

米子市 林 瑞 枝

幾山河越えてわが娘とひとつ屋根

衣ずれの音して遠いははに逢う

ポインセチアの紅に祝福される椅子

疲れたら山の大樹に逢いに行く

米子市 田 中 亜 弥

山の仏が一番ほめるのはさくら

丸い月貴婦人らしきたたずまい

名水の響きに水車よくまわる

仁王さま善人までもにらみつけ

何もかも気になる人が居て困る

米子市 光 井 玲 子

巣づくりか鴉の声がよくひびく

それからのてん末風に聞けばよい

ここからの踊りは神のてのひらで

画きつくすこのクレヨンが褪せるまで

残り時間ぎりぎりまでも葱刻む

米子市 中 井 ゆ き

クレヨンでまっさき書いたチュウリツプ

クレヨンの二十四色抱いてねた

それからも懲りずに人を好きになる

逢いたくて掌を合わせると母の声

ありがとう言う度かるくなった肩

オルガンの調べで友を見送った

春彼岸 渡る浅瀬を見つめよう

カレンダーの丸の用件何だっけ

作文を読む答弁でうそ寒い

核禁止作ったものは棄てられぬ

米子市 白 根 ふ み

大寒もおだやかなりし古希祝う

ポストまで雪も炎も舞いあがる

雪崩する瞬間 陽のあたる瞬間

義理を欠くものばかり如月に

置きぐすり何もなかったのと言う

米子市 青 戸 田 鶴

桃の花いっぱいもらい嬉しい日

表だけ復興したと神戸から

鬼は外淋しい鬼が家に待つ

若者のように自転車こいでいる

大正の芯は枯らさずもっている

米子市 木 村 富 美 子

そばに居ていつも答えていた響き

どこからか護りつづけている響き

これからの駅は一人で乗り替える

思ひ出の駅に一人でまだ立てぬ

今日も暮れあなたの駅に一歩ずつ

鳥取県 谷口次男

吹雪く中男は野望抱き走る
篝火を焚いて男は野心抱く
放牧の牛がとつても羨し
君の名は知らぬが顔は知っている
老人の髪が黒いと気味悪い

鳥取県 土橋 螢

春光に私の影が落ちている
如月の晴天どうもありがとう
酒のんで完全看護の巣にもどる
くしゃみして大事なことを聞きもらす
白髪に独りの刑の軽さかな

鳥取県 土橋 はるお

ぶくぶくと太った割に銭もなく
亡父さんの農業日誌みて習う
振袖が茶髪の娘には似合うまい
山裾をぐるり七草摘んで来る
大法螺を吹く盃はごめんだよ

鳥取県 土橋 睦子

ブーメラン追いかけている未来の子
再びを蘇らせる本を読む
此処からは頭上注意と貼っておく
葛藤を続けた枕陽に晒す
こっそりと般若心経読んでいる

鳥取県 石尾 かつ乃

思い切り恋をしたのか寒椿
ほどほどの暮しを願う鬼やらい
ときめきの心を生ける花鋏
亡母さんも歩いた道に点く灯り
盃を受けて返して息が合い

鳥取県 西原 艶子

暗い深夜の海にもやがて陽が昇る
ふりしきる雪ひたすらな愛に似て
悲運かも知れず至福かもしれず
耳寄りの話が棘を置いて行き
開放の喜び遠く姑を看る

鳥取県 羽津川 公乃

今年こそその抱負を捨てた軽い肩
到来の銀杏いっぱいどうしよう
計の続く朝を吹っ切る熱いお茶
ささやかな還付一万四千余
七桁に拍車のかかる筆無精

鳥取県 橋本 多哥由

無駄骨と知って敵には立ち向かう
本人は気付いていない幸せよ
無人駅のコスモス誰か待っている
消費税困らぬ人が決めました
国のため死ねる老人などはない

鳥取県 乾 隆 風

鬼は外ウフフと笑う福の神
きびしい風がサラリーを罌り取る
臆病かはつきり言わぬ蝸牛
自販機の酒が花見に連れて行き
ほんとうの自分鏡に捕えたり

鳥取県 上 田 俊 路

禁煙の寂しさという爪楊枝
贅沢に馴染んだころに不況風
沈黙のサーピス欲しいバスター
つま弾きの三味に老妓の惚ぶ恋
金メダルで聞けばこんないい国歌

鳥取県 田 村 き み 子

残り雪椿が一つ落ちてるよ
愛されているのだろうか娘が来ない
反省をしないと猿に負けますよ
豊かさに慣れて気づかぬ赤信号
暇ですか多忙ですかとチュンチュンチュン

鳥取県 堀 寛 子

口を寄せ耳よせ老いを酌みかわす
オツとまた背を丸めてる冬日ざし
くやしいが席譲られてらしく見せ
銀盤のペア完璧すぎるのも悲し
余生にもあつた熟れない端境期

鳥取県 林 露 杖

遠く住む友の計をきく春一番
寺詣り句会とダブリ句会採る
眼の手術よりのひとり寝はや三年
雪の夜のピーポー静寂置いて行き
オリンピア炬燵でみてる大ジャンプ

鳥取県 新 家 完 司

気短な奴がさつさと逝ちちまう
冬の海正面に見て無人駅
君が来て灰色の街ベージュ色
言葉に疲れ名水を汲みに行く
作業服破りまだまだ現役だ

鳥取県 津 村 八 重 子

日記から友の笑顔がういてくる
娘の便り故郷をしのぶ文字ならび
スキンシップ孫と風船とばせ合う
母の腕八十路すぎてもおとろえぬ
お地蔵にいびつの団子笑われる

鳥取県 太 田 幸 枝

悲しみも嬉し涙も吸う枕
喜寿の坂家族放任楽に生き
篝火の向こう一目でほれた女
盃を一度交わしただけの恋
愛情に飢えた心が牙をむく

鳥取県 権代康女

幸せな気分になれる祝い唄

晴れ着には母の慈愛がこめてあり

虎の子がとっても素敵な知恵を出す

宿命の糸を長男背負つて

長男の重荷になって生きのびる

鳥取県 西川和子

不覚にも後に戻れぬ杯を受け

やっぱりか またか そうかとトツプ記事

ばたもちも落ちては来ない棚ばかり

エルニーニョ花も出番を思案する

見届けるまでは笑顔をくずせない

鳥取県 さえきやえ

悠々と別ればなしや花の下

別れはさらり春一番の海に佇つ

雪だるまごらんください仏さま

故郷の山に悲しみ埋めてくる

叙位叙勲死んで花見はできませぬ

松江市 舟木与根一

隣家へも声張りあげる鬼は外

福は内寅はやっぱりねこ科です

手酌してまで飲み代を払いに行き

安心をするほど雪がまだ降らぬ

儲けては居そうにみえぬ出雲弁

松江市 川本 畔

沈黙をあなたとわかり合っている

厳しさをやさしくみせる男の手

落とされる度に浮力がついてくる

種あかししないでおこう好きな人

特大の夕日に負けて座り込む

松江市 佐野木 みえ

誘われて大島に飛ぶ椿見に

六十路の手習い遙か道遠し

不整脈寒中水泳見て怯む

節分の鬼の念仏聞こえます

子の電話やっぱり風邪を見破られ

出雲市 尼 れいじ

パンと麺好きで減反せまられる

ブランドが似合わぬ妻でいて嬉し

暦には無い祝日に朱を入れる

ペルシャ猫らしい言葉が通じない

下町のあなたに似合っている電車

出雲市 板垣 夢酔

いま無人駅でも変りない桜花

上気冬の心が洗われる

底割れと知らずに注ぐ恋もあり

きまじめへそんなことかと友笑い

桜咲く頃にと言ってはや他界

出雲市 竹 治 ちかし

四季映す海には父母の顔があり
若くない齡ブリクラに知らされる
山奥の雪は汚れぬまま溶ける
香水よりも母さんのしゃばんの香
それぞれの曜日に合った顔で起き

出雲市 久 谷 まこと

表現をどう変えようと損は損
カレンダー一枚めぐり春迎え
一日が素敵だったと書いておく
忠告はこっそりすると聞いたふり
凶のクジ引くのも初春の運だめし

出雲市 富 田 蘭 水

年男豆をにぎって決意する
招かない人が一番前にいる
のめもせぬ山ほどの薬お大事に
暗い世か性善の説ゆらいでる
よいお酒誰も丸めて手を打たせ

出雲市 吉 岡 きみえ

耳鳴りの底には春の音がする
極楽鳥朝の時計は止めておく
野水仙四五本失敬して帰る
気どらない毛糸の帽子よく似合う
長い人生パッと火のつくこともある

出雲市 園 山 多賀子

丑は未だ長閑に反芻寅の春
埴輪に瞳入れたら未来見えますか
皿一枚欠けて二枚の皿を購う
押しつけの善意は宙に浮いたまま
娘に賭ける夢温める春炬燵

出雲市 小 白 金 房 子

面影を抱く亡母の数え唄
お祈りへ神も仏も近くなり
着て脱いで一人芝居の春を買う
万物の喜び春の音がする
いい朝だ老いた心の皺をのす

出雲市 岸 桂 子

親の目に鷹とうつつっているトンビ
失敗は覚悟で跳んだ水たまり
休みたい靴光らせて送り出す
嘘一つ鏡を少し曇らせる
サクラサク少年の汽車走り出す

出雲市 小 玉 満 江

ご先祖の土地へ祇園社建つ話
たそがれて弾みのつかぬ毬を抱く
広げたら大風呂敷が畳めない
年号も分からぬ祖先へ手向け花
先生を殺す世の中おどましや

出雲市 石倉 芙佐子

春爛漫古希の坂にも桜咲く
落款は無くても好きな春の絵に

島根県 松本文子

しばらくは命預ける花の島
啄木鳥はこつこつこつと話し下手
娘の旅に嵐の雲は出ぬように

島根県 西村 早苗

雛の灯へひっそり雪か雨かしら
誰か来る素早くかくす物をもち
洋酒棚の上で置き薬がねむり
すんなりと帯がまとって艶っぽい

島根県 森 茂美

山彦の誰かを呼んでいるらしい

島根県 小砂 白汀

六人の子のうち一人ユダもよし
天網に裂け目あったかビッグバン
蟪蛄の斧かも知れぬ拒薬症
マインドコンされております薬漬け
夕食はゆっくり物に動じない

島根県 堀 江 芳子

島根県 榊 原 秀子

壁も無口雪しんしんとまだしんしん
リフォームをする気でためている古着
卒業の日を思い出す春の雪

島根県 堀 江 正朗

ステンドグラス深い祈りへ射す光
いつからか薄れた夢を描きなのおす

何のために生きているのかつい忘れ
暦一枚めくって少し身構える
何も要らぬ筈の両手を差し出す
沈丁花泣き顔などは似合わない
包丁を研いでキュウリの試し切り

職安を出れば眩しい雪の白

減反も話題にのらぬ過疎の町

長寿村売りものにして進む過疎

物忘れ好んでしてる訳じゃない

アルバムに嬉しいドラマ一つ増え

ほっとして夫と腕組む春の風

豌豆の筋とりエプロンして夫も

宇宙人の発信音が耳が鳴る

うたた寝も楽には見えぬ二日酔い

怒鳴られる時がいちばん幸せか

ほろ酔うて点字も踊る夢の国

夢にでも出て来い見えた日の桜

雑草も緑か生き生き指先に

軒に來た雀ひとこえ久し振り

道連れの杖を鳴らして桜土手

島根県 伊藤 寿美

置き忘れた地図を探しに行く帽子
夢の跡綴って自分史を閉じる

夜神楽の灯を眼裏に沈む村
胃カメラを老夫と一緒にのみに行く
イーグルス聞くジーンズは履けぬけど

島根県 藤原 鈴江

好きな歌うたって聞いて夜が更ける

寅年がこわい私はうさぎ歳

昔の恋を恋してるなどと笑い合い

亡き人を死ぬまで恋しい恋しいと

老いたればテレビドラマに夢中です

香川県 木村 あきら

シワ幾つ増やし我が城守り抜く

馬鹿になりきると明るい貌になる

繁栄の陰に先祖の汗がある

三猿で家中まるく丸く棲む

夕茜まだ人生に薄明り

香川県 工藤 吟笑

亡母の声聞こえて来そう月の冴え

明日ありと信じて生きる冬の蠅

お花見を早目に済ませ早稲田植え

蝶々も忙しそうに花を追う

定年でこれからじっくり田を守る

香川県 川崎 ひかり

好きになる事に理屈などいらぬ
笑いジワ中に涙の過去がある

みんなみんなお手々ないで生きている
酒絶ちで夫も娘の春願う
君が代に直立不動の老父の影

香川県 池内 かおり

待望の天使産湯で大欠伸

リハビリの老母を信じた応援歌

淡海節はじめて知った亡父の唄

雪ん子に見とれ感動した第九

日本の良さ思い出す木遣り唄

香川県 山地 マツエ

スーパールの牡蠣ふるりの海を恋う

音たてて鍋洗ってる妻の乱

法要に句会一つをポイコット

化粧落す今日の戦をよしとする

軒下の風は噂が好きらしい

松山市 丹下 美津子

うっかりの欠伸捕えているカメラ

遺言状隠していそう玉手箱

縁起担ぐ妻でいちいち暦繰る

亡父の布石あって見事な金メダル

応援席の母も泣いてる金メダル

松山市 宮尾 みのり

高知市 北川 竹萌

はめる時少し言葉を足しておく

春財布これも一つの浪費癖

伊子人の自嘲赤シャツにくめない

この程度だったと思う齢になり

割り切って生きる山坂越えてきた

今治市 越智 一水

安らぎを求めて水の音を聞く

言いたいこと半分言うて丁度よし

清貧を愛して白い花が好き

鼻に雪残して野仏早春譜

みそ汁の味ほめ息子の嫁をほめ

今治市 野村 京子

袋は空っぱドンドン子が抜ける

セロテープでつないでもろい糸電話

片袖を濡らして恋を病み続け

倦怠期修正液が乾かない

省略の料理している赤い爪

今治市 矢野 佳雲

失敗のない日なかった五十年

鰻屋のおいでおいでが換気扇

あけくれに夫婦の役を演じきる

平気平気と逃げ口のある煙

お役所が事務的に聞く君の名は

見せまいと老いっばいの齢を見せ

薔薇深紅眺めて過去は語らない

日々企画聊か老いが染みてくる

勧めらる足場で常に身を修め

角樽を残して二月迎えたり

高知県 小澤 幸泉

娘の寝顔十五の春はまだとお

日の丸がひたすら嫌いだった亡父

脱線もできぬレールを敷き過ぎる

るり色のグラス ストロ―二本差し

本音には別の酒席が用意され

高知県 赤川 菊野

気品ある老女に出会う千枚田

御先祖の返事のように灯がゆれる

肩書きをつけて仲間の群を出る

古希すぎた姑がピアスをすると言う

追憶のかなたに丸いまるい月

唐津市 田口 虹汀

凡人になれと難儀なご注文

嫁ぐ孫へ謡い納める御代の春

等級を無理につけると座が白む

大学の力が邪魔になる法話

北野から飛んで来たてう梅と竹ち

唐津市 仁部 四郎

不意討ちに老人会の誘い来る
寄付名簿氏名正しく書かれてる

教室をよぎる歴史の隙間風

叱るのを忘れたいのさ教員は

菜の花のニュースが自慢ローカル紙

唐津市 久保 正 剣

脱税の凡打司直に捕球され

校歌の輪小さくなったクラス会

駄目な句を作る生甲斐妻に説く

水面下の折衝それも談合だ

接待に上手に負ける技を持ち

唐津市 山門 幸 夫

故郷の母なる川は死に失せり

雪煙 世界は一つ輪になって

釣り釣られ仲よくくぐるムシヨの門

トッパたち泳ぎ回って掴む藁

食いのにされた振りして食っている

唐津市 市丸 晴 翠

言い勝って淋しく昼の月を見る

検察に托した夜明け前のメス

次世紀に虹を懸けたい長野から

風よけの父の背中が遠くなる

ガラス戸の老婆まざれない私

唐津市 山門 タミ

梅満開鳩も雀も彩を添え

山里に母なる川のせせらぎが

小春日に心の窓を開け放ち

孫からの義理チョコ爺は婆に分け

無人駅一人二人へすきま風

熊本市 永田 俊子

紅椿に積もった雪の淡い恋

穢れなきブライド哀し白椿

葉牡丹が抱く一志の紅の渦

長幼序失くしてわめく葱坊主

武器捨てた子孫がナイフ持ち歩き

熊本市 高野 宵草

他人には弱点かばい合う夫婦

楽しさやころおきなく酔いが出る

もごもごの弔辞尿意を我慢する

ピーナツをひとつぶずつの本を読み

戦争をゲームと思う子等遊ぶ

熊本市 岩切 康子

筆ペンの優しい葉書友元気

主婦業をさぼって趣味を挟み込み

カラオケ会票田らしい苗育ち

目が覚めば今何時かと聴き合いし

蛸壺の水抜き孔を知る恐さ

仙台市 川村映輝

備忘録のつもりの日記六十年
リハビリのつもりで歩く青い空
確定申告わずかながらも納税す
冬期五輪フライングで失格す

横浜市 後藤早智

雪の日に家族の絆見つめ合う
陽のあたる場所を知ってる温い人
帰省する子を花々が出迎える
十三歳犯罪年齢また下がり

静岡市 安本晃授

シンプルな曲だ骨身が溶けそうだ
残り火が咄嗟に燃える夜のしじま
結着をつける姿勢で銅鑼が鳴る
春めいて先走りする風の私語

羽咋市 三宅ろ亭

小さくとも父子で咲かせた金メダル
長野五輪さすがと思う行事ぶり
たまに出る式ヘスピーチ頼まれて
村のどか住いも変らぬことばかり

富山市 島ひかる

裏日本表日本のわかる旅
離乳食遠くて近い日を想う
いかめしい顔が新芽に水をやり
花手桶 石とはなしが尽きぬまま

大阪市 川端一步

太陽の時間厳守に叱られる
直球のサインばかりで疲れます
軋む音ときどきしたが折れもせず
美しい人指の先まで美しい

大阪市 清水絹子

山一倒産西瓜も店に寒の入り
免許証あれもこれもでフリーター
夫の天ぷらいいけど山の洗い物
無器用な父にも菊の一家言

大阪市 小糸昭子

肖像画貴方あんなに優しいの
遠慮がちお地藏様の冬帽子
鎌月をとくにガラスの器と見
掃除機のように飲み込む肝っ玉

大阪市 川原章久

真夜中に家族が寄って泣く個室（入院中）
病院で久々に見る茜雲
凍て月がいびつに映る水溜り
何時までも若いつもりの赤いシャツ

堺市 黒田真砂

入院の夫を見舞うシクラメン
入院三月いつしか街は春の彩
孫入学うれしい春がもう周辺
病む夫に想いをはせる沈丁花

堺市 柿花 紀美女

同年の友逝き背を押す寒い風

椅子浅くかけて出方を待っている

倅せは三人の子は父母となり

時々は考えて見る終りの日

豊中市 湯浅馬洗

迷走の子供に答え書けぬ春

新世紀へ平和アピール雪童（長野五輪 三句）

日の丸団 入場曲は県民歌

ライバルは自分の中と金清水

池田市 岡本 吉太郎

オリンピック寒さ吹きとぶ土俵入り

二階の灯今夜も孫が徹夜らし

人生の曲り角にてふと迷う

オリンピック金取る度に涙する

守口市 結城 君子

落葉樹と表札がかげ散り急ぐ

仙人掌の咽の渴きを誰が知る

常夏の国へは行かぬ梅の花

星にだけ懺悔をしてる月見草

寝屋川市 柴田 英壬子

露のとう一つみつけた墓参り

メロン用の匙でおいしくないメロン

足袋の裏白く吉村雄輝舞う（享年七十四）

決心を誰にも言わぬブロッコリー

寝屋川市 平松 かすみ

純白の翼をつけてランドセル

気を病んで連続ドラマ見忘れる

夫の留守甘栗テレビ止められず

ストライキしそうな腰へハリ薬

寝屋川市 岸野 あやめ

三十の子を原石と思う母

わが遺灰撒きたし風と山清水

泰山の如しと言うて何もせず

見たものを何でも褒める久しぶり

枚方市 二宮 山久

年だなあ薬嫌いが飲む薬

ローン終えちよつぱり増えたお小遣い

血糖値下らぬままで飲むお酒

残業の帰り待ってた丸い月

東大阪市 指宿 千枝子

苦楽無き浄土の夢を見る老父

一月の雪催いの日孫産まる

水仙の姿に今日はシャンとして

メイクしても分かるらし席譲られる

八尾市 神原 まさと

お神楽の鈴にジングルベルと孫

定年で羽根むしられた蜜蜂に

南天に雪ある風情歩が止まる

七回忌亡母は曾孫を皆知らず

河内長野市 植村喜代

目が乾く辛い涙の流れた跡
里帰り喋り疲れて起きてこず

孫一人囲んで大人遊ばれる
二人の娘お産結婚忙しい

和泉市 岡井やすお

人間天皇五輪開会御宣言

選手一役員五参加にも意義

オリンピック君の努力のためにある
オリンピック競う楽しさ子に教え

奈良市 米田恭昌

傷心の下戸梯子している夜寒

横文字があふれて演歌追いやられ

名優のキラリ光った汚れ役

張り子の虎も咆えるポーズを考える

大和郡山市 柿原慧心

名人の秘密は陰でする努力

日が暮れて男ひとりの中之島

孫つれて春を探しに河川敷

定年にメガネはずして暮してる

大和高田市 岸本豊平次

葉芽花芽膨らみ落ち葉朽ちてくる

会葬のたまりに懷炉つけて佇ち

折角の煮凝りチンにかけて溶け

日の丸を見上げる茶髪のコメダル

海南市 三宅保州

花道はそんなに長く続かない
忙しい振りには欠かせない手帳

頼もうと言えばどれれと言う和尚
それにしてもバスのステップ高すぎる

和歌山市 田中みね

手作りに孫がばくつく離乳食

呑むもよし陽気になれるお酒なら

いつだって君の味方と憎いひと
平和なり今夜のおかず何にしよ

和歌山市 古久保和子

ケイタイ電話めぐら探しているスズメ

家中の風邪へ代表してお医者

お茶漬を済ませてついた人心地

父の靴チャップリンより重そうだ

西宮市 菊池トミエ

微笑んであなたの嘘を聞いている

神だのみ今年は一つにして置こう

門限を忘れて踊るシンデレラ

早咲きの水仙手折り亡母供養

西宮市 刈田泰司

顕示欲あってまだまだ引けぬ幕

煙幕を張ってひとまず逃げておく

宴会のカラオケぬけて湯にひたり

仕合わせになります顔の披露宴

伊丹市 山崎 君子

臘梅の匂いも入れる小豆がゆ
誕生日倅せに充つ身のほとり
散歩みち老母の心通う花
老いらくの恋花柄の袋さげ

宝塚市 吉田 笑女

寒明けて少しふくらむ柳の芽
寒あけて朝の陽ざしが目にしみる
言うだけは言わねば親の気が済まぬ
ゆっくりと指を折ってる老母の年

宝塚市 上田 佳秋

仏壇へ留守をしますと入院日
冷酷に動脈硬化を言う主治医
慰めのナースのジョークに救われる
波乱万丈古稀になってもまだ続く

川西市 松本 ただし

妄想も誤解もあって雪溶ける
水すまし位の波紋いつも描く
この辺で落ちをつけねばならぬ嘘
凡人の足踏みだけのワンカッブ

芦屋市 黒田 能子

決められた通り歩いてきた挫折
送迎のバスでホテルの隣まで
足音の会いたい人に逢いに行く
堂々めぐり足音が聞こえない

姫路市 古川 奮水

しばらくは書店で時間稼ぎする
乳母車電車を見せて子守する
リハビリは明日の指に鶴を折る
アリゾナの自然を見せてセスナ乗る

岡山市 川端 柳子

オヤお前こんなところにも居たホクロ
鉢の芽と心一つに春を待つ
愛の巣へ泊り込んで風邪の神
うれしくて泣いてしまうの高島田

岡山県 江口 有一朗

埋没地雷のように突然子の荒れる
無造作に むかつく使う子ら思う
塾かよい夕陽も見えない子の暮し
老いに無理と知って無理した罰を受け

竹原市 岩本 笑子

しんしんしん長野の雪は熱いです
言わないでおこうエブロンたて結び
三歳のままの子と折る千羽鶴
通リゃんせ逢いたい人がいるのです

鳥取市 石上 悦子

生も死も日の出日の入り駒送り
口とじる糊は諭吉のマークつき
欠席のつもりが中止との知らせ
補聴器のように遠慮のラジオ党

倉吉市 淡路 ゆり子

潤れること知らない母の愛を汲む
君の手話明日に生きる道しるべ
仏壇にわたしの席が空けてある
一椀の飯に笑顔を忘れない

倉吉市 米田 幸子

女房よめかして今日はどこへ行く
いたずらに汗は流さぬ母の辞書
パパとママ夢も希望もてんこ盛り
一徹で情けにもろい寅と居る

米子市 政岡 日枝子

喪の家で戸もひっそりと音を吞む
華やかでないが好かれるさくらんぼ
束の間の夢をさくらんぼうと見る
万緑芽生え子供のはしゃぐ声響く

米子市 永井 三津子

今年こそ女のロマン奏でたい
なにくそが病魔の前で金縛り
五七五へ声に出せない声を書く
しがらみを両手に抱いて夢探す

鳥取県 黒田 くに子

失恋のたびに口紅濃くなる
口紅が花びらのようデスマスク
空想を破り電話のベルがなり
姑の法事済んで安堵の風邪を引き

鳥取県 石谷 美恵子

事の次第は盃だけが知っている
チャンス待つ男寝た振り死んだ振り
年金の枠で奏でる春の曲
眼に見える距離に居ながら音がない

鳥取県 幸家 單車

口説かれて一度は娘拗ねて見る
口説かれた夫に離婚を切り出され
しぶしぶと条件を吞む負け戦
対立の中で流れる恋もある

鳥取県 乾 喜与志

爛そえて炬燵の上の幸せな
孫からの手紙に老いをはげまされ
惜しまれもする桜花また咲いて
小朝すてきな婆さんを爺さんを

松江市 安食 友子

イニシャルを縫い取りしても遊ぶ傘
老骨は腹八分なら悟り切る
病床のただ鼻孔だけ見て一夜
ママさんの素顔見ながら遠ざかる

松江市 浦辺 静江

電話してお互い体調案じあい
わだかまり残し座を引く酒の量
周囲の目つい口下手になっている
道端でおしゃべりが過ぎ忘れ物

香川県 成重放任

没句とて作った時は四苦八苦
気安さに話す今更名が聞けず
狙の鯉の氣持で手術台

回復の兆しに笑顔取り戻し

北九州市 梅田宣司

楽しくてときどき遺書をかき変える

喜寿の坂枯葉の舞を演じきる
顔色が読めぬ化粧が厚いから

祝電を見本通りに打って来た

唐津市 山口高明

騙される方も悪いと詐欺師殿

新婚も三月過ぎたら口答え

籠絡の老母も三度目出し渋る

呷る酒やめて嗜む年になる

水煙抄 (追加)

唐津市 岩崎 實

格安の箱売り買ってもてあまし
梅が香に誘われている外出着

福岡県 西本 保夫

目標の無い中学生をあわれとも
現代の教師は敬う気になれず

鳥取市 宮脇道子
炬燵にてイメージしてみるオリンピック

早咲きの桃と雛壇初節句

生駒市 半澤 無眼子

六道の角で牛車に乗り遅れ
正一位猫も真似する鳥居数

この一句

壁に塗る土にも雑草根を下ろし

清水白柳子
(後に改め白柳)

この句が私の今日ある柳宏子を生み出してくれた忘れる
ことの出来ない一句である。

一見何の変哲もないよく見受けられた建築現場の一隅に
盛られた壁土(最近壁もモルタル、壁紙仕上りなどで特に
都会では見られなくなっているが……)に芽生えている雑
草の逞しさ、生きることの尊さを教えられた、私にとって
生涯忘れ得ぬ一句である。終戦後十年、当時の苦しい生活、
追いつめられた小さな町工場の逼迫の苦境から立直るきつ
かけをくれた、私にとって川柳教の神の教示と受けとめて
いる一句である。

時は昭和二十九年十二月、場所は大阪阿倍野区北畠の阿
部野神社復興建築現場、人は棟梁宮大工清水白柳子、まさ
にドラマめいた川柳との出逢いであった。私にとって忘れ
ることのない、まさにこの一句である。
(西田柳宏子)

自選集

小西雄々

藤村 女

地の声をたまに邪魔する天の声
ライバルに肩貸すほどの余裕もつ
スリル追い安定剤を手放さぬ
妻風邪で倒れて困ることばかり
肩すかし愛の終点知らすよう

辻 白溪子

波多野五楽庵

時間待ちとはつきり解っている漫画
事情どうあろうと許す訳でない
よごれてる軍手並べて乾してある
失恋の涙を溜めているグラス
こけそうな時に握った男の手

月 原 宵 明

金 井 文 秋

長野への声援小さい義理を欠き
元来は淋しがりやであるピエロ
造反へ電話ボックス火をつける
先生とその日暮しが呼ばれてる
鯨尺今は背を搔くためのもの

合格が花より先に春をくれ
雪溶けて飛瀑ふたたび春の水
忘れてたやさしさに合う野のすみれ
よもぎつむ春の孤独にひたりつつ
母偲び草餅つくる仏の日
志野茶碗このひとときのまろやかさ
メモ通り歩けなかった花の鉢
音信の途絶えた赤いハイネック
簡単に一人殺した紙つぶて
ラストオーダーまた悲しみを追加する
足に自信あっても手摺持つて降り
努力せず才能がない運がない
齒の浮くようなお世辞は鼻で返事する
コマーシャル服は男の顔だとさ
今の子供に硬すぎる粟おこし

遠山可住

天地人 春がうれしい老いの旅
振り分けの荷物の母はもう来ない
甘塩の鮭では鮭の味がせぬ
宿題にすると百点とるのだが
雑草の道を子供に残しとく

正本水客

豊かさの中に育った不幸せ
散ることも予定の中に入れていた
手のひらを太陽にかざして生きている
月並なことをならべて義理がすみ
みかん好きな妻の食後のにぎやかに

野田素身郎

今日は家に籠っていると雪が降る
七十が近づきすぎになる弱気
覚えたての言葉で反抗三つの児
今はもう倅のお古で十二分
七桁番号麻痺した手には少し酷

西田柳宏子

手作りのチョコ嬉しいなバレンタイン
物言えば涙になるから怖い顔
チャンスまだあるさと大器晩成型
万歩計貰った当座だけ歩き
色違いパッチリ決めてペアルック

小林由多香

祝日もいろいろみどり海の日よ
悔しいが今日は涙を飲んでおく
たくましいだけで情けも趣味もない
神さまを嫌いになった不しあわせ
若者がまた出ていった過疎の春

野村太茂津

表紙絵で屑籠行きを決めている
時は流れて息子定年孫新社員
祭日はサムライ国旗出してある
町内の評判右翼という噂
開き直って仰いでるのは日章旗

藤井明朗

長野五輪演出見事聖火燃ゆ
長野五輪選手の意地が咲くメダル
厳しさに耐える決意の山男
介護保険受けぬ「川柳」の意地がある
耳遠くなったと話の座をはずし

松川杜的

朝の髻今日することを考える
冠頭は寅の絵から日記帳
朝刊も夕刊も第一面はみな「NAGANO」
落日も日の出も近頃みた事がない
天そばのうまいお店へバスで行く

奥谷弘朗

捕虜四年パンの重さを目ではかり
経験がものを言ってる目分量
お似合いと言われて姪をあわてさせ
見当でものを言うのが玉にきず
ゆとりあるお人や苦笑だけですみ

黒川紫香

ファイトファイト親子で土堤を走ってる
金策で走る周囲はビルばかり
花落ちて梅はいつもの顔になる
思案にあまり鉛筆転ばせる
シャブシャブの湯気に年金解け出した

恒松町紅

口下手のマイクの喉に聞き惚れる
父祖からの土蔵使えぬ古道具
忙しい日だなどと思う電話ベル
遊郭を知らぬ世代と酌み交わす
少年の貧しい心茜空

阿萬萬的

微熱押して義理を欠かせぬ雨を行く
おくやみの言葉へ妻の知恵も借り
流行には弱い頑固な僕と知る
あいまいな自分が嫌な夜の冷え
八十路とか福の神さえそっぽ向く

高杉鬼遊

火遊びでないぞ聖火の大リレー
いい人に囲まれ墮落しています
すすき野が多弁になってくる風よ
風有情わらいころげて落ちてゆく
いちにちを生きて食う寝るほかになし

八木千代

風邪が残って椿も枝に散らぬまま
咳止まぬのも私の気ままから
文学の熱と思えば納得する
薬より花がききそう薔薇を買う
チケットが枕の横で揺れている

河内天笑

転んでも絵になるキャンデロロの髭
花粉如きに身動きがとれぬなり
大きいこと言うてしもうて淋しけれ
鳩尾に怒りを溜めんよう吠える
ええ風が吹いて迷わずゴーサイン

橘高薫風

月に添いし宵の明星いま米寿（月は路郎）
わが生に韃靼の火と閻伽の水（修二会）
さくらほどの上手なさようならがある
この齢にぺんぺん草の風が見え
仏の座ここに好啓いずれに藻介

川柳太平記 (239)

川柳の群像

傍島静馬

東野 大八

「隠岐の島の国民宿舍の朝の六時頃、私（西尾栗）の寢床の隣で、素裸の身体を握り拳で叩く人がいた。

「アンタ、何してんねん」

「これが私の健康法でんねん」

という胸から腹から脚から真っ赤になるまでリズムをつけて叩いている人は、静馬の父さんだった。白髪まじりのチョビ髭の口を一寸尖らせて、得意然と話す静馬さんは全く「お父さん」という親しさである。（略）

静馬さんは明治三十三年一月二日のお生れだったから、享年八十七歳になられる。既に八年前から心筋梗塞で入院をくり返されて川柳から遠ざかっていられたが、入院中に『柳行李』という変わった名の句集を発刊されたので、私達はびっくりした。その句集は、

几帳面なお父さんらしく、川柳に手を染めた昭和二十八年二月からの入選句と天、地、人、特選になった句を分類して、特選句は選者の評も載せて正確を期した句集である。

お父さんは、常に蝶ネクタイが好きで、キツチリ結び、風貌もまた立派な英国紳士で、瘦身のプロポジションは清潔そのものであった。お父さんからくる便りや投句の文字は、一画一画おろそかにしない固い性格そのものの文字で、一見して静馬さんを思い出される文字であった。

今は亡き吉田圭井堂さんとは大の仲良しではた目でも良い朋友だなあ、と羨ましく見たものであった。牛は牛連れて同じ年頃の圭井堂・多久志・小松園・川村好郎・西尾栗と柳々会という会を作り、各地の温泉めぐりを楽

しんだものである。

静馬さんは昭和四十五年頃から恩師麻生路郎著の句集『旅人』以後の路郎作品を労をいとわず摘出して下さった。そして昭和五十二年五月発行の『旅人』普及版を出すことができたのは静馬さんのおかげである。

句集『柳行李』の二枚目の写真版に、昭和三十七年九月の路郎先生からの葉書の一文をコピーで掲載している。それは川柳雑誌当時の九月の川柳忌の句会を期して新選者を発表する慣わしであったので、その報せの葉書である。昭和二十八年からはじめて九年の間に公的選者になられたことは刮目に価する進歩であった」（以下略）（西尾栗悼文）

「思えば約八年前、傍島静馬氏は心筋ここのため倒れ、ご家族の懸命の看護のおかげで一時は回復されたが、寝たきりのまま肺炎、心不全のため、遂に昭和六十一年四月五日、逝去された。行年八十六歳（略）」

私（川村好郎）は、永い間路郎門下生として静馬さんに教えられることが多かった。静馬さんは実直丁寧、万事熱心な性格で、書体も正確で、句会にもきちんと折目正しく服装を整え、誰からも英国紳士といわれた。そういう人だから本社句会へは月一回も欠かすこ

となく、万障くり合わせて二十余年間出席をつづけ、川柳塔社から表彰をうけた。

句風は須崎豆秋を師とし、軽妙な作品が多かった。選者が披露されるとき、ああ静馬さんの句だとすぐ判ったほど、独自の面白い句を作っていた。病臥中も電話で句を話してくれたことがしばしばであった。静馬さんは愉しく川柳に生き、川柳によって生かされた半生であった（川村好郎悼文）

無類の旅好きで、同じ旅好きの西尾菜・若本多久志・吉田圭井堂・菊沢小松園・松江梅里と元氣な昭和40年代のころは各地へ遊び回り、旅の句も多かったようだ。

古い『川柳雑誌』に『不朽洞の人々』という写真入りの会員紹介欄があった。そこに上もののダブルの背広に、半ば白頭の毛髪を小気味よくわけ、めがね姿も颯爽たるこの人物の大きな写真が載っている。添えられている

あきらめてさとり開いた顔でなし 静馬
『柳誌、或いは新聞紙上などに発表された作品を見て、川柳って面白そうだなーこんなものならおれだってできるーと誰もが簡単に思っらしいが、さて作って見ようとペンを持ったものの、思っようにならぬのが川柳である。自分もその中の一人で、五十歳を過ぎて

からの遅い入門で、もう二十数年にもなるが未だにこれといった自信作もなく、依然として低迷状態なのを甚だ遺憾と思っている。

自分は平生、折ある毎に、出来るだけ多くの他人の句を鑑賞し、かつ自身でもできるだけ多く作句するように心がけている。川柳のネタはどこにでもあり、われわれ日常生活の身辺にもゴマンと転っており、それをうまく拾いあげるのも勉強の一つだと思って氣をつけている。たまたまこれと思っネタにぶつかった時は、すぐその場で十七字にまとめ、メモするように努めているが、これらの蓄積が句会の課題吟などに応用して大いに役立っている。

舌打ちで捨てた馬券に散るサクラ
を川柳塔誌の月例会に「舌」との席題で入選した句だが、これは選者が題に対する広い解釈による温い配慮の結果で、厳密に舌そのものの出題からすれば没となる。（自分がもし選者だったら、この出題と作句を黙認するだろうか）としみじみと考えた。

プロボーズ声にもならず渴く舌
もう一本つけさすつもり舌鼓
というのもその時に入選した作品だが、私自身ひそかに吟味を試みたのである（昭50『川柳塔』誌ケース・バイ・ケース 傍島静馬）

大洋織物顧問だったこの人の川柳時代は、元氣旺盛の七十代だっただけに、川柳への肩入れも一方ならずで、路郎門下の公選の選者指名が余程うれしかったらしく、麻生路郎『旅人』以後の作品紹介を三年余も連載している。この几帳面な摘出ぶり、路郎一門を喜ばせたが、この折、筆者も『路郎物語』を連載中であつただけに錦上添花を添えて貰う氣分で、張り切つて執筆したものだ。

『昭和46年秋、コーポ八階に移つたが、この高所での朝の日の出はすばらしく、明け方雲海をついて昇天する莊嚴な風景はすばらしく印象的で、なんとかこの壮大な一幅を句にせんものと、二、三の処へ投書したが、すべて没のものにならず、結局辞書から『峙』なる文字をみつめて苦心の一句

雲海に峙つ山頂 島となる

静馬

の一句が運よく入選した喜びはひとしおだった（『川柳塔』昭和50年春）

というエッセイを当時の『川柳塔』に書いているが、この人は決してひとかどの柳論をヒレキしなかつた謹言居士のこの人物らしいまこと得難い好紳士の「お父さん」だった。

▼次号は「津川 紫吻」

古川柳歳時記

16

『鶯・雲雀・燕』

清 博 美

○ 鶯

鶯には、はるどり、はるつげどり、うたよみどり、きょうよみどり、においどり、ひとくどり、もちどり、はなみどり、あたごどり等々多くの異称がある。

日本の飼い鳥としては、代表的な小鳥でもある。

江戸では根岸（上野の北、谷中の西）が、鶯の名所とされ、初音の里とも称されていた。伝えられているところによると、上野の院主公弁法親王が、根岸の鶯は詠があつて面白くないといので、元禄の頃、京都から三千五百羽をとりよせて、これを放ったのだという。

『江戸砂子』は、「凡関東の諸鳥の声はみなだみたるといへり。此里の鶯は元禄のころ御門主様より上方のうぐひすをあまた放させ

られしその卵なるゆへ、声だみざるといふ」と記し、『四時遊観録』も鶯谷の鶯について、

「谷中三崎の大通、法住寺の向ふ、寺院七ヶ所ある谷也、東叡御門主様より京都の鶯を放しおかる、関東は諸鳥の囀りともに詠りあれども、当所の鶯はなまらずといへり根岸入谷の辺すべて初音早し」とある。

関東の鶯に、はたしてだみた詠があつたかどうかは、不明だがともかくもそのように書かれている。

今言われる、鶯谷という地名も、この鶯を放つた故事に由来しているのであろう。

『江戸塵拾』には、「東叡山の麓根岸の里に、松川伊助というもの、此所の鶯の音を聞て、はじめて鶯笛を作る。子飼のうぐひすのつけ声と成に、至てよし、是より起りて、小

児のもてあそびとはなれり、元禄の初に、御門主様、関東の鶯はだみたる声ありとて、上方より鶯あまた御取寄遊され、此所に放さしめ給ふ、依て、当所の鶯声だみざるよし、松川伊助、偕こそ此所のうぐひすの音にて笛を作り、附声とせしなり、だみたるとはなまる事なり、西行の歌に、うぐひすは田舎の谷の巣なれどもだみたる音をは鳴ぬなりけり」とも。

*

鶯も阪東声わわらわれる

宝八宮

— 阪東声は関東詠。

鶯の片言梅ハ笑ひ出し

三六 10

— 最初から上手にホーホケキヨとは鳴けない。笑うは、梅の花がほころびることとも意味している。

うぐひすハ上手にあるく梅の枝

傍四 26

— まさに梅に鶯。梅には小枝が多い。

鶯が能くハかごによくが出来

宝九 智 1

— 飼つた鶯が良いといひ籠に入れてやりたくなる。けだし人情。

鶯へすり子木出シてのみこませ

宝十 義 2

— すり餌を作る。

梅に鶯さくらに生酔なり

一八 27

— 花見の泥酔者

うぐひすのこい取りに出ル美しひ

安五 仁 4

鶯のくそで小ざむハ銭もふけ

傍一 3

—肥取り。女性が鶯の糞を化粧に使つ。小
さむは小侍で旗本などの雇少年。

明元仁1

鶯に百人ながら気がつかず

四八18

—百人一首に鶯の歌無し。

○雲雀

雲雀は鳴きながら天高く上がつて行く、こ
れを揚雲雀といい、急降下するのを落雲雀と
いう。

雀よりやや大ぶり、木の枝にとまることが
なく、もっぱら草原・畑・河原に居て、地上
の小動物や草の実などをついばむ。

鳴き声がいいので、此の小鳥も古くから飼
い鳥にされて来た。

残酷な話で申し訳ないが、雲雀は食用に供
された。珍味であった。

上総房州などで捕獲した雲雀を塩漬けにし
て送る話が「譚海」に記されている。即ち、

「公方様御鷹の雲雀、御大名へ給はり候は、
年々夏秋御鷹匠衆を上総房州へ遣され、彼地

にて執たるを江戸へ送り、配分して給はりけ
るが、往來日数を経て、雲雀損じ多く出来、

すたり有レ之に付、当時は彼地にて塩漬にし
ておくるやうに被二仰付二ける故、一切無レ之、

且御鷹匠衆他国逗留の定の如く、雲雀取り候

へば、罷歸事故、往來日数かゝらず」とある。
しかし、古川柳に雲雀を食用にした句はな
い。

*

人間ていハ、雲雀ハおちつび

九〇44

—ませたお転婆娘。雲雀の囀りが恰もはね
かえり娘のよう。

上かる程あかとひばりおつちる

安一・七・5

おつちるやうに雲雀ハおりる也

八五2

—雲雀の急降下。

辻番で屋敷を聞ケハひりかこ

明八鶴2

あのひりかこ辻はんあこてい、

寛元天2

—辻番で旗本の家を探ねたら、雲雀籠のあ
る家だといふ。この旗本風流心で雲雀を
飼っているのではない。貧乏旗本の内職
で売るための飼育なのである。

出合する上をひばりハ舞て居る

明八義6

—雲雀の囀る下に若い二人。長閑な春。

○燕

都波久良女（つばくらめ）が古名。つばく
ら、乙鳥（をどり）とも言う。

雁とともに日本の代表的な渡り鳥である。

三月上旬から五月上旬に掛けて日本全土に
飛来。人家の軒先などに泥や糞くずで巣を作

り、夏の間子育てをし、秋南方へ渡る。

燕もまた食用に供された。江戸で食された
かどうかは不明だが、加賀前田藩の話として

『甲子夜話』がつぎのように述べている。「加
賀には年々夏の中に燕を夥く取り、塩漬にし

て貯へ兵食の料に備ふ。前田家の古法と見へ
て、昔よりその如くして、前年に塩漬けした

るは棄て新と引換置くこと、年々違ふこと無
と云」。

*

流れ矢は足元トへ来ルつばめ取り

明四義6

—燕取りは辞書にない語。獲つた燕は雀な
どと同じく鷹の餌にするのか。

燕ハばん字のやうにとんで行

六18

—燕は虫を獲りながら飛ぶので複雑な行動
方をする。それが奇妙な形の梵字のよう
な飛び方に見える。

うるしかきかすつてつばめ通るなり

安九智4

—漆掻きは生漆を掻き回す作業。店先など
の日向で行われた。

雨舎りつばくら追てしかられる

安四礼4

—軒先に燕の巢。

燕にゆつて帰る花さかり

宝九礼2

—燕が来る頃、雁が北に帰って行く。

雁が来てつばめ土蔵を置いてにげ

四八33

—雁が来ると、今度は燕が南へ帰って行く。

秀句鑑賞

同人吟 田中 叶

— 3月号から

津軽では私のような人間のことを「からばやみ」という。「ものぐさ」「ぐつたら」という意味である。

私が川柳を始めたのは結構早く十九歳の時である。当時、甲吉さんもまだ若く、新聞記者をされ地方紙の川柳欄を担当していた。甲吉さんにおだてられ川柳に没頭したが、長く続かなかつた。本来なら柳歴二十五年（さほど意味をもたない）になるのだが実作年数はその半分にも満たない。現在も投句、句会を休んでいる。そんな私に編集局からの秀句鑑賞依頼。困った。お断りしようと思ったが、

土日を含み一週間の余裕があったので何とかなると思い引き受けたところ、その土日風邪で寝込んでしまった。さいわい試供品の風邪薬が効いたのか月曜日から会社に出動できるようになったが、肝腎の原稿の方は全然手をつけていない。しょうがない。しょうがないので秀句鑑賞を作品鑑賞に改めた。朝夕の通勤列車、昼休み。やっと書き終えた。つくづく「からばやみ」な奴だと思ふ。

食べて寝て豚になりたい真ピンクの

肥 後 和香子

それもまたいいなあと思う。終焉の時は、いつもより濃いめの化粧で、出来るだけ見苦しく「人殺し」「豚殺し」。

橋からの眺め納得して帰る

桑 原 道 夫

失いたくないものがある。その失いたくないもののひとつに橋があり、橋からの風景がある。

一家心中の記事きつちりと十二行

新 家 完 司

同じく十二行で元ボクサーの無銭飲食の記事があった。左の隅に見逃すかも知れないじめによる少年の死の記事があった。事件が事件でなくなつてゆく日常。誰もこのままでいいと思つてはいない。何もしない。

なで肩が切る責任のない風を

舟 渡 杏 花

私もなで肩で結構肩の凝る方だが責任がないのですぐ治る。上司より髪の毛もある。

長い返事が欲しくて長い手紙書く

舟 渡 杏 花

おとといはダイレクトメール。きのうはお知らせのハガキだった。きょうはまだ何もきていない。長い長い手紙を書く。

妻と子の笑顔が僕の身を削る

玉 置 重 人

すこし前までは妻と子の笑顔がすべてであった。よもや会社がこうなるとは思つてもいかなかった。まだ辞めるべきでなかつたかも知れない。今どこで何をしているのか妻も知っているはずである。なのに笑顔は残酷だ。

採算が合わず人間捨てられる

江 口 明 光

コップ酒部下は上司を選べない

榊 原 雪 心

ストレスのためた服を吊つておく

吉 岡 き み え

一時期上司（会社？）からノルマを科せられ働き度ということをいわれたことがある。それからいうと、私は一日三万九千円稼がなくてはいけならしい。こと細かく一日の稼動をマークシートみたいなものに書かされ、トイレに行く時間も拘束された。あまりのことにストレスから入院するものも出た。その時上司は楽転し程なく会社を辞めたとも聞く。

理由はなくただ一列に並ばされ

小澤 幸泉

二列ではなく一列。前と後の人しか話が出来ない。理由はないというが、いまにもトラツクが現われ何処かに連れて行かれそうでは私には怖い。(いらぬことながら、並ぶと何かくれそうなので私はよく並ぶ)

ほほかむりあねさんかむり雪夫婦

ひとりぼっちほほかむりして眠る冬

蒔 苗 果 林

三月は愛しい亡妻の三回忌

月命日墓とお話して帰る

涙してこれが人間という姿

島 田 昭 治

昨年父が亡くなった。医者に匙を投げられ
てから十年生き、その年齢を考えると悲しく
はあったが、思ひのほか心残りはなかった。
しかし、お二人の句を読んでハツとした。母
がいた。母にとって父は夫であった。子供よ
りずっと時を共に過ごしてきた。多少男と女
の違いはあるにしろ思ひはお二人と同じであ
る。もつと母を大切にしなければと思う。

齢なんて構うもんかい縁日だ

太 田 とし子

そつだ。そつだ。今日は縁日だ。とつい相
づちをつたせてしまつ句だ。

厚顔無恥な新婚さんいらつしやい

久 保 正 剣

むろん本人は厚顔無恥ともなんとも思つて
いない。ばかなこと言つて副賞にアメリカ西
海岸の旅行。手を振つてX年X組のみんな見
てる。首には出来ない教師。ならない教師。
有名になりたいそれはいいことだ

仁 部 四 郎

あなたの年齢は？十二歳。根性はありません。
そんなに有名になりたいの？。上質のわさび
を使つた句だ。

減反のなかにそびえる准尉の碑

仁 部 四 郎

減反。なつかしい言葉だ。減反と案山子等
など随分課題吟、雑詠で詠まれ詠みつくされ
たように思う。しかし、准尉が出てくるとま
たドラマが生まれてしまふ。

化けるのを待つて一蓮托生に

池 森 子

わくわくしてしまふ。見事化け終えたら二
人で乾杯、咆哮しよう。それからだ。

蔵のある家から娘出て行つた

松 本 文 子

キラキラと川は光り、月日は過ぎて行く。
何もかもが変わつたが心の扉は蔵の扉のよう
に冷たく重い。

ばあちゃんの紙ヒコキが風に乗り

高 杉 千 歩

誰とも合うよう骨は抜いてある
信管を抜いて男を掌に

川 上 富 湖

猫のひげ真冬日びんと光りあり

佐 治 千 加 子

何もないなんでもないと泣いている

三 宅 保 州

狂うかも知れぬイルカのショーみてる

古 川 喜 美 子

どうしようもなかったのです爪を切る

小 池 し げ お

どん底を見た刃物の切っ先

池 森 子

こころ許せばボトリと落ちる寒椿

門 谷 た ず 子

葉包紙いくつ折つても翔べぬ鶴

小 野 克 枝

手品師のようにカードで金を出し

二 宗 吟 平

自分には出来ないことを訓示する

春 木 圭 一 郎

幸福の小さい方をふところ

土 橋 螢

川柳は川柳でいい。この言葉の重さと思う。

水煙抄

西田柳宏子選

河内長野市 大西文次

笑つてるところか古稀の五十肩
花一輪茶の間に春をおびきよせ
ダイレクトメールで墓買わんかと言うて来る
赴任地に慣れ独酌も板に付き
社会通念にもピンがありキリもある

富田林市 藤田泰子

リフォームに大黒柱の疵が泣く
しみじみと鏡みつめて誕生日
お薬を呑むのを止めてから元氣
桃好きの夫に供える固い桃
自分史を飾るバラより野の花で

今治市 野村清美

見栄を張るあげ底だから軽過ぎる
プレゼント嫁のやさしい蝶結び
浮き沈み波にまかせて生き延びる
講演にこくりこくりをして帰る
木の葉舟夢見て揺れる水たまり

大阪市 一本勇太

御希望に予算と見栄をくすぐられ
相槌の裁きわたしは死んだふり
生きて積む微罪が両の手に余る
そよぐ葦お伽斬を信じきる
賞味期間切れた余生に火を通す

大阪市 立蔵信子

ふくらんだ蕾に感謝してしまふ
三分咲きのひかえめ加減まねできず
母さんはどんなことにも目をつぶり
遅くなる帰るコールがかけにくい
無責任な言葉にお酒よくまわる

大阪市 岡本久峰

山間のわが故郷や百舌が鳴く
三男に生れ古里はじかれる
亡き母の頻りに恋し春墓参
米一斗付けて老妻預けけり
戦友の訃報が届く寒い朝

空想の旅にいぎなうカップ酒

尼崎市 田 辺 鹿 太

浮く石もあって此の世は面白い

釣りに来て一日暇を持て余す

札付きの悪だと自認するナイフ

ライバルの弱味を握るこの余裕

羽曳野市 安芸田 泰 子

通り過ぎる靴音ばかり夜が更ける

木枯しに二の足踏んだ万歩計

人情の温み見つけた吹き溜まり

再会へ黙って温い手を重ね

ためらいの癖が幸運とり逃す

東大阪市 北 村 賢 子

泣きながら寝た子へ母の胸疼く

道ばたの花もほえむ春うらら

よく見える眼と強い足ありがとう

宙に浮く丸い地球を見てみたい

とつときのレターセットで書く手紙

西宮市 長谷川 淳

流される雛に訣れの涙する

電話すりやいいのに母は手紙書く

もう飽きた倒産 汚職 朝の記事

巢立つ子に涙流しつ拍手する

仮設から出れば新居のうら淋し

遠くから見つめています富士の山

横浜市 岡 田 芳 江

ナイフが校則切り裂く中学生

子供らのシグナル キャッチさえ出来ぬ

横道にそれたら趣味が一つ増え

初恋のレモンの味を懐かしむ

横浜市 川 島 良 子

言い勝ってみたが貧しくなるころ

普段着のままで生きてるいい笑顔

忙しくしている歳を忘れてる

定年後田舎都会で揉めている

結局は父に似た人選んでた

秋田県 湊 修 水

方言も地酒も温い北のくに

鬼づらで歩くと豆がとんでくる

恐ろしや子供に警官襲われる

玩具にもナイフ ピストル持たすまい

被害者に仮設に温い手がほしい

和歌山市 木 村 親 路

会談はやたらに握手して不調

笑い上戸泣き上戸から叱られる

拳骨という無器用な父の愛

只の酒ボタン一つを掛け違い

遣伝子がお酒を飲みたがっている

北国の人が氣遣う首都の雪

横浜市 金森徳三

大雪を窓で通勤思い遣る

赤提灯くやし涙を吸い寄せる

マル優は名ばかりむなし低金利

小刀とナイフ世代の時差をみる

高知県 桑名孝雄

風邪十日世間が他人めいてくる

酒一升ほどの相談なら乗ろう

ボケ予備軍今日も仲良く飲んで

だらしない酒だが夢は持っている

孫巢立つ覚悟出来ないままに去る

札幌市 三浦強一

日本史の伏せ字が重い半世紀

寄り道の子を待っている母の傘

ボロ株が景氣回復待っている

サングラス過去のある人らしく見え

棒グラフぐんと伸ばした日のお酒

鳥取県 山本正光

善いことを見る眼の位置をつけ変える

現ナマは壺で地中に埋めといた

僧兵の勝どきに似た吹雪くおと

夢にでる亡妻は長居をしたいはず

般若経あげて終りのない祈り

老人の囲りに雪が残ってる

夜勤あるからと縁談断られ

地下鉄を上がると別の町がある

太陽の恵みへふとん並べられ

立ち話孫は女で良かったね

唐津市 樋口輝夫

ローン着て背伸びして出るクラス会

立ち読みの下巻が今日は見当たらぬ

ママゴトの可愛い口が小言言い

グッと来る涙を母は溜めている

ばやくだけばやいて妻の高斟

泉佐野市 稲葉洋

ぼっくりと逝きたい裏にある未練

諦観と未練で紡ぐ人生布

寝て起きて男やもめの生半可

甘辛しゃん下戸もお酒の知恵がつく

何故髪を染めるグレーにある渋味

鳥取県 近藤佳子

出世して苦勞話が作られる

大根が母が笑ったように煮え

切符買う故郷への距離近くなる

口笛の子の淋しさを母見えず

ふるさとが同じで乗った口車

横浜市 山梨雅子

和歌山市 森 口 美 羽

群衆で自分の彩があせている

広告塔の顔で大事にされている

情熱の炎の底で契り合う

おんなですお化粧はげぬよう泣いて

プライドが表紙をあつくしてしまふ

河内長野市 妹 背 尽 呂 久

独酌でしんみり今日を振り返る

いま傘寿花を咲かせた時もある

一人旅酌婦が過去を覗かせる

不景気の余波かせわしいコマーシャル

古代史を探る夢には果てが無い

綾部市 藤 田 芳 郎

満帆を転んで神の名を憶え

一合の酒一合のように飲み

年甲斐を子に叱られている元氣

欲捨てる度に信心深くなる

七人の敵の一人に読む弔辞

横浜市 保 田 絹 子

コブの山越えて笑顔の金メダル

信じてた勝ち覆えず土俵際

葱坊主春一番に顔を出す

タイミングよすぎて先が怖くなり

ひょいと来て気になるはなし置き去りに

大阪市 杉 澤 汀

栗焼いて縄文人の味僂ぶ

この鏡卑弥呼が紅をひいたかも

腹立てて解約してもゴミ口座

ノンキャリアもキャリアもいます檻の中

道標いせとこうやへ仕分けする

鳥取県 近 藤 春 恵

背のびせず雑魚で満足しています

貧しくても明るく暮らす妻がいる

ふれあいのうすい都会の風に逢う

無我夢中生きた戦後を子に語り

寅年の妻に頭があらがない

唐津市 井 上 勝 視

しめっぱい通夜は嫌だと言っておく

長生きがしたくぬるめの仕舞風呂

点線でごまかして書く文もある

節くれの手に冬が来る人を恋う

不況風に無理難題のお賽銭

今治市 塩 路 よ し み

試行錯誤かすかな夢を持ちつづけ

試着してモデルになった顔をする

飽食の中でこげ飯なつかしい

三世帯肩の力を抜いてます

裏方で小走りの癖いたにつき

和歌山市 吉村 さち子

両方の耳で聞いてもくいい違う
もう一步の線が越せない自尊心
根締めしてまだまだ欲が捨てられぬ
正直に生きているのに目立たない

羽曳野市 川田 晋

暇ほどに金がほしいと思う日々
お互いに我慢してたという平和
嫁姑他人行儀がまだ残る
卒論は出来たが職が決まらない

岸和田市 亀井 皎 月

どん底を抜けたが頂上ほど遠い
不手際を遺憾と称し謝らぬ
今死ねぬ平均寿命にまだならぬ
逝った人笑顔のままの若わかし

寝屋川市 角野 仁 清

五分五分へ祈るしかない息子の手術
水枕優しい母がいてくれる
排便のナースコールへ躊躇する
退屈は自分へ折った千羽鶴

大阪市 亀井 円 女

汚された地球の上で人を恋う
ひと言が多い足らんと小競り合い
人見知りすればどんなに楽だろう
下手な嘘妻は笑いを堪えてる

高槻市 乙倉 武史

小さくとも親の顔色読んでいる
出し切った力悔いなし予選落ち
飽食の仔猫で鼠の味知らず
社寺巡り命の洗濯した積り

今治市 渡辺 南 奉

大役はどの花も実を結ぶこと
間引き菜と摘果人間様のエゴ
失敗を同情されて腹が立つ
年かなあすぐに納得してしまふ

大阪府 澤田 和 重

防災のリュックが隅にある平和
バチンコに凝って蛍の光きく
毎日が日曜あすをもて余す
場所取りの墓産が泣いてる花の雨

八尾市 平川 幸 枝

餅焼いて夫の話裏返す
帰りにもまだ立話寒の入り
獣医から犬に賀状の干支のトラ
何ゆえに失楽園の夢を見る

堺市 梶本 哲 平

他人同士袖擦り合うて屋台酒
飲みっぷり惚れ惚れ言葉かけてみる
なんば飲む酔うまで飲んだことがない
沢庵の尻尾で一升飲んだ日も

神戸市 船津 とみ子

寒い日の土産にくれた夫婦ぜんざい

気ごころを知り合う友で有難し

此処は熊本何でも話す友が居る

冬の雨小さく降って夜となり

八尾市 鷺見 章

老い一人ロダンよろしく考える

リハビリに参加できない口惜しさ

死を思う夜ふと同胞に会えるかも

レントゲン私の何処を覗くのか

高知市 細木 子龍

綱引きはこれからですと塾通い

裏通り研ぎ師の声が寂びている

晩年を軽く躲した辻易者

藁縄で縛る野良着が見当らぬ

高槻市 江原 秀夫

これ以上福はいらない二人住む

細かくて要は抜ける法の綱

湯豆腐で熱燗今日も恙なく

直感の勘にぶらせるコンピュータ

東京都 清原 悦子

嫁がせた子への電話が多くなり

肩書きに期待がかかり疲れてる

低金利よそに子供の貯金箱

アドバイス自分の過去を混せている

大阪市 榎本 日出子

仲良しが隣と言える強味あり

今日もまた追いかけられて日が終り

鬼も蛇も出てくる時は夢の中

年輪が丸うならず角を出し

倉吉市 山中 康子

幸先のよさに油断をしてしまふ

飼犬がクツションになるわだかまり

根限り汲めども尽きぬ母の井戸

座布団の温みに解けた会話なり

横浜市 生坂 サト子

旅便り筆不精など忘れさせ

うたた寝に気付けば毛布掛けてある

単純な機能一番役にたつ

多機能に振り回されて小半日

高槻市 小林 一閑

孫娘まあるく過ごせと嫁に出す

近い旅で深い感動受けました

節分に日記帳まだ続いている

再発するまでが私の安息日

和歌山市 松本 良

思い通り事が運んだうまい酒

腹八分ナンバーツーで満ち足りる

歩くより道草が好き万歩計

夫の愚痴挨拶代わりに聞いておく

和歌山市 上地 登美代

六十路来て火種がはじくまだ女
いいポストまわりの視線背なを刺す
どん底で貰った希望無駄にせぬ
汚職という漢字テレビで見え

海口市 谷口 義男

有頂天になった足元掬われる
一向に税上がらぬ頑固者

言いたい事言えば気が済むのだ仏
孝行をしたが孝行してくれぬ

横浜市 北沢 街湖

病院へ行って帰って日が暮れた
ご馳走を犬と半分ごっこする
朝刊のチラシと妻のうまが合い
他人なら夫婦喧嘩も面白い

京都府 前上 英一

折々に生きてる亡母の知恵袋
以心伝心夫婦が同じこと思う
逃げ道の一つ残して子を叱る
先頭を歩きつづける背の孤独

八尾市 田中 トシエ

日向ばこいつもの場所に空きがで
自販機に教えてもらう町の四季
我がままに育てた積木すぐ崩れ
倒産をすると思えぬ入社式

日立市 加藤 権悟

幻想の花野にいつも赤トンボ
いくき幾度母は独りの米を研ぐ
飽食の海で河童の皿乾く
真剣な塾のかばんを笑えない

島根県 福岡 博利

健康の秘訣をきけば昼寝です
極楽は肩まで浸るひとり風呂
ばあさんとけんかも大事な日課です
寝るまでは早起きすると決めていた

大阪市 中井 正秀

一日に三回も会うこれも縁
孫が来て忘れて行ったタマゴツチ
行革の足を引張る金融業
死ぬときめ死なん方法ないかいな

新潟県 高野 不二

国会の質疑なれあいにも見える
何事も興味を持って若がえる
良い財布持っても金は貯まらない
現役で傘寿を派手に言い立てる

尼崎市 内田 美也子

夫の忌に小さな孫の手が添える
一本のフィルム孫を閉じこめる
平凡な暮らし宝と思う日々
梅林のほのかな香り持ち帰り

八王子市 播本充子

ボクの目に妻は天才だと思つ
青りんご開き直つてから不気味
開放が過ぎていびつな子の心
消防士手持ち無沙汰が有難い

京都市 高島啓子

還暦でサントの服が良く似合う
雪の字で大と書いてる東山
伸びる芽を摘むかも知れぬ叱り方
陽だまりの広さは父の愛だらう

松江市 松本知恵子

お汁粉を作りつつ待つ冬の客
真正面つららのような言葉きく
人はみな傷つき易し冬を知る
万両の明るさを置く玄関に

鳥取市 森本和子

老いるから魅力の紅をぐいと引く
介護実習受けて優しく夫看たい
冬の宿恋占いに身を委ね
三三九度ぐつと吞み干す嫁が来る

島根県 谷岡ふみ

夕仕度春の匂いが厨から
物忘れこわいほどよく忘れてる
霜の朝吸った空気はうまかった
娘の立てる朝の服おいしくて

大阪府 奥野義夫

妻の留守突然に来る女客
過労死の蟻を横目で蟻の列
金一封見栄と言う名で貼り出され
母の見る夢は十年前の夢

藤井寺市 岸本寿代

福豆を年より五つ若く取る
お買物また舞戻る忘れもの
この寒さ石狩鍋で輪がなごむ
雪の中誰も知らない春を見た

寝屋川市 妻谷重三

スポンサーのご好意ですがテレビ消す
長いこと守った財布嫁にやる
一応は笑つておいて思案する
吊橋を渡つてからの威張りよう

岡山県 国米きくゑ

ゆっくりと回る時計がほしくなる
傷癒す古里の水飲んでいる
花道も喝采もなく紙オムツ
哺乳瓶洗う指から母になる

横浜市 田中笑子

振袖で大人に見せる二十歳
目覚しも休ませてやる三ヶ日
たんぼぼもそこまでの春待つている
大晦日互いに明日を見つめ合う

和歌山市 上 地 忍

亡母の手の温もり消えぬちゃんちゃんこ
我慢してかけ込んで行く母の胸
畔道で親子で風と遊ぶ春
昔昔の話ばかりで寂しいね

大阪狭山市 伊 藤 尚 子

風邪ひいた日から日めくり進まない
梅香る頃もいいから帰りゃんせ
受験期にそこはかとなく梅の花
冬日和ボインセチアに声かけて

川崎市 和 泉 見早子

リフォームへ幅を利かせる鯨尺
努力したのに運の良いことにされ
今朝の運 定刻通りバスが来る
気まま旅 子の赴任地も見えて帰る

鳥取市 福 田 登 美

くつろいだ土曜の夕陽早く落ち
小気味よい毒舌胸によく響く
合格に未来図の夢膨らます
追伸のことだけ妙に気にかかる

羽曳野市 三 好 専 平

ストレスのたまる社会に生徒荒れ
広辞苑 時代の波に追いつかず
えらいさんばっかり悪いことしはる
国のためという言葉にはだまされぬ

東大阪市 今 岡 貞 人

明日になれば変わる風向きかも知れず
約束と一緒に春を待っている
こつこつと歩くパワーは侮れぬ
旅人の目に美しい雪景色

富田林市 中 井 ア キ

つき放す育児が絆太くする
庭すみれ紫の血をたぎらせて
旅先でふと想い出す亡母のこと
油断して風穴ひとつ開けられる

米子市 大 野 蒼 流

寄り添うた傘美しい老夫婦
美しい嘘がナースの瞳に溶ける
まん中を歩く男で夢がない
老残に孫と昼寝の夢がある

兵庫県 大 谷 幸次郎

白黒をはっきり言わぬ知恵で生き
演奏会しばし世間を遠ざける
乗る風を待って飛び立つジャンプ台
サラ金が地獄で仏の顔をする

横浜市 山 下 省 子

大盛りをさもうまそうに平らげる
聴きたくもない声受話器から洩れる
追伸に人間性がしのばれる
連絡の電話を妻に義務づける

(先月分)

大阪市 鈴木 トヨ子

屠蘇の膳家族揃つて初春の餅
水引草活ける楽しさ老いの手に
美しい声 間違ひ電話でも楽し
人情の変らぬ町に居て楽し

大阪市 三浦 千津子

前向きに生きるデッサンの太い線
招待状春の音符が届けられ
人嫌い私を守るサングラス
辛口の教えを抱いてまだ迷ひ

大阪市 小泉 久子

ゆつくりと歌を一曲終ひ風呂
カスミ草になれず雑草で枯れてゆく
手を合せ欲な願ひが多すぎて
好き嫌ひなく輪の外にいて無口

富田林市 山原 昭水

花も茶も絵も書もみんな我流なり
妹が兄の恋愛指南する
賞罰無し平凡に生きちゃんこ鍋
兎追ひし歌えば故郷近くなる

今治市 村上 久美子

躓いて気づく故郷の温い風
真に受けたお世辞の中にある小骨
これも愛 塩も砂糖も減らされる
嫁がせて茶漬けかきこむだけの音

徳島県 安宅 美代子

花束を海に浮べて泣きに行く
ブライドが妥協をこばむ冬木立
毒づいて孤独に慣れた茶碗酒
正論が思わぬ風に向きを変え

鳥取県 国森 武子

吹雪く日は生きてるだけが精一杯
雪もよしゆつくりテレビ見れるから
亡き夫を強く想いて夢で会う
吹雪やみ太陽拝み感謝する

八尾市 井尻 民子

生きざまの修正命ある限り
雪をのせ珊瑚のような藪柑子
恍惚を引きずりながら自我通す
見えないがキラリ輝く春を待つ

八王子市 井上 京一郎

鉛筆を削るナイフが無い世代
名残り雪 名画座に小津安二郎
春宵に春眠を足しおらが春
同郷と知った途端のくに言葉

香川県 神保 坊太郎

ねんきんが生きているかと問い合わせ
二時間の式で成人して戻り
捨てられてからカナリやは唄い出し
迂闊にもお願いしたのは神無月

兵庫 倉垣恵美

合格へ孫の笑顔がつぶれそう

いい出逢いあって島の娘忘れない

受け皿の大きい分だけほっとする

八尾市 山本 宏

あたたかみ重ねる言葉ありがとう

鼻唄がでて風邪のかみ送り出す

居る人がいない寂しさ二七日

羽曳野市 西村りつえ

露天風呂ストレス吸ってくれた月

なにしても蓄で落とす手が愛し

ソプラノで時どき妻の乱気流

伊丹市 檜谷郁子

客一人湯気の向こうに招き猫

傾いた日射しで想う亡夫の笑顔

四面楚歌空見る窓は開けており

米子市 池尾保子

春はそこまでランドセルの子待っている

個性派が春の色彩連れてくる

いくつもの試練を越えた母の皺

交野市 山川日出子

六十路でも乙女の祈り古ピアノ

受験前ピアノひっそり眠ってる

夜明前夢想世界で五七五

岸和田市 不破仁緑

店舗改造してから客が遠ざかる

大吉も大凶も乗る渡し舟

印鑑を造り替えては途中下車

出雲市 榎ミツエ

老人会明治の虎が突つ走る

救急車かすかに聞える夜の音

老夫婦仲よく話が丸くなる

和歌山県 中後清史

車座に主役のいない花が咲く

お喋りが厭な日もある赤いバラ

乗せられた見事な手口怒鳴れない

鳥取市 有沢せつ子

甘えるな亡父の一撃懐かしい

野仏は野に咲く花が好きと言う

傷口が時どき痛む風に会う

静岡市 中西雅

かがやく眼一等賞の旗もって

付添いの温い看護に手をあわす

底ぬけに明るいナースに励まされ

今治市 渡邊伊津志

心には必ず見えるのが絆

海峡を越えて旅人蝶になる

無器用で波に乗れない男の譜

寝屋川市 瀧本 八十八

学校も家庭も疲れ子はニヒル
仮設からいつかは的のわが住居

少年よ宇宙を的にめざす夢

福岡県 本田 忠男

屋台骨支えた父の力瘤

玄関に春一番の梅の花

百ヶ日亡母の写真が喋り出す

鳥取県 吉田 孔美子

たった一日ふんわりとお正月

一年と告知ふんわり聞いていた

母の傘に居残る一人動かない

和歌山市 和田 美寿子

留守電に行き先ぐらい言っておけ

顔よりもネックレスの方光ってる

救急車道をあけてる霊柩車

今治市 中村 好恵

雲行きがかわり時計が黙り込む

一枚の赤紙からの祖母の修羅

花から花へ蝶も都合があるのだろ

鳥取市 岸本 孝子

歳かなあ涙腺すぐにゆるみだす

長男と同居八合飯を炊く

なべ釜が奏でて温い台所

横浜市 荒井 広和

休肝日灯火親しむ事にする

生と死の狭間で聴かす銭の音

手を合わす事で安らぐツボがある

横浜市 福島 かづ子

雛飾りいきいきとした母を見る

幸せで取りとめもない長電話

指切りの温み約束忘れない

吹田市 西岡 豊

子雀よインコの御馳走御裾分け

一か八恥を曝してやってみる

プライドを捨てて本音で勝負する

尼崎市 野瀬 昌子

三ヶ日休むと決めて動かない

上辺だけの仲良しならばたんとい

元日は私も少し飲んでます

河内長野市 水谷 笙子

春の雨取越し苦労やめとこう

百円の拝観料で混んでいる

白菜がほどよく漬かる小さき幸

羽曳野市 徳山 みつこ

練習を積んだスキーが空を切り

父さんが日なたでロダンになっている

春風が肩をほぐして撫でて過ぎ

横浜市 鈴江純子

世間体氣にしてふるさと遠くなり

共白髪ようやく息が合ってくる

夫留守主婦休業と張り紙す

出雲市 加藤スズコ

父の汲む清水で雑煮炊いた母

皇居前日の丸揺れて年明け

補聴器にすっかり響く温暖化

高知県 百田幸

趣味に凝りこんなはずではなかったが

茜空今日も元気で日が暮れる

あなたには聞こえて欲しいひとり言

東京都 井上つよし

意気軒昂熟女は趣味の過積載

サクラチル大器晩成また延期

無愛想な息子もはしゃぐ雪の朝

倉敷市 家守政子

襟を正し敬語をつかう門構え

安い米農具の支払い持ち越され

商人が二の足を踏む門構え

香川県 向山治延

嫁ぐ娘を笑顔で送り腹で泣く

最上川芭蕉気取りで川下り

老いてなお過疎の高地に種を蒔く

兵庫県 西山八重子

寒時雨炬燵守りでも腹が減り

またドジを踏んだと気付く朝が明け

貧乏も気楽な老いの一人旅

兵庫県 谷田多美子

猫姫の医療費人間より高額^{たか}く

聞き役で欠伸ばかりの三時間

雪しんしん賀状の中に計が届く

鳥取市 富山雄幸

紙懷炉もんでデートの冬日和

言い勝って見ても心の寒さ知る

浜風にリズムで踊る鳥賊のれん

鳥取県 谷岡清子

太陽を心の糧と気を貰う

花の芽が春を呼びつつはおかむり

茶柱を信じ一日福を待つ

大阪市 星野ひさ

大店も年中あけてる店じまい

亡夫からの投げ縄くらう足の怪我

今日無事と朝のお経に心こめ

吹田市 有田加寿老

ピストルと相性悪い現送車

腹の虫おさまらぬまま箸を置く

成人式祖母の晴れ着も生かされる

みそ汁を付ききりで炊く妻の留守
尼崎市 軸丸勝巳

米を研ぐリズム忘れぬ右の腕
インターネット臭いものにも蓋がない

尼崎市 小川富江

達筆でないから妙に味があり
家守る重い荷物に堪えている
幸せが少しわたしに傾く日

寝屋川市 井上すみれ

気がつけばおいてきぼりのご謙遜
一人居の隣家の笑にくたらし

声弾む貴女の賀状三等賞

大阪市 尾崎黄紅

勲章を胸に淋しい写真だな
郵便が誤配届けてあげる距離
小指切る真似して秘話を聴いている

八尾市 奥田明

妻という油断の出来ぬ同居人
老い二人撒く豆もなし鬼もなし
弓に矢をつがえて的のない男

松江市 松浦登志子

親元に古着資源を着払い
盛り付けで自己ピーアール嫁姑
春風が脂肪太りを笑ってる

手のひらをひよいと巧みに返す人
米子市 猪森スミエ

それからの道を教わる人見付け
美味かった好かったコース途中下車

富田林市 大橋鐘造

勝ち取った椅子に苦勞がつきまとい
縄のれん男の愚痴を置いてくる
ふともらす言葉の端にある本音

高槻市 執行稲子

これ以上飲んだらやばい伏せて置く
歯ぎしりを聞かれてしまう旅の宿
まっ先に冬告げに来る足の冷え

大阪市 平井露芳

一応は武士です竹光差してます
忘却はあかん神戸の灯は消すな
七桁を書いてや値上げせんさかい

唐津市 宗弘

できるなら汚職の記事は見たくない
定年後虎穴覗いて逃げ帰る
いい人で終わるもいいか亡父に似て

泉佐野市 大工静子

友は逝き八方美人が生き残り
言い負けて貝はぶつぶつあわを吹き
正直で仕合せと言う箔が付き

帰宅した子が確かめる鍋の中 七輪で愛を煮込んだ母の鍋 残りものつつこんである鍋の中 雨の日のとんど祭りの人まばら 冬空の晴れて陽気な墓参り 気休めな噂がこわい町の中 春風に乗って賑わうスケジュール 善人の仮面が誘う甘い罠 家族会議裁かれてゐる父の席 騙されてあげる貴方が好きだから 一番の嘘は自分を騙し生き 来客の賛辞は四月馬鹿かしら お世辞かな上手に年を重ねてと 道きかれうまく言えずについて行く どこの子も同じ声して少年期 響くものもつ男の腹を信じたい 命とやてのひらの水うけて吞む 巷には小さい鬼がナイフ砥ぐ	倉吉市 大下智子 島根県 槻谷伸子 和歌山市 武本碧 箕面市 出口セツ子 和歌山県 坂東和代 米子市 門脇晶子
--	--

古い猫が炬燵を抱いて動かない 勢いで登っています八十路坂 古里の魅力おいしい水がある 自慢してお世辞言うことみな忘れ 威勢よい女性上位で丸く住み つまずいた石が初心にかえらせる 嫁からのエプロン着けて種を蒔く 奴唄糸切れてから面白い 布団だけが私の味方仮病の日 雷に初霰降る寒の入り 遠吠えの怒涛の響き日本海 初雪は気の毒そうに舞っている もう一つほしい老舗の桜餅 着飾って鏡に歳を聞いている 水溜り跳べて六十路の安堵感 郵便番号増えて失業また増える 田園風景こわし今風家が建ち 栄転の名前を借りた左遷の地	尼崎市 森安夢之助 尼崎市 中澤向西 横浜市 伊藤ふみ 鳥取市 山本崇 河内長野市 柏本靖子 和歌山市 福重美子
--	---

横浜市 豊田羊子

二重跳び誰かに褒めてもらいたい
公園の鳩 下校チャイムを知っている

腕にのり待てずポプコーンつつく鳩

鳥取市 近藤秋星

役人の汚職はいつの世も続き

立春をせせら笑って北の風

亡き母の言葉は今も生きています

砂川市 武田正美

桜花満開ちよっぴり酒が欲しくなる

陰口も承知笑顔は絶やさない

追憶をたどれば父の掌のぬくみ

愛媛県 中居善信

お役人に何時か日本が潰される

四つ辻に厄がどかと捨ててある

向かい風に言い訳などはするまいぞ

横浜市 秋元和可

電卓が苦手ソロバンはじいている

すぐばれる嘘を真面目についている

つまずいた昨日と違ふ明日が来る

愛媛県 安野案山子

俺流を通す背中に流れ弾

上げ底を支えてくれる僕の妻

ブレッシャーそれも力にしてメダル

和泉市 横山捷也

三味線の家に四季折りおりの花
首ちよっと回してコケシすねている

日記帳みだれ字残し父が逝く

東大阪市 谷口義

義理堅い人のおどろく記憶力

何よりの不運は器用だったこと

風邪もって病院に来る見舞客

北海道 中里つね一

牛乳のお風呂美人はつらいもの

十七年忌妻も少しは老けたかな

露天風呂 雪と氷をおもちゃにし

横浜市 長島亜希子

お手植えの松 枝ぶりも品が良い

早起きを自慢 早寝を笑われる

こたつから愛でてた雪に足とられ

益田市 岡田たけを

靴の泥落とすひまない貧乏性

死ぬことを視界にいれる年になり

灰皿があるからたばこ止められぬ

静岡市 増田扶美

捨て切れず物に悲しい老いの性

苦労した話になって老い多弁

人に酔い花に酔ってる梅まつり

茶の花は母に似ていてひそと咲き
お隣のドラマ聞かせてくれる壁
留鳥も水鳥と和す池の端

兵庫県 円増純子

溶け合うていつか夫婦の彩になる
自立まで添え木とならん父の腕
他人の子叱る勇気が持てたなら

今治市 越智青園

かたちびの靴で仕事の鬼になる
風船の鳩が平和へ高く飛ぶ
裏のない人で煙たい時もある

島根県 菅田かつ子

貧しさの中で育ったやさしい子
酢の物のなまこつべこべ持てあまし
球根を咲かせるくらいな夢ですよ

島根県 松本聖子

疲れても病夫が待つので起きられる
辛抱に辛抱重ねへこたれぬ
ご褒美は親子で一泊夜が更ける

島根県 武島ちよえ

子に従うことを悟ってまろく生き
反省をしてる間に夜が白み
米を研ぐ食べて貰える夫が居る

長い髪バツサリ切って受験する
手握りの硬貨ぬくめてお賽銭
オリンピック雪の舞台で命燃え

出雲市 川島和歌子

空くじとわかると無性に腹がたつ
命綱親は千切れるまで延ばす
福の神と信じる背中に手を合わせ

枚方市 寺川弘一

太陽の恵み花芽に励まされ
すり切れた辞典の世話になる月日
平和への祈り捧げて五輪の和

鳥取県 高尾京

接待も大型化した世紀末
古里は海には遠き穀倉地
長病みの箸に湯豆腐さえこぼれ

愛媛県 宮本末子

春の風いっぱい吸うて車椅子
手をつなぐ世界の友よ和の五輪
節曲げず貧も苦にせず生きた亡父

羽曳野市 山本たけし

お化粧ののりがいいからきつと吉
再入院思うと背筋こおりつく
オリンピックテレビ一台ずつ抱え

河内長野市 印藤智子

京都市 勝山 美千代

ランドセル色いっぱいの夢背負い

万歩計呼んでる朝の寒いこと

若作りしても身体が承知せず

鳥取市 岸本 宏章

春の野にイチローがいるカズもいる

古傷にさわらぬこれも愛だろう

若者と張り合う口はまだ達者

羽曳野市 森田 四三郎

増える新党どれが保守やら野党やら

現況届 郵便番号添えて出し

待ち侘びた海路の日和見ぬ株価

鳥取県 西垣 美知子

正論が座布団のない席にある

老いの身に福祉の窓が小さすぎ

冷水を吞んで心をゆり起す

和歌山県 村中 悦男

あれた手にすり込む妻の薬買う

靴みがく妻のうなじに白い髪

反省の言葉と聞けぬ言いまわし

健康に向かって歩く万歩計

寒風に耐えて水仙香り立つ

お人柄にじみ出てます筆さばき

枚方市 二宮 紫鳳

千葉県 大川 晚翠

セレモニ―埋め立て開始ゴミ捨て場

町火消しめ組の男イヤリング

尼崎市 松下 比呂志

いつもいつも目線の高さで妻がいる

正眼に構えて少し肩が凝り

鳴門市 八木 芳水

日々好日入る噂を聞き流す

飽食の話嫌いなパンの耳

鳥取市 西村 半畳

風邪なんて母のくず湯ですぐ治る

ぷりぷりと煮こごりうまい寒が好き

藤井寺市 太田 扶美代

木枯しの中から春を嗅ぎ分ける

比較ではないが片目がよそ見する

羽曳野市 芦田 絢子

夢に来て欲しくて写真抱いて寝る

大阪府 米澤 俣子

目鼻だち父似で健康母ゆずり

遠足はすしより母のにぎりめし

伊丹市 延寿庵 野鶴

耳よりな話に耳を傾けず

古本屋ときどき睨み手内職

尼崎市の場 十四郎

恙なく生きて和やか夫婦坂
蹟いた小石に年を教えられ

和歌山県 中村君枝
どきどきのチャンス求めている女
絵羽織を後生大事に持つ絆

河内長野市 木太久 正一
箱根路の男の涙知るタスキ
散髪をすればやる気が少し出る

高槻市 左右田 泰雄
排気ガス犬もクシャミをして通る
さりげなくジョーカーを上にして伏せる

東大阪市 松山 隆

横浜市 布山 嘉信

知に衣着せて流れに浮き沈み
便利さが携帯電話の監視付き

北九州市 岡田 幸生
片言の孫に家中沸かされる

兵庫県 中野 とよ子

ほっとする場所はわが家の指定席
妻病んでノート片手に立つ厨

老いてなお狭い世間にあるうわさ
平和ですビルの狭間で欠伸する

鳥取県 加藤 公子
お祝いのランドセルしよわせはいポーズ
配達に小雪混じりの風を連れ

横浜市 近藤 道子

友見舞う明るくガンの話する

西宮市 井上 俊二
こんなにも偉かったのか聞く弔辞

池田市 木村 一 笛

古里も観光招く厚化粧
ストレスの詰った息を深呼吸

へたったら三隣亡と鬼が待つ
どれ見ても本物らしいコレクション

横浜市 平 達也
浅からず深く入らぬ知恵もつき
看板は無くてもはやる味自慢

米子市 小塩 智加恵

守口市 石森 利昭
御来光知らず知らずに手を合わす
誰からも叱られなくて老いを知る

五割引きこれでも儲けあるらしい
暖冬にひと月早い梅だより

兵庫県 徳平 毬子

床のとらとび出しそうなお正月

孫電話娘の内緒事すぐばれる

横浜市 三村 八重子

騒音を置いて噂が過ぎていく
巢立たれた家で鳴いている鳩時計

八尾市 高橋 明子

勉強もしないで祈る天満宮
寒風に空缶から無人駅

滋賀県 中 宗明

秋祭り黄金に埋まる町ゆたか
年毎に娘の所作が亡妻に似る

沖縄県 杉谷 一栄

意地悪を言うて自分も傷がつく
いじらしく花つけているこぼれ種

大阪府 井上 千代子

福娘ばんそうこうが痛々しい
舌打ちで時計をにらむ待ちぼうけ

吹田市 野下 之男

万感は男の涙絞り出し
忍の字がはち切れそうな年が明け

枚方市 大昇 隆広

下町は路地で繋がるあたたかさ
古カバンやはおまえと旅に出る

和歌山市 岡本 八重子

寒の入り友待つ駅に小雪舞う
考えるほどに疑問がわく鏡

尼崎市 尾宮 弘治

正直が過ぎて他人を傷つける
妻の粥ことと煮こむ主夫の腕

愛媛県 黒田 茂代

しなやかにしたたかに妻生き上手
やりませんかへその気になった軽はずみ

兵庫県 北川 とみ子

迷信と知りつつ無駄な神まいり
ほそぼそと残り火を焚く過疎の母

大阪府 中澤 孝子

ではあすね確認電話して眠る
みの虫もたまに世間の風をみる

兵庫県 仲井 素水

鍵っ子に釣瓶落しの陽が沈む
株下落聞きつつ満腹白ごはん

兵庫県 植村 雄太郎

真剣な祈りを知らぬ健やかさ
朝夕に供えるだけの信心家

鳥取市 山本 益子

寒い冬しっかり食べて風邪に勝つ
少年のキレるナイフは背が寒い

鳥取市 森 明美

へそくりが出来てころころ良く笑う
腹の虫抑え相槌打っておく

鳥取県 橋谷静江
長男の舵取り上手仲が良い
多い目に入った財布気持ち良い

兵庫県 高見末野
満ち足りて旅の帰りは眠くなる
雪明かりほんのり部屋で物想い

香川県 松村輝夫
突然に戦争になる客が来る
不況でもこれが普通と腰すえる

静岡県 大村正雄
四月馬鹿妻にうれしい話きく
晩酌が過ぎて不平が沸いて出る

姫路市 服部一典
心臓に良いとワインを買ってくる
合格が故郷離れる始発駅

鳥取県 藤山弘子
寅年に阪神勝てとほえている
成人へ母の振袖間に合わせ

宝塚市 飯西ミサヲ
ままごとのお父さんだって老けたわね
蟻走る老いも若きも居るだろに

鳥取県 原みさを
窓際の少し黄ばんだ生き字引き
嫁が来て夜明けがすこしおそくなる

豊中市 岸田知香子
贈られた賞味期限の切れた品
人力車寒風よそに京の町

横浜市 福田由美子
思いやり忘れた道に残る雪
はやり風邪兄弟喧嘩水が入り

兵庫県 緒方美津子
とりあえず雪かきをする父の朝
風よけになってやりたく孫を抱く

出雲市 岡あきら
昨日今日リズム変らず箸二膳
南天の語り尽した実はたわわ

熊本県 増田一乗
訃報待つ身には佗しい外は雨
さすが姑嫁の料理を誉めそやし

尼崎市 古川正子
狂言の鬼の動作に豆がとび
見舞旅ところは重く雪の富士

尼崎市 河津正治
春うらら妻に良く似た磨崖仏
無口でも勢いを借る友がいる

岡山市 清水金太郎
新年の仕事始めに医者へ行き
孫受驗野仏にまで手を合せ

(岩崎 實・西本保夫・宮脇道子・半澤無眼子四氏の句は48ページに掲載してあります)

麻生路郎の作品とその周辺

大空の、く、ろ

(87)

橘高薫風

絵

東京牛込白銀町育英書院、佐々醒雪西原柳雨共著、四六横綴二八〇頁、昭和2年春陽堂より訂増補再刊

日 傘 第一号 T 6年8月15日

大阪島の内綿屋町絵日傘川柳会、浪花坊創作句集、二枚折、五号より旧大大阪型となり公開、T 8年10月1日第三巻第五号を出し休刊

柳

太 刀 壹 T 6年10月1日

兵庫県西須磨下今池前田青岸方神戸川柳ツバメ会、四六倍判四頁、この柳太刀は翌七年四月第七号を以て休憩、五月より四六版にして改めて第一号を名乗る。つまり一号が二つある訳

娘々廟(にやんにやんみょう) 第一号 T 9年1月1日 大連市磐城町九三連

川柳会発行、半紙判廿頁、T 11年8月の第九号で休刊、漣、幼稚園、紅柳と改題したものの後身

川柳きやり 第一号 T 9年4月25日

東京浅草区南元町川柳きやり吟社発行、三つ折、現在菊判にて続刊

川柳漫画懐手 全一冊 T 9年10月25日

大阪及び東京の奎文堂発行、麻生路郎著菊半二〇二頁、T 13年6月5日川柳ふところ手として大阪田村書店より再版

この項は前月号の西島〇丸の労作「明治以後の川柳年表(柳誌・柳書)」の抄出の続きで、大正十年までに発行された四百七十五種に亘る項目のうち、路郎に関係の深いものと柳界での歴史的史料に値する事項を列記する。

(書名・誌名) (発行年月日) (発行所その他)

読売新聞川柳欄 明治40年3月20日

選者朴山人退き、窪田而笑子之に代る

土 団 子 第一 M 41年7月1日

大阪江戸堀大阪川柳社発行 麻生路郎編集、菊廿四頁、八号以下未調休刊期不明

十世川柳家集 全一冊 M 41年秋、月日不明

四六横綴、和紙十一葉

俳句と川柳 全一冊 M 42年2月5日

編者川原閑母、選者西田当百

白 日 全一冊 M 43年8月20日

大阪市西区九条町短詩社発行、川柳は二部

川柳上巻(近世文芸叢書第八) 全一冊

M 44年3月30日 東京京橋図書刊行会発

行、初篇—三千篇

川柳下巻(近世文芸叢書第九) 全一冊

川柳吉原志 全一冊 T 5年6月28日

三巻第五号で休刊

大阪市北区上福島—一二麻生路郎編集発行、半年で一巻、大正5年11月25日第

沙湖抄

八木千代選

やさしい枕きびしい枕私次第
見えなくなるかも知れないと椿と対す
中立地帯で蜜蜂を飼っている
溜息の真ん中辺にある事実
頰杖の向こうに今日が落ちてゆく
万策が尽きて白さを売ることに
寒茜あがなうものも染めつくす
誰からも来ないので勲章をつくる
自分でつけた鎖自分の手で外す
生臭い掌を洗っても洗っても
一日に一つ見つける好きな色
ことはが毀れて白くなる日記
フロッピー一杯にして春を病む
山登る山の高さはまだ知らぬ
尽きぬ話が賑やかだろう西の旅
ゆつさりゆさり流れ藻に庇われて
手の届く範囲の善を積み上げる
ネクタイを外して僕も浮動票
柿二つ残りどちらが先に落つ
不自然な動きをみせる靴がある

八尾市	高橋	夕花
尼崎市	春城	年代
鳥取県	新家	完司
鳥取県	鈴木	公弘
同		
富田林市	池	森子
寝屋川市	森	茜
松原市	小池しげお	
米子市	政岡日枝子	
富田林市	藤田	泰子
八王子市	播本	充子
島根県	松本	文子
吹田市	山本希久子	
八尾市	村上ミツ子	
岡山県	小林	妻子
和歌山市	福井	桂香
倉敷市	小野	克枝
和歌山市	川上	大輪
米子市	茂理	高代
松江市	川本	畔

こどもらに学習塾という荒野
信用はせぬのに天気予報見る
奥の手を使うと喉に引つ掛かる
男でも女でもなし人に逢う
風に飛ばす白髪妄執ともどもに
国の為家の為とはもう言わず
もう縛ることのない紐持っている
数珠という手錠を忘れかけていた
停まった時計を電池のせいにする
わたくしが黙っていればいつも暗
車の外は激しい雨が降っていた
耳底に風を集めて南無南無南無
こちらが先に会釈する牡丹雪
火の輪くぐり神に調教されている
わが母校ここに在りきの石と化す
冬の月 許しあうほか道はない
見つめられていながら猫は草を噛む
備忘録の中の日付を見失う
ふらついて両手で朝が掴めない
クレヨン虹渡るまで待つてくれ
一滴の涙捨て切る焼野原
アトリエのりんご地吹雪など知らぬ
軍手よく干して過労死せぬように
どの扉にも自動で開くか 少し待つ
まだ鳴ってくれる土鈴を抱いている
ペンだが文化遺産になりそうだ

和歌山市	木本	朱夏
豊中市	田中	正坊
海南市	三宅	保州
鳥取県	西原	艶子
唐津市	久保	正剣
藤井寺市	高田美代子	
倉吉市	野口	節子
鳥取県	乾	隆風
京都市	都倉	求芽
鳥取県	田村きみ子	
愛媛県	中居	善信
和歌山市	古久保和子	
鳥取県	土橋	螢
和歌山市	山根めぐみ	
西宮市	牧瀬富喜子	
米子市	鷺見	正子
唐津市	仁部	四郎
和歌山市	吉村さち子	
岡山県	富坂	志重
米子市	木村富美子	
弘前市	一戸	ツネ
弘前市	斉藤	島
出雲市	園山多賀子	
横浜市	菱田	満秋
和歌山市	福本	英子
黒石市	相馬	一花

想い出を取捨選択で整える

握られた手の困惑を隠せない

ミニバラも薔薇だバラだと自己主張

何に追われ今日も夕陽を見ぬままに

梅一輪手のひらにある負の記憶

失った時取り戻す旅もある

海岸線 奇襲をかけてみたいとこ

デジタルペットに縋る行き場のない風よ

物の無い部屋に住みたい暮したい

ラストチャンスだから素手で立ち向かう

今日の雪なぜかぬくもる人の声

辛夷枯れあすまた冬の水汲むか

水に書く文字の流れのような恋

少し狂った風に出会ってから迷う

散骨の話 一口乗ってみる

とんがり帽子少しあみだに綱渡り

宴長けてトボトボ冬の端郷に

冬日和とても優しく叱られる

夫婦茶碗 嘘も少うし伏せてある

忘れてはならない本を読んでもす

内緒ごと耳はひっそり攪乱す

桜待つ気持だんだん深くなる

失敗の山は寒風遮れず

自問自答甘えてばかりいられない

呼び水で生家のポンプ唄わせる
賞味期限待てずに噺やってくる

和歌山県 中後 清史

砂川市 大橋 政良

西宮市 奥田みつ子

岡山東 矢内寿恵子

富田林市 中井 アキ

米子市 青戸 田鶴

兵庫県 遠山 可住

和歌山市 榎原 公子

横浜市 北沢 街湖

大阪市 神夏磯典子

弘前市 佐治千加子

和歌山市 野々 圭子

今治市 越智 一水

高槻市 川島諷云児

美禰市 安平次弘道

出雲市 石倉美佐子

和歌山市 川上 富湖

米子市 白根 ふみ

八尾市 高杉 千歩

鳥取県 土橋はるお

西宮市 西口いわゑ

米子市 中井 ゆき

尼崎市 春城武庫坊

羽曳野市 田中 透太

米子市 野坂 なみ
横浜市 保田 絹子

蛸のないたこ焼き食べて大阪だ

いい顔の写真が並ぶいい人よ

こだわりのふつと消えてる日向ぼこ

明後日はバレンタインと言うて寝る

人間に一人もいない不良品

風花や母の忌ははの利休下駄

ほろ苦い青春でした つくし煮る

伴奏の私に誰も振向かぬ

思い出す事が供花です一周忌

シナリオは未完呪縛を抜けられぬ

幻か追えば消えゆく白い舟

東京の雪は冷たい貌で降る

しあわせなふりがわたしの顔になる

灰色の町にしないので冬の空

大寒にいのちばろばろ枯れてくる

年の功お相手様に合わせます

早春の空みる時間長くなり

うすあかりさすな話 黄水仙

春ですと予定狂わすカレンダー

小春日和 行くあてもなく門を出る

記者会見組の鯉動かない

瓶が倒れて行儀の悪い酒になる

おいしそうなパン買うてはる米屋さん

黒鉛を紙めて聞かない振りをする

自尊心少しあります花鉢
本音など出ない会議をまた開き

寝屋川市 太田とし子

神戸市 船津とみ子

八尾市 生嶋ますみ

大阪市 小林 周信

枚方市 前 たもつ

西宮市 門谷たず子

和歌山市 宮口 克子

兵庫県 大谷幸次郎

河内長野市 水谷 笙子

大阪市 三浦千津子

米子市 澤田 千春

出雲市 竹治かし

八尾市 大内 朝子

河内長野市 植村 喜代

倉敷市 田辺 灸六

寝屋川市 岸野あやめ

守口市 結城 君子

枚方市 森本 節子

大阪市 立蔵 信子

横浜市 三村八重子

米子市 木村 春枝

弘前市 相馬 銀波

箕面市 岩津ようじ

今治市 月原 宵明

大阪市 川久保睦子
和歌山市 青枝 鉄治

雲ひとつふんわり誰か待っている
胸の奥だれも渡れぬ橋架かる
紳士録脱税したと書いてない
募集しているのはいつもエキストラ
長椅子の真ん中に居ておちつかず
おーいお茶そんな程度の愛がいい
一つ二つは許して過去を振り向かず
やぶつばき受胎を告げる音がした
伸びる爪 最後の爪は誰が切る
穏便にまあまあと水澄まし
足音にもやはり追い風向かい風
生き残りのゲームの椅子の数が見え
風邪一つ引かぬ男で嫌われる
子や孫が居ても橋山 今日も雪
何べんも医者にお辞儀をして帰り
月曜日待合室が混んでいる
頑張れよなんて言うなよ桜咲く
保育所でおひる寝をする紙の月
神さまはあつからんとしてなさる
見え見えの刺を出すうつぶんばらし
自分史に残る絵のある手漉き和紙
お喋りな風に乗ってる私の事
泥んこの中であなたとわたくしと
ほんに仕合せ三度のめしがうまい
母でもなく妻でもなくて紅椿
合鍵はどこへ行くのか無言劇

鳥取県	石谷美恵子	和歌山市	上地 忍	青森市	漆戸凡々子	東京都	佐藤 季顕	熊本県	高野 宵草	藤井寺市	太田扶美代	和歌山市	山口三千子	鳥取県	岩崎みさ江	唐津市	井上 勝視	和歌山市	玉置 当代	枚方市	海老池 洋	岡山県	山本 玉恵	鳥取県	谷口 次男	今治市	村上久美子	川西市	松本ただし	寝屋川市	江口 度	枚方市	濱田 良知	川崎市	和泉見早子	八尾市	村上 剛治	寝屋川市	籠島 恵子	米子市	林 瑞枝	堺市	志田 千代	大阪市	榎本 路児	米子市	光井 玲子	和泉市	中川 楓	鳥取市	福田 登美
-----	-------	------	------	-----	-------	-----	-------	-----	-------	------	-------	------	-------	-----	-------	-----	-------	------	-------	-----	-------	-----	-------	-----	-------	-----	-------	-----	-------	------	------	-----	-------	-----	-------	-----	-------	------	-------	-----	------	----	-------	-----	-------	-----	-------	-----	------	-----	-------

別々の方を見ている交差点
無為の日は香りの高い花を買う
掃除機を浮かせミクロの芥屋拾う
人間に生まれたチャンスもてあます
便箋がそろそろ切れていませんか
クレヨン森に未来のドアがある
スペースシャトル 地球の丸さたしかめる
生きるためついた嘘です闇魔さま
出しゃばっていいだろうか二歩下がる
性善説信じ冷やめし食べている
言い過ぎた虚しさを消す爪ヤスリ
物の々に憑かれとんちんかんばかり
楽しみはジャンルを問わず挑みたい
落ち椿の赤はおんなの妬心かも
じわじわと人のところが腐りゆく
いつだって豆をまきたい母の顔
学ぶ事いっぱい楚々と喋る事

高橋夕花さんの枕、まいにち大事な首を預けている枕に縋りきる
想いは、寝酒という手段を用いることのない多くの女性にとつて、
どれほどの拠り所でしょうか。やさしい枕きびしい枕の表現には今
少しとも思いますが、私次第という真を極めた結語の見事さに一瞬、
息を吞みました。春城年代さんの椿の凄まじさ、不時という椿の落
下に病む目の不安をぶつつけて、こうなると椿は小道具などではあ
りません。年代さん自身の深淵に激しく揺れて咲く真実です。新家
完司さんの中立地帯に飼う蜜蜂は枷が重い果箱のように感じます。
蜜を求めて飛ぶ習性のある集団を制御しているのは、飼う人の情の
深さでしょう。理ではないから蜂たちも受け容れるのでしょうか。

河内長野市	加島 由一	奈良県	鍛原 千里	横浜市	清水 潮華	鳥取市	石上 悦子	鳥取県	さえきやえ	倉敷市	井上 富子	綾部市	門脇 晶子	米子市	藤田 芳郎	寝屋川市	富山ルイ子	松原市	玉置 重人	尼崎市	長浜 澄子	和歌山市	桜井 千秀	貝塚市	池田寿美子	兵庫県	円増 純子	東大阪市	北村 賢子	横浜市	福田由美子	鳥取市	坂田和歌子
-------	-------	-----	-------	-----	-------	-----	-------	-----	-------	-----	-------	-----	-------	-----	-------	------	-------	-----	-------	-----	-------	------	-------	-----	-------	-----	-------	------	-------	-----	-------	-----	-------

—水煙抄

秀句鑑賞

—3月号から

田中 紀美代

甘い顔した渋柿に騙される

大西 文次

渋柿とは、うまい表現だと思ふ。政治家諸氏よ、もう国民は騙されませんぞ。消費税に医療費、その他山ほどの怒り、まとめてぶつけてあげますぞ。

神さまに聞えるように鈴を振る

湊 修水

神さまといえど、普通に鈴を振っていたのでは、こちらの意志が通じない。ちよつと個性のある振り方で、神さまの心をとらえ、願いをきいてもらいたいものです。

フルムーン笑われても手を繋ぐ

田中 笑子

笑うどころか、ほほ笑ましいのに何故か照れるのです。私も旅先だと手をつなぐことはサラリと出来るのに、生活圏に戻ると出来ないのは慣れの問題でしょうか。

掲げ足を妻に取られて貝になる

樋口 輝夫

私の場合、夫に掲げ足を取られるのですが、この頃では、貝になった時に楽しいことを考へることが出来るようになりました。貝になつて居る間は静かですし、又とないチャンス。極楽は信じる友と無駄話

極楽は信じる友と無駄話

近藤 佳子

「信じる友」が居て「無駄話」が出来るとは素晴らしい事だと思ふ。ストレス解消に一番いいのが、友人との無駄話だというレポートを先日聞いたばかりです。

仕事から趣味に移つてゆく賀状

江原 秀夫

年を経ることに、年賀状から変化が見られるのも楽しみです。柳人は柳人で楽しみであつたり……。ところが私にとっては、苦しみであつたりする年も多いのです。

便利な車 不便な車

芦田 絢子

川柳ではないと言えど失礼かも知れないが少々おかしさを伴うのでとりあげました。車に乗つて30有余年になる私ですが、今だに思い通りになるのは車だけだと思つて居る。夫も子供も素直に言うことをきかないが、車だけは私の味方。なのに邪魔になる事がある。

こころ開くように蕾が笑いだし

西村 りつえ

寒い冬の頃から準備し、精一杯咲こうと春を待つて居る花。徐々にふくらんでゆく姿は人と人との心が溶け合うようにも見えるから不思議です。

せいっぱい生きる両手を陽にかざす

西垣 美知子

昨年、夫が頸椎の手術をしました。両手両足、体のあちらこちらにしびれが来たからです。この句のように太陽にかざす手は、まだまだ伸ばしきれませんが、せいっぱい生きようとりハビリに励んでいます。

銀行の危ない囁通夜の席

松本 良

税務署に行けば弱者の顔になる

川田 晋

そのあげく国民の金当てる

武島 ちよえ

線引きをするたび弱者締め出され

岸本 宏章

この四句は、全部私たちの身辺にある問題なのです。長野での冬季オリンピックは、感激、感動のうちに終了しましたが、政治の面でも感激の一つくらいあつてもいいのではないかと、川柳眼で見つめていきたいと思ふ。

尚香のむ

宮西弥生 選

許してあげよ春の生まれる音がする

雪解けて一から始める春の章

届けるのが面倒拾わないことに

沈黙考石もいつしか息をする

明日の朝も一度おいで夜の蜘蛛

ふたつの耳を全開してて聞き洩らす

春彼岸遠く近くの死を思う

少しうかれてピンクのコート着てしまふ

何時からを余生としよう還の齡

神さまに特別目立つ絵馬を買う

返答の無いのがいちばんおそろしい

締め出した鬼がうろうろして困る

福寿草見つけいいことありそうな

逢いたくて逢えますように木をゆする

猫柳白い産毛が自己主張

子を当てにせぬと口では言うものの

冬の噴水さびしい時は風をよぶ

昨今は大樹がゆれるから恐い

焦らねばわたしの虹が消えそふだ

藤井寺市 太田扶美代

富田林市 藤田 泰子

堺市 志田 千代

西宮市 奥田みつ子

今治市 村上久美子

米子市 政岡日枝子

吹田市 山本希久子

藤井寺市 高田美代子

和泉市 中川 楓

兵庫県 北川とみ子

大阪市 稲本 凡子

芦屋市 黒田 能子

横浜市 保田 絹子

大阪市 川久保睦子

松江市 佐野木みえ

西宮市 牧瀬富喜子

熊本市 永田 俊子

倉吉市 野口 節子

八尾市 大内 朝子

魯山人究極の皿食そそる

淋しいと言ってしまったば楽になる

明日の夢下げ下絵にとりかかる

昨日より伸びた菜種の自己主張

善玉のコレステロールと仲よしに

ぬくい絵を胸に和音を集めよう

暖冬で丸くなります雪女

賞味期限切れた男の不精ヒゲ

風穴が開いたら二番目に並ぶ

生かされて生きてまあるくなって来た

枕の中の鼓動聞きつつ風邪の床

ストレスも寒さも煮込み鍋にする

縄電車終着駅に捨ててある

私がしてほしいから声かける

雪解けに春のコントが笑い出す

翔べそうな予感にコート脱ぎすてる

風ひゆるる旅人つれて花つれて

寒いのか鬼は少しも笑わない

君が代も日の丸も良し老ゆる今

湯どうぶが踊るいい事ありそふだ

底冷えの盆地の町の駅火鉢

かっこよく一人渡るときめた橋

フロップビーに任せて春の旅に出る

北帰行鶴はセンサー持っている

子の近くへ住もうと思う気の弱り

藤井寺市 岸本 寿代

奈良県 鍛原 千里

倉敷市 小野 克枝

西宮市 門谷たす子

和歌山市 福井 桂香

大阪市 三浦千津子

大阪市 神夏磯典子

大阪市 板東 倫子

和歌山市 川上 富湖

岡山県 矢内寿恵子

和歌山市 桜井 千秀

和歌山市 上地登美代

鳥取県 岩崎みさ江

羽曳野市 徳山みつこ

米子市 鷺見 正子

横浜市 川島 良子

横浜市 近藤 道子

和歌山市 上地 忍

尼崎市 春城 年代

今治市 野村 京子

愛媛県 黒田 茂代

池田市 栗田 久子

八尾市 高杉 千歩

米子市 林 瑞枝

大阪府 大森 年子

魂を刺された人と対峙する

鬼の子も寄っておいでと豆を撒き

一呼吸おいたら言葉丸くなる

古希という初心まつわる如月に

喧嘩するうちが花だと孤老言う

しあわせを掴み損ねた足袋の汚れ

核心に誰も触れないドジョウ鍋

子の笑顔あるからわたし頑張れる

あのひとの噂聞く日の風の音

淋しさに冬のひまわり横抱きに

悩むより行動せよと天の声

コーヒーが熱い戦のないうちに

無条件で支え合います老い同士

もう後へは退けぬわたしの滑走路

明日のドラマへたつぷりと美容液

波立てる気はない探す妥協点

阿弥陀様ソフトなお顔に救われる

まん丸で高いところに落ち着けず

群れて咲く水仙淋しい花ならず

JAにあの手この手で買わされる

新しい出会いを嬉々とかすみ草

黒いセーター似合う若さがうらやまし

万歩計梅の香りがついて来る

次郎に花子長野に炎もやして

義理チョコの数が男を光らせる

鳥取県 西原 艶子

尼崎市 内田美也子

和歌山市 吉村さち子

米子市 白根 ふみ

出雲市 園山多賀子

倉敷市 淡路ゆり子

尼崎市 長浜 澄子

東大阪市 北村 賢子

寝屋川市 岸野あやめ

和歌山市 木本 朱夏

西宮市 西口いわゑ

鳥取県 田村きみ子

松前市 佐治千加子

和歌山市 福本 英子

八王子市 播本 充子

岡山県 大石あすなろ

伊丹市 樫谷 郁子

大阪市 本間満津子

羽曳野市 芦田 絢子

鳥取県 土橋 睦子

岡山市 川端 柳子

八尾市 生嶋ますみ

今治市 野村 清美

鳥取市 坂田和歌子

横濱市 清水 潮華

自画像をクレヨンならば画けそうだ

霧氷の神秘罪の深さを忘れさせ

二足草鞋はいて念仏となえても

お作法で断り方を教えて

ばあちゃんのとつても好きな置き葉

柏汁をメインディッシュにひとりの夜

他人にはただ退屈な私小説

病むことを死ぬことよりも母案じ

木枯しも明日へ期待のあかね雲

翔んでいた輝いていたクレヨン画

甘い甘いと戒めながら丸く見る

扶美代さんの句―心から春を待たれた句が生まれ自然にほの

ぼのとした感じがする。本当に春は万物の霊長、すべての存在

をあたたく包むかの如し。むずむずとして来ます。泰子さん

の句―ひたむきに作句に挑んでいらっしやる勤勉さがよく響い

てきます。永い永い闇のトンネルから一条春の光を見る。この句

も扶美代さんの句と通ずる春を心から謳歌。何もかもふり出し

に戻って出直そうという前向きがある。千代さんの句―私ども

もよく体験することです。善意で届けたものが反対に事細かく

尋問されて迷惑するのです。千代さんも痛切に感じられた句だ

と思う。でも見て見ないふりも時によつては避けられないこと

も。みつ子さんの句―上の句、沈思黙考している石の様子が、

脈々として伝わって来る。沈思黙考して石は次のジャンプを考

え、動静を見極め、結局、気は長く、心は丸く、腹立てず、口

を慎み、命長らえるのではないかと思う。

米子市 光井 玲子

今治市 塩路よしみ

和歌山市 山根めぐみ

横濱市 後藤 早智

和歌山市 古久保和子

貝塚市 池田寿美子

寝屋川市 籠島 恵子

堀江 光子

三村八重子

中井 ゆき

榎原 公子

枕

大角正道選



よろこびも悲しみも知る枕なり
真夜中の水滴枕から響く
だれよりも心許している枕
枕にも言い分がある大いびき
印籠が出て安心の肘枕
旅の恥口止めされている枕
波音が伝わってくる旅枕
定年でやつとありつく膝枕
大勢が帰り座布団折る枕
針一本枕の中で騒ぎ出す
五百羅漢夢いっぱいの膝枕
孫合格今日の枕がやわらかい
健康枕代えて明るい朝のお茶
いい枕子らをととき遅刻さす
添い寝するぬいぐるみにも枕させ
酒がみな寝かしてくれる旅枕
寝てからは枕のいらぬ子に育ち
風邪の子をいつか眠らす水枕
倦怠期の枕は何も語らない
びっしりと愛を詰めてる水枕
気が付けば枕抱いてたあの地震
出稼ぎの宿に枕が待っている

隆 風 満 秋 剛 治 日 枝 子 あずま 政 良 盛 夫 一 花 勝 巳 雅 城 ツ ね たず子 一 風 旋 風 久 美 子 子 龍 喬 水 大 吾 さち子 良 知 章 久 とし子

あれもこれも許しています膝枕
旅慣れて空気枕を持ち歩く
叱られた面白かった枕投げ
遊び疲れて積木枕にして眠る
掌と掌と掌 火照りもあってひざ枕
帰らない息子に枕落ち着かず
枕元非常袋に囲まれる
川の子へ可愛い枕縫うている
草枕ミサイルなんか飛ばすなよ
枕持って旅に出るわけにもゆかず
箸枕妻とおんなじ夢がある
奇想天外のドラマが好きなさば枕
枕木を燃やしてはしゃぐキャンプ場
枕並べて母はいつでも聞き上手
北枕いやでも一度やってくる
佳
後悔をしたら枕に笑われる
程ほどの枕で二男一女なり
そば枕かさこそ昔斬する
わたし好みに育てたバクを飼う枕
枕も茶碗もやがてひとりになるのです
人
喧嘩した夜も枕は二つある
地
枕っていいなあ夢が詰まってる
天
ゴツゴツ枕にカツを入られる
土橋はるお
軸
畳まれた布団のうえにある枕

佳 雲 武 史 螢 晋 京 子 幸 子 美 子 良 大 輪 やすお しげお 宏 章 康 子 好 恵 あきら 重 人 妻 子 よしえ 哲 子 重 人 しげお 島

陽 気

菊池トミエ選



ランドセル陽気な春が背で踊る
陽気な妻選んだボクの宝です
老いの身も少し冒険花陽気
芸の道陽気な役者のつらい過去
病名を秘めて陽気に看病し
病床へ陽気やさそう車椅子
赤いバラ陽気にさせる一人部屋
合格の日から陽気な子に戻る
陽気な子ばかりはいない保育園
穴当てた馬券陽気に飲んでいる
陽気な子神楽太鼓に背で踊り
光るものないが陽気な子が五人
三寒四温陽気が迷う温暖化
減税へちよつと陽気な春財布
いい仲間陽気な旅の夏帽子
嫁がせる父は陽気になどなれぬ
春なのに陽気になれぬ花粉症
れんげ田へ陽気に蜂が寄ってくる
春陽気うかれ雀の喋り過ぎ
点字読む指も陽気な春になる
おおらかな五百羅漢に見る陽気
よい知らせ聞いている靴が踊りだす

多 賀 子 千 代 洋 俣 子 俊 子 勝 美 玉 恵 時 弘 重 人 まさと 権 悟 柳 弘 あずま 正 雄 岳 水 正 剣 典 子 よしえ 島 ちかし 満 秋

留守電の陽気な声について返事

よい知らせ陽気に街へ浮かれ出る
陽気な目料理に楽しい名をつける

雪分けて陽気に咲いた福寿草

ぜんそくが春の陽気にさわぎだす

陽気さの中で教授の大欠伸

紅一点混じると陽気になる力

庭先の陽気が誘うふきのとう

コロコロと笑い上戸の母がいる

衣更着の陽気にコート脱ぐ恐さ

お水取りも済んで一枚脱ぐ陽気

脇役はこの場陽気に振舞おう

哀しくて陽気に鍋を光らせる

啓巻を待ち構えてる地の陽気

とても陽気が大福餅を食べている

佳

陽気だが財布の紐は固い姉

思い切り泣いて陽気になった酒

如月の雪に陽気な馬耳東風

母の陽気な春が届く子等の部屋

種袋陽気な春を待ち焦がれる

人

振り上げたこぶし陽気なふりをする

地

早春の陽気へ芽ぐむ沈丁花

天

余生とや陽気に生きて歌おどり 門谷たず子

軸

啓巻や物皆動く春はそこ

先輩

田辺炎六選



先輩もおんなじ絵馬を掛けていた

先輩に咲かせてもらふ赤い花

先輩に示す見本が何も無い

ロボットが先輩の腕切り落す

先輩の横で豆腐がのみ込めぬ

先輩の背に追い越せと書いてある

先輩と言われ割り勘とも言えず

先輩が先に来ている二度の職

先輩に一步は譲る筈である

先輩の苦言に心洗われる

先輩のお陰で今の俺がある

先輩をライバルにする恩返し

先輩に酒も仕事も教えられ

先輩の好みに合やすネオン街

恋の道先輩だってゆずれない

先輩に命預けたふく料理

先輩が泣いた峠はこらしい

先輩の顔でも言う天下り

先輩に土俵の上で返す借り

先輩の真似てよいとこ悪いとこ

先輩を越えるときつい風当り

先輩に花を持たせている余裕

先輩の提灯持ちをしてあげる

先輩へすこし多めのさじ加減

先輩は神様でした父だった

先輩と書いてしごきと読みかえる

先輩を追い越すネジを締めなおす

先輩に可愛がられてるいじめ

先輩の温いしごきがありたい

先輩の名でここからは越えさせぬ

先輩の目が後ろにもついている

先輩の顔はしませんが無精ひげ

即席の先輩になる縄のれん

人生の先輩早婚だけの事

三浪という先輩であたたかい

先輩が教科書にないこと教え

佳

先輩が吞ませてくれた事がない

先輩を追い抜きました孫の数

動かずに先輩面をして困る

先輩のいやな処に蓋をする

頼り甲先輩ある先輩のかばい傷

人

先輩のしごき認める優勝旗

地

先輩の傘の雫をもちに受け

天

後輩に偉いのがいて背が寒い

軸

先輩は僕よりひどい恐妻家

さち子

隆風

克枝

妻雲

佳々

雄々

大輪

狸村

寿恵子

しげお

良知

周信

保夫

可住

俊子

はるお

島

次男

日枝子

めぐみ

潮華

美代子

夢田

満秋

初歩教室

題 — ソフト

吐田公一

初心者の方にとって推敲のむずかしさを物語る句が、左に掲げる句だと思つ

○四番で投手はどうせピエロです

課題の「ソフト」に対して、この作者は当然ソフトボールを想定して作句されたものと思ふのだが、率直に言つてこの句を読んだだけでは、ソフトボールに限定されているとは考えられない。草野球でもこの範疇に入るのはなからうか。句はひとり合点であつてはいけない。例えば

▽ソフトボールどうせピエロになる投手
とても表現すれば負け投手というか、力量不足の投手の姿が読みとれるのではなからうか。
添削句

○人当りのソフトで内に熱を秘め 省子
見付け良し。のを省略しても意味は明白。

一字でも省略して語呂をよくすること。

▽人当りソフトで内に熱を秘め

○三代がソフトに構えて波しずか 輝夫

肩の力を抜けばいいのでは

▽三代ソフトに暮らす知恵を持ち

○迷いつつソフトな道に辿りつく 久子

原句は他動的。ここは自分の意思を打ち出した方がよいと思つ。

▽迷いつつやはりソフトな道を選ぶ

○天下一ソフト東の間朱に染まる トヨ子

東の間が冗句。時事吟は分り易く具体的に

▽天下一ソフトムードで取る賄賂

○ソフトに見えて人に譲らぬ強い人 円女

中七の表現が今一步

▽ソフトに見えここ一番は強い人

○通夜の席ソフトに笑う割烹着 幸枝

解説は返信文をご覧下さい。

▽通夜の席ソフトな笑みの割烹着

▽挨拶もソフトな喪服通夜の席

○八十路来てソフトの顔がうつり出し とよ子

原句を重んずればせめて笑顔に

▽八十路来てソフトな笑顔うつり出し

○仏壇の花もソフトな色彩に 國八重子

下五に理由と締りを

▽仏壇の花もソフトに七回忌

○ソフト狂目をつむつても玉を追ひ 志重

上中句共一考して欲しかった。

▽夢の中までもソフトの球を追ひ

○筆さばきソフトなタッチ人間味 公子

下五が難。下五は川柳のいのちと言っても

過言ではないので推敲を十分に

▽筆さばきソフトで人柄まで丸い

○退院後ソフトになった自我主張 隆

平易な表現を用いるようになされば

▽病氣してソフトになった言葉付き

○札束がソフトな嘘に流される 登美

この場合はさらわれるが適当と思つ。

▽札束がソフトな嘘にさらわれる

○祖母も食べソフトクリーム風呂上り トシエ

順序を逆転すれば

▽風呂上りソフトクリーム祖母も食べ

○風呂上りへソフトクリームくれた孫

○誰も来ぬソフトにさつま焼けたのに 忍

さつま中途半端な表現。芋とすれば

▽来ぬ人をソフトに焼けた芋が待つ

○うまうまとソフトな舌に丸められ 利徳

この場合の表現としては

▽うかつにもソフトな舌に丸められ

○茨の道峠を越して柔い風 雄幸

上五が気負いすぎの感。

▽苦しかった峠を越して柔い風

○毒舌もソフトであればさわやかな 富江

下五が安易すぎる。

▽毒舌のはずがソフトな言い回し

○ぐちを聞く嫁はソフトに料理する 一典

下五が推敲不足

▽相槌もソフトに嫁はぐちを聞く

○病む姉の愚痴をソフトに聞き流し てる子

聞き流しでは薄情 同じことなら

▽病む姉の愚痴をソフトに聞いてやり

○物言いはソフト目つきがこわい女 啓子

同じ内容を少し表現を変えてみると

▽顔付きに似ないソフトな京言葉

○四苦八苦あの日をキズをソフトに丸め タツエ

破調句はできるだけ避けて推敲を十分に

▽苦しみのキズもソフトに丸め込み

○常に似ずソフト口調で頼みごと 一乗

上五が蛇足と思われず

▽物腰もソフトに頼みごとに来る

○老いゆけばソフトに生きて長生きを 美寿子

原句から余り外れないようにするとこんな

ところでしょうか。

▽長生きがしたくてソフトに世を渡る

▽腹立てずソフトに生きて白寿まで

○妻退院子等がソフトな膳につく 捷也

ソフトな膳の意味が解しかねる。

▽退院の母をソフトに子は支え

○顔よりもソフトムードに惚れました 君江

下五に余韻が欲しかった。

▽顔よりもソフトムードにはだされて

○パソコンのソフトなタッチこつ手 晩翠

この句の趣旨を全部句にしようとするれば、

一句では無理というもの。

▽パソコンをソフトな指が駆け回る

○ふんわりと包まれてみたい真綿雲 サト子

中八をすばり抱かれてとすれば語呂もいい。

▽ふんわりと抱かれてみたい真綿雲

○接待でソフトにされてついで洩らす 徳三

見付けはいい。ただインパクトが欲しい。

▽骨抜きにされて検査日洩らす M OF

○再検査ソフトな口調癒される 和可

中八になっても口調でとされた方が。中七

にするにはソフト口調でとなる。

○絵手紙のソフトなタッチ一行詩 茂代

着想抜群。優雅に書かれた一行詩を主にす

ると

▽絵手紙にソフトタッチな一行詩

○年がいもなくソフトボールにさわれる 明美

下五で説明句となつている

▽年忘れソフトボールに熱が入り

○喫茶店ぬぎたくないよソフト帽 苑子

▽喫茶店ふたりのムードソフト帽

▽カウンターの隅ハンサムなソフト帽

○庭の奥母娘ソフトな話し声 弘子

上五がいただけない。

▽母と娘がソフトに語る嫁ぐ朝

佳句

もめごとをソフトに包む母の知恵

ソフトウエア新規事業の立役者

説法がソフトな語り春の寺

今は昔ソフトに修羅の日を語る

人情が厚くソフトな人当り

ソフトさを確かめ孫の産着縫う

(こまやかな情愛が)

もう一本ソフトになった夫の顔

(いい着眼点です)

衣も食もソフトが嬉しい年になり

(老いの実感句)

淡色の服で春めく町に行く

(開放感があつていい)

頑固さもソフトな目には負けました

(続けてご投句を)

棘のある言葉ソフトに京なまり

(下五の表現がいい)

直球を母はソフトに受け止める

(母性愛の大きさが)

げんまんを揺するソフトな鬼がいる

(優しいそうない鬼?)

やわらかな口調で老妻が釘をさす

(見事な一句)

私の句

大ジャンプソフト着地の金メダル

八寿子

宗明

智加恵

つよし

義男

純子

宏

泰雄

雅子

武治

てる代

美子

睦子

睦子

睦子

睦子

睦子

睦子

睦子

睦子

睦子

睦子

睦子

睦子

睦子

『川柳塔』八五〇号記念大会

〈役員会〉

平成十年三月五日（木）午後二時—五時
アウィーナ大阪 三階 信貴の間

〈川柳大会〉

三月六日（金） 午後一時—五時
アウィーナ大阪 三階 葛城の間

開会のことは
あいさつ
理事長 河内天笑
主幹 橘高薫風

祝 辞
おはなし
大会委員長 黒川紫香
日川協事務局長 山本翠公氏
川柳「塾」塾長 寺尾俊平氏

披講

「門」 三幸川柳教室 木本朱夏選
「賑やか」 川柳塔打吹 野口節子選
「腕」 いずも川柳会 尼れいじ選
「駅」 川柳ふうもん吟社 両川洋々選
「誘う」 川柳たましま社 田辺灸六選

「会議」

「さくら」

「丸」 （事前投句）

閉会のことは

〈懇親宴〉

三月六日（金） 午後六時半—八時半
アウィーナ大阪 四階 金剛の間

開会のあいさつ
乾 杯
副主幹 宮口笛生
相談役 月原宵明

詩吟による川柳の朗詠・河内音頭ほか
閉会のあいさつ
副理事長 西出楓楽

〈観光〉

三月七日（土） 午前十一時
国立文楽劇場「ふるさとの人形芝居」

岐阜県恵那郡付知町 翁舞
新潟県佐渡人形芝居 説経人形 のろま人形

文弥人形

川柳塔みちのく 波多野五楽庵選

川柳大学 時実新子選

川柳塔社 橘高薫風選

副理事長 板尾岳人

活発に意見交流

初の役員会開く

川柳塔社は全国の役員が一堂に会する初の役員会を三月五日午後二時からアウイーナ大阪で開き、主幹・常任理事ら十五名、相談役参与十一名、理事十三名が参加した。

役員会は橋高薫風主幹あいさつの後、全出席者が自己紹介を行い、続いて河内天笑理事長が基調報告を行った。その中で今回の役員会は、川柳塔社の運営、同人・誌友の拡大、財政の強化などについて意見を交流し、全役員がその任務を自覚して活動の先頭に立つ決意を固めるために開いたもので、必要な事項は常任理事会で審議して具体化することとし、同人総会以後の活動の状況を説明した。

ついで西出楓楽同人部長が補足報告を行ったが、総会以降、同人拡大のピッチが進んでおり、今後、「役員報」を発行してその経験や意見を交わすことを検討し、『川柳塔』のバックナンバーを拡大宣伝に限り無料配布することを明らかにした。続いて出席者から

それぞれ意見を述べ、討論を行ったが、当日の主な意見は次のとおりである。

○地方との交流を進めるには、本社と地方の同人が緊密になることが第一であり、幸い各地の交通の便もよくなったので、お互いに往来することに努めたい。

○行事はできるだけ休日に実施してほしい。

○同人総会で年次計画を決定し、半年以上前から発表することが望ましい。

○財政が同人費・誌代によって大半がまかな

われているが、それ以外に方法がないかを検討してほしい。例えば広告を増やすとか新人教室を開くことなどが考えられる。

○常任理事の方は多忙だと思うので、同人・誌友の拡大委員会を別組織としてつくり、参与・理事に参加してもらったらどうか。

○各地柳壇に掲載している旬会には、年賀・暑中見舞の広告を要請すべきだ。

○本社旬会の会場費が四月から値上げされるので、旬会費を再検討する必要がある。

○本社旬会を昼間に開催してはどうか。

○誌代の値上げは慎重を要するが、上げるべき時は堂々と説明して上げるべきだ。

○今日集まった参加者は、早速、一人が一人の同人・誌友を増やすことに努めたい。

○役員会出席者 岩佐ダン吉・宮崎シマ子

金井文秋・前たもつ・神夏磯典子・西出楓楽

高須賀金太・西田柳宏子・塩満敏・小林妻子

山本希久子・仁部四郎・久保正則・内海幸生

西口いわる・河内月子・橋高薫風・板尾岳人

川端一歩・奥田みつ子・宮西弥生・米田恭昌

平松かすみ・上田佳秋・宮口笛生・吉村一風

大内朝子・春城武庫坊・榎山隆盛・田中正坊

山本義子・稲葉冬葉・芳地狸村・中村ゆきお

井上直次・八十洞庵・八木千代・黒川紫香

河内天笑（三十九名）

川柳塔社役員会



あいさつする橋高薫風主幹

川柳大会

前日の雨が三月六日朝、八五〇号記念大会を祝福するようにカラリと晴れ上がると一段と春の気配が濃くなった。

今年に入って例月の句会場となっているアウィーナ大阪であるが、今日はいつもと全く違った表情を見せている。

三階「葛城の間」へは、十時開場を待ちわびた柳友たちがどっと集まり、受付は一時嬉しい悲鳴を上げるほどであった。当日申込が予想外に多く、ウィークデーにもかかわらず三百十四名という大盛況となる。

出席者多数のため句会場に机が入れられず、別に用意された投句清記室（二上の間）や、ロビーで自信句をしたためる人、旧交をあたためる人、句集や直原玉青先生の表紙使用の色紙展示コーナーに見入る人たちで、華やかなにぎわいを見せていた。

正午に投句が締切られ、司会の高須賀金太氏と山本希久子さんが和服姿で登場して午後一時に開会となる。

開会のことは、河内天笑理事長が力強く述べ、続いての橘高薫風主幹の挨拶は94頁に記載の通りである。引続き大会委員長の黒川

紫香相談役の挨拶ののち、全日本川柳協会事務局長山本翠公氏の祝辞をいただく。

次に川柳塔きやらばくから八木千代さんにより「川柳塔社」へ贈呈された花束は、主幹が代表して受けこの大会に彩を添える。拝受した祝電は板尾岳人副理事長が読み上げ、大会気分をよりいっそう盛上げた。

おはなしは、川柳「塾」塾長の寺尾俊平氏かねてから入院中の夫人が今日よろこびの退院をされたとのことで、出席者一同心からお祝の拍手を送る。

同氏と時実新子さんと主幹は挨拶にもある



司会の金太・希久子さん





花束贈呈

ように同期の桜。化学の仕事に就いておられたのに、およそ畑違いの川柳にのめり込まれたいきさつから始まる。氏の言によると主幹の若い頃は「若旦那の風姿」だったが、年と共にだんだん路郎師に似てきて、最近では似ているというより路郎師そのものになってきていると感じられるそう。おはなしおじさんの「自称の通り、ユーモアたっぷり」の話振りに大いに笑われ、あつと言う間に時間が経ってしまった。

川柳大会は二時からじまる。呼名はフルネームのため、当初は戸惑いがあつたが順調に披露はかどる。選ばれる句は一題につき六十句（軸吟を含む）うち天・地・人・佳作



寺尾俊平さんのお話

丁重に土に返した古俵

野口 節子

木本 朱夏

思いきり泣けばいいのに唐辛子

選者 近詠

会を閉じた。

閉会のことを述べ、大会は予定通り五時に

田美也子さん（尼崎市）に輝く。

事前投句の「丸」の天位は月間賞として内

からの披露であつた。

を、お慶び申上げます」と祝辞をいだいて

ころとして、今日のよき日を迎えられたこと

学学長の時実新子さんには「路郎師の心をこ

が選の前に司会者から披露され趣を添えた。

五句という厳選である。選者それぞれの近詠

胸衿を開けば素手でふれてくる

尼 れいじ

風を抱く火を抱くおんな乱を抱く

両川 洋々

人情をこぼさぬように喜寿の皿

田辺 炎六

あらかたの命 水菜の花が咲き

波多野五楽庵

じんとくる手紙をくれたろくでなし

時実 新子



記名係のいわゑ・月子・ダン吉さん

ご挨拶

橘高薫風

本日は大勢の皆様方のご出席で、川柳塔八百五十号の記念大会を盛会にして頂き、ありがとうございました。心からお礼申します。

今までは七百号八百号の記念大会は開催してまいりましたが、五十号という峠での大会はありませんでした。今回は私個人のわがままであります。

昨年十一月の下旬に十二月号が届き、八百四十七号という数字が私の目を射たのです。八百五十号があと三月したらくる。五十号といえは四年と二ヶ月だ。一度私の主幹のときに誌寿の記念大会を持ちたいの思いで、急遽、理事長に会場探しを依頼しました。選者の人選一切も任せるからと電話を入れたのです。

新年号に発表したいので番傘さん、ふあうさんとさん、時の川柳さんや他社の選者依頼は間に合わず内輪でしようとしたのでした。

しかし大会と銘をうつからには全くの内輪ではさびしいので、ポイントの目玉が必要だと思ひ、私の同期の桜、寺尾俊平、時実新子のお二人にお願いしましたら、有難いことに即決OKでありました。お二人には目玉だなんて申してお詫びしなければなりません。

蓋を開けると参加下さる方は句会も宴会も

予定の五割増しやら三倍に近いやらで受け入れの担当者はてんやわんやの応対と相成りました。私どもにとっては、勿論、長野のオリビック以上の感動であります。このご恩はばつづながらお返しいたします。

川柳塔の仲間だけでなく、他社の方々も、川柳の仲間としてご参加頂きました。心からお礼を申し上げます。

私は八百号記念大会のときに八百号の足跡を申し述べましたが、大正十三年一月の創立句会、二月の創刊号発刊以来の、麻生路郎先生の川柳への敢闘ぶりは筆舌に尽くせません。『川柳雑誌』四百六十号での終刊、『川柳塔』と改題しての四百六十一号が昭和四十年十月号として再出発、中島生々庵、西尾菜主幹を経て現在に至っています。

この間の運営や同人の在り方はすい分変遷を経てゐるのです。川柳塔の初期では六十頁ほどの雑誌ながら、プロの編集者と事務担当者雇ひ、月給やボーナスを出して、経済的な不足は十数人の幹部で月々支援をしていたのです。一番安直な運営でしたが、それでは今の大きく飛躍した川柳塔には通じません。漸次の改革を重ねて現在に至ったのです。

また私は次の世代にバトンを渡すべく、組織の強化と、後進の自覚、成長を促し充実せねばなりません。大阪だけでなく地方の同人誌友の方々のご支援がいよいよ必要であると存じております。

昨日、役員会をはじめて開き、地方の方たちの多様な建設的ご意見をお聞きしましたのも先ずはその手はじめの実践でありました。

私はここで一つのお話を申し上げたい。

それは昭和四十年から二年前まで印刷の労を頂いた藤原章心社社の藤原儀春氏の言葉です。老齢になられたので印刷業務の一切をご子息に譲られた。その時、川柳塔さんの仕事も息子に渡したいが私はそれをしないと仰有るのです。息子に渡して息子が何もかもひっか

まえてするようになると、川柳塔の仕事つまり活字を拾って印刷へ回すまでの手順ですね、それを長年していた人を失業に追い込むことになるといけない。私はそれを避けたので薫風さんよろしく頼みますとのことでした。こういう方に守られて川柳塔の印刷はスムーズに続けられてきたのです。

こういう人間関係もしつかり若い人たちに認識してもらいたく思っています。

皆さん、今日はほんとうにありがとうございます。路郎先生も生々庵先生も葉先生も安心して下さっていると思います。

これからもよろしくお願い致しまして、私の挨拶といたします。

懇親宴

大会出席者の半数、百五十名の方々が懇親宴に参加という嬉しい番狂わせに、急遽、会場を変更、そのために当初五時からの開始予定が一時間以上も遅れることになった。

遠方からの参加者は帰りの交通の都合もあるのでは……と、常任理事が手分けして、参加申込者全員に電話で出欠の確認をした。幸い始どの申込者はそのまま、懇親宴に参加していただけた。

当日、六時過ぎには広い金剛の間に十八のテーブルを囲んで紳士淑女の笑顔が揃った。司会は大尾の川柳クラブわたの花のコンビ吉村一風さんと大内朝子さん。乾杯の音頭は愛媛県汐風川柳社顧問・本社相談役の八十八歳の月原宵明さん。

はじめに、二宮山久さんの詩吟による川柳



月原宵明相談役

の朗詠、路郎先生の「寝転べば畳一帖ふさぐのみ」と薫風主幹の「恋人の膝は檸檬のまるさかな」を朗々と吟じた。

男装の八木千代さんと若妻役の可愛い澤田千春さんの名コンビの踊りにおひねりが飛んだ。奥谷弘朗さんの映画説明。小林トメ子さんが仮面をつけて「道頓堀行進曲」の達者なステップを見せる。また、河内天笑・月子さん夫妻のムード溢れるハワイアンが、会場をひときわ華やかに盛り上げる。

飛び入りもあったが、なかでも圧巻は時実新子さん、寺尾俊平さん、薫風主幹の三人の「同期の桜」の合唱(?)であった。たくさんカメラに包囲され、「同じ川柳の庭に咲く」はそここの卓で唱和の声が起った。

各テーブルでは、話が弾み、酒やビールのピッチも早い。はじめての人とも旧知のように肩を組み写真をとる。

最後はプロの川内叭笑氏の河内音頭に合わせて踊りお開きとなる。

観光

大会翌日は打って変って、冬に舞い戻ったような寒さであった。八五〇号関連行事の最後を締め括る人形芝居観劇参加者は十四名。



和気あいあいの宴

日本橋の国立文楽劇場ロビーには、太樟の音が響きムードを盛上げる中、お抹茶とお菓子をいただく。

今回の出し物は、民俗芸能公演で、何よりうれしく舞台を近しいものに行っているのは、誌友の高野不二氏が高野藤右衛門として、佐渡の真明座から出演されていることである。約二時間、文楽とは一味ちがった素朴な人形芝居を堪能し、一同は名残をおしみながら解散した。

川柳大会入選作品

門

木 本 朱 夏 選



今日は啓蟄九〇〇号に門が開く
冬眠の門をもぐらが開けにくる
ヨ―イドンもう秒読みの春の門
春来ると門にちらしが增えてくる
無住寺の門に静かな春がある
ヤマボウシ門の地蔵を抱く如く
寺の門大きな耳が二つある
山門の阿吽のどれを信じよう
門一步出れば踏み絵が置いてある
少年が躓く春の重い門
門のある家に住みたいクレヨン画
家見えぬ門に嫉妬をしています
門のある家です遠慮がちに言う
午後五時の門は疲れた人を吐く
門灯に孤独を少し救われる

島 ひかる
田中 亜弥
杉野まつ子
古川 奮水
中田たつお
伊藤 武
原 章峰
諏訪 柳々
川島諷云児
岸 桂子
梶川雄次郎
立蔵 信子
杉野 睦朗
波多野五楽庵
出口セツ子

鍵の無い門で女の不眠症
婚約が済んで門限はずされる
青春の門は迷路の先にある
門灯は母が呼んでるように点き
門前で一度女を整える
門灯を残して風邪の母が寝る
ぬるま湯に慣れて未婚の門とじる
病院の枢正面出られない
門外に出れば他人という磔
一門はみんなカタキで仲がよい
軍門に下る気旗を染め直す
門外不出の封印からを腐り切り
門閤に気兼ね本音が切り出せぬ
古希入門腓返りがでしゃばりで
いくさの象徴凱旋門をきらい抜く
呼び付けておいて暫く待たず門
青春の門から続く雨季乾季
竜宮の門に暦を掛けておく
山門くぐると私の中の喪が明ける
門付けの太棹が逝く津軽雪
おおらかに開く駆け込み寺の門
門のなか雨漏りなどは見せられぬ
ご先祖の顔が生きてる門構え
重文の門が開いて当主の計
油蟬門のドラマを見てしまう

小野 克枝
石原 靖巳
籠島 恵子
倉益 一瑤
新田 満江
玉利三重子
早崎 和子
榎山 隆盛
榎原 公子
小池しげお
両川 洋々
田頭 良子
岸野あやめ
櫻庭 順風
波部 白洋
角野 仁清
川上 大輪
坂田和歌子
永井三津子
相馬 銀波
武本 碧
植田 一京
芳地 狸村
山本 半銭
福士 慕情

神さまの押し売りにくる寒い門
教会の門おろおろと素通りする
門灯の昏さよ鶴は北へ飛ぶ

母の門目立たず鍵が開けてある

売りに出す門がしょんぼり春の宵

鬼門にはひまわりの種蒔いておく

ときめいて少し恐れて門叩く

門をかけて仏法僧は留守

水門があふれていのち動き出す

臆病な門でめったに開かない

百態の門をくぐった嘆願書

佳

門限を子のポケットに入れておく

どなたでも自由な門と菜の花忌

晩学の門が哀しいほど高い

門限があり大正の父がいる

門のない家へチューリップが並ぶ

人

門を構えた男背すじをのばすなり

地

長いこと人の匂いのせぬ門だ

天

髪型をかえるわたしの門かえる

軸

校門のさくらが待っていてくれる

大村美千子
森 茜

田辺 鹿太

野邊喜美子

河内 月子

長浜 澄子

奥田みつ子

土橋 螢

増田 紗弓

加島 由一

久保 正剣

門脇 晶子

森中恵美子

土田 欣之

森 明美

太田扶美代

船津とみ子

中井 ゆき

夕 風子

木本 朱夏

賑やか

野口節子選



賑やかな話一升提げて来る

賑やかな町で素うどん食べている

針供養おんなの業が姦しい

賑やかな妻が沈んで不気味な日

健康だ美容だ賑やかにサラダ盛る

爺ちゃんの家広いなと鬼ごっこ

ヒーローが生れた街は賑やかだ

賑やかにこころ隠しているピエロ

賑やかな都会の風へ立ち向かう

賑やかに生きてひっそり逝くラスト

賑やかな親父の彼女持て余す

賑やかな斉唱南無妙法蓮華経

子離れの熟女飲み食べ唄い出す

子だくさんついでに犬も猫も飼う

鍵穴を覗いてみたい賑やかさ

大蔵省ちよつと賑やか過ぎないか

笛太鼓三味に囃され唄も出る

賑やかに恋猫春を眠らせぬ

石原 靖巳

高橋 夕花

清水 潮華

傍島 克治

山本希久子

豊田 羊子

大石あすなろ

長浜 澄子

野邊喜美子

中田たつお

宮木 一夫

金村 青湖

井伊 善三

佐藤 治代

古久保和子

濱田 良知

川内 叭笑

西原 艶子

賑やかで涙もろくて強い母
 賑やかな方へ傾くやしろべえ
 賑やかなお方が去んで飲み直す
 対談で上沼恵美子だけしゃべる
 大都会二十四時間眠らない
 賑やかに踊り浮世の憂さ消そう
 残り火が賑わい見せて妻の乱
 賑やかな妻のおしゃべり幕が無い
 賑やかに燃えて聖火は去る長野
 賑やかな星だ地球と言うらしい
 賑やかな物干し竿にある活気
 賑やかに雛を飾って老母ひとり
 惜しまれて逝き賑やかに送られる
 職捜す身には切ない繁華街
 寒椿わが賑やかさなど知らず
 賑やかに女三人夏帽子
 人が好き賑やかが好き五目めし
 賑やかな人ねと自分棚に上げ
 お蚕の妙技夜通し賑やかに
 賑やかな仮面が身から離されぬ
 水面下の駆け引きにぎやかな政治
 この家に賑やかだった頃がある
 賑やかに老人ホームの鳩ポッポ

亀岡 哲子
 奥谷 弘朗
 河内 月子
 松田 俊彦
 銭山 昌枝
 杉本 孝男
 榎本日出国
 永井三津子
 新田 満江
 川上 大輪
 妹背尽呂久
 植田 一京
 西出 楓楽
 伊藤シズ子
 池 森子
 藤井 正雄
 川上 富湖
 篠原いつふみ
 川久保睦子
 澤田 千春
 波部 白洋
 太田扶美代
 川原 章久

賑やかに又しめやかに哀挽歌
 ご飯をいっぱい食べると賑やかになれる
 賑やかに弱者をさらす週刊誌
 賑やかに春を唄っている命
 賑やかな席で長居に気付かない
 波の音潮引くまでの賑やかさ
 賑やかに咲いてしまった蛇いちご
 異端者が一人賑わす金魚鉢
 床の間に据えると賑やかな壺だ
 佳
 さえずりにもらう陽気な朝の風
 賑やかな都会で黒い空気吸う
 母の計に鴉賑やかすぎないか
 鈍感な人ばかりいて賑やかだ
 人妻の枠を外して賑やかに
 人
 山の子を寝かせてくれぬ潮の音
 地
 鐘や太鼓で私の首を売りに出す
 天
 賑やかな羽音で娘飛び立ちぬ
 軸
 賑やかな中で孤独な風と住む

米田 幸子
 山本 磔
 八木 千代
 土田 欣之
 楊井 二南
 藤田 泰子
 原 章峰
 細川 稚代
 玉利三重子
 木村 初子
 川島諷云児
 山本 玉恵
 新家 完司
 吉村 雅文
 岡本 花匠
 両川 洋々
 田頭 良子
 野口 節子

腕

尼れいじ選



すご腕を持て余してる不況風
 腕一本くらしを乗せた力こぶ
 抱き締める相手がいない腕二本
 点滴の最後が落ちるさむい腕
 師を越えた腕は師の恩忘れない
 親方の腕学歴にこだわらず
 わたくしの腕を知ってる裁ち鋏
 腕を組む男自信の駒さばき
 四人育てた腕を娘が見逃さぬ
 二度童子鉄腕アトムと飛ぶ夢を
 腕に縋りかけると脆い骨粗鬆
 実力を確かめている腕試し
 片腕と頼む男が切れすぎる
 腕を組み父は夕陽と対峙する
 陶工の腕は無言で炎と話す
 跡継ぎの腕が嬉しいほど光る
 腕つぶしが強いと履歴書には書けず

源田八千代
 富田 蘭水
 新家 完司
 小野 克枝
 楠 昭子
 宮口 笛生
 籠島 恵子
 久谷まこと
 太田扶美代
 名原 純子
 米田 幸子
 奥谷 弘朗
 西田柳宏子
 奥田みつ子
 吉村 一風
 土田 欣之
 小松原爽介

やんわりと涙のかわく腕の中
 喝采を好む女の力瘤
 たくましい仁王の腕を信じよう
 信じてた腕の中にもいた阿修羅
 棟梁が釘を一本頼まれる
 情熱を抱いたか腕が濡れている
 腕組んだままで貸すとも貸さぬとも
 お互いの腕を信じた鶴匠と鶴
 ぼっちゃりの女が眠る腕の中
 信号無視ばかりしている僕の腕
 惚れたのはこの腕でした法善寺
 腕がたちにくまれ口をたたかれる
 腕はどうあろうと手術台にのる
 腕足りぬところは舌でカバーする
 手腕家と言われ姿勢が崩せない
 羅漢の腕を誰も見たことないらしい
 リストラの腕が鳴ってるまだ五十
 持ち腕も生かせず不況の風に病む
 腕ぶしは強いが無口で養子です
 大根の白に腕前試される
 腕の中お金のことを言い出せず
 感動が腕にやさしく新生児
 母の腕の中はいつでも風の海
 金のある方が腕組みまだ解かぬ

林 はつ絵
 播本 充子
 田辺 鹿太
 野邊喜美子
 菱田 満秋
 小西 幹齊
 波部 白洋
 垂井千寿子
 坂田和歌子
 江口 度
 梶川雄次郎
 橋本多哥由
 嵯峨根保子
 西出 楓楽
 川島諷云児
 田中 亜弥
 森 茂美
 小白金房子
 島崎富志子
 木本 朱夏
 森中恵美子
 田中由紀子
 竹治ちかし
 古川喜美子

腕の中羽根を休めていいですか
腕の冴え今はたるみに秘めている

腕組めば故郷の川が流れ出す

青年の腕海を抱き未来抱く

痩せ腕といえども義理は知っている

リストラの腕にからんでいる朝

腕ふるう精一ばいの玉子焼き

二十一世紀を視野に腕立て伏せをする

腕だけはまだ衰えぬ痴呆症

職安がやる気の腕を診てくれぬ

ボランティア笑顔も添えて腕まくり

佳

ごまかしも追従もない老父の腕

千手菩薩の腕にそれぞれある祈り

献血の二十歳まぶしい白い腕

脱税の腕は確かな医者らしい

両腕を伸ばせば届く妻の位置

人

心機一転腕立て伏せをくり返す

地

愕然として両腕の石捨てて

天

腕に針刺されたままの白い闇

軸

数のうちならば貸します細い腕

倉益 一瑤

福重 美子

武本 碧

吉村 雅文

井上 富子

原 章峰

田頭 良子

池 森子

川上 大輪

武田 帆雀

田辺 炎六

早崎 和子

両川 洋々

濱田 良知

福田 満州

門谷たず子

山本 玉恵

伊藤 寿美

大村美千子

尼 れいじ

駅

両川 洋々 選



月曜の駅でかあるい出社拒否

乗り越しの酔いを寝かせて駅も寝る

とはいうものの行つてみようよ京都駅

この駅は冷たいというホームレス

ラッシュ駅少しセクハラ過ぎないか

駅一つ歩く私のダイエツト

終着の京都 人降りカニが降り

新駅を生んだ利害に町も揺れ

臆病なまでに時間を守る駅

無人駅わたしとおりの風の音

トンネルの向こう駒子に会える駅

中年の恋が一駅歩きます

無人駅風はわたしの膚にあう

もう逢わぬ決心をした花の駅

眠そくな口ポツトばかり始発駅

生真面目な駅の時計と馬が合う

喜怒哀楽駅の時計は狂えない

加島 由一

酒井 輝

杉野まつ子

筒井 丹悠

濱田 良知

田中 正坊

宮口 笛生

杉本 孝男

吉村 雅文

小白金房子

高杉 鬼遊

榎本 露児

榎原 公子

西口いわゑ

川久保睦子

川上 富湖

安平次弘道

終着の駅にドラマが一つ消え
 叱られてみたくて母の駅に立つ
 人生の駅だと想う古稀になり
 泥軍手男の駅に干してある
 球児たち春の駅から翔んで行け
 一線を越えて女と駅にたつ
 兵隊と米を送った駅でした
 始発駅青いりんごが涙ぐむ
 乗り換えの駅でシナリオかきかえる
 廃線の駅はなんにも語らない
 見失う自分を捜す始発駅
 冬の駅自称詩人が降りて来る
 バンザイの駅出征を新婚を
 左遷地の駅がわたしの性に合い
 呆けてなるかよ終着駅はまだ遠い
 閻魔さんだけ知っている終の駅
 冬ざれの駅へ魂置き忘れ
 影のない男と駅ですれ違ふ
 戦いの仮面を着ける朝の駅
 終着駅降りて二人は風になる
 親という始発駅から旅立てぬ
 駅は嫌い父も夫も征ったまま
 犯人と刑事が駅ですれ違ふ
 駅出来る噂を地価が聞いている

小玉 満江
 長浜 澄子
 植田 一京
 一本 勇太
 田中 亜弥
 橋本多哥由
 仁部 四郎
 岡本 花匠
 村上ミツ子
 小林 妻子
 大内 朝子
 大石あすなろ
 海老池 洋
 酒井 一壺
 米田 幸子
 以倉 菜々
 西出 楓楽
 田辺 鹿太
 出口セツ子
 大村美千子
 永井三津子
 柴本ばっは
 新家 完司
 江口 度

蝶々が改札抜けた無人駅
 逃亡者の行方見えていた駅の鳩
 宇宙での一番駅はどこだろう
 国境の駅で還らぬ島が揺れ
 ジュリエットロミオと出会う無人駅
 旧姓に戻るわたしの駅がある
 無人駅のポストに溜まる風の息
 駅に来てやっぱり家出してやろう
 デゴイチの馬力は駅の雄叫びか
 駅前の花屋でカサブランカの死
 佳
 極楽へ一番近い駅に居る
 人が流れる駅で藻屑となるひとり
 燃えつきた羽を休める駅がない
 職探す男に始発駅がない
 女の駅ひとつ停まるとひとつ老け
 人
 キオスクに暗算の天才がいる
 地
 通過駅だったなAもBCも
 天
 始発駅緞帳揚げるのは神か
 軸
 ああ赤字駅やレールに罪はない

楠 昭子
 西村りつえ
 福岡 雅楓
 波多野五楽庵
 島 ひかる
 吉村さち子
 木本 朱夏
 河内 月子
 吉岡きみえ
 池 森子
 川島諷云児
 山口 美穂
 野口 節子
 田辺 炎六
 萩原 典呼
 谷口 義
 玉利三重子
 倉益 一瑤
 両川 洋々

誘

う

田 迎 灸 六 選



望郷を一途に誘うハーモニカ
 軽い誘惑なら乗ってみる宿の下駄
 野良ネコが大事なミケを誘い出す
 夜桜に誘われ二人行ったきり
 縫る目で今夜は帰りたくないの
 親友に啓蟄ですと誘われる
 誘うてもうちの嫁はん動かない
 自殺まで誘われている紐をわけ
 役付きになったら鬼に誘われる
 誘っても神は耳栓してござる
 美女からの誘いに弱いお父さん
 誘ったらあんた一人で行きなはれ
 男として五月に誘うものがある
 五百羅漢父に似ていて誘われる
 私から誘って絆たしかめる
 易の灯が誘う苦しい資金繰り
 浮動票ばかりを誘うにぎり飯

土田 欣之
 阿萬 萬的
 宮木 一夫
 杉本 孝男
 北村 賢子
 結城 君子
 波部 白洋
 江口 度
 菱田 満秋
 両川 洋々
 芳地 狸村
 早川 盛夫
 森中恵美子
 福原 悦子
 太田扶美代
 萩原 典呼
 川上 大輪

菜の花に誘われて舞ううかれ蝶
 人生の落書き生と死の誘い
 入信を誘うしつこいおせっかい
 春の闇誘ってならぬ人という
 ネクタイを貰った女に誘われる
 春の陽に誘われて出る万歩計
 誘われていつもタクトを振っている
 飲めない人と知っているから誘わない
 善人の仮面が誘う甘い罠
 雪誘う今夜の罪を消すように
 不参加は承知で誘いかけておく
 人妻を誘うとんでもない男
 一徹なわたしを誘う人もない
 美しい疑似餌で誘う男の背
 いい体自衛隊にと誘われる
 お誘いもめつきり減った不況風
 炎抱くおんなが誘うから逃げる
 極楽へ誘われそうな霊柩車
 奈落へは甘い言葉で誘われる
 二月堂の火の粉に誘われて春よ
 観梅の欠礼三行のはがき
 不器用な誘いにあつた温かさ
 勇退はどうかと肩を叩かれる
 誘い出してあげる気苦勞してる人

秀川 直枝
 家守 政子
 井上 富子
 岩本美智子
 土橋 螢
 山口三千子
 玉置 当代
 稲本 凡子
 武本 碧
 森本 文子
 傍島 克治
 鴨谷瑠美子
 三好 専平
 一本 勇太
 寺井 東雲
 小西 小雪
 大内 朝子
 小林 妻子
 西出 楓楽
 高田美代子
 稲葉 冬葉
 沢田 和子
 吉村さち子
 籠島 恵子

二次会に誘う顔ぶれ決めておく
誘うでもなく矢印を見せにくる
旅気分誘う八百五十号

風が誘うと轡が喋りそうになる
少し金貯まると多くなる誘い
酒ぐせがわるい男で誘われぬ

誘われて失楽園は似合わない
あの人の誘い私の発火点

誘われてわたしも遺書をかいている
悪友の通夜に屋台の灯が誘う

住

春風が焼け棒杭をそそのかす
郷愁を誘う都会の国訛り

未亡人になつたら誘つて下さいね
手も足も出ないこけしが誘う乱
情熱のかぎり誘う串団子

人

誘いには乗らない夜の歯を磨く

地

一期一会優しい風にある誘い

天

ピエロ百態涙を誘うのは帽子

軸

石垣を誘う八百五十号

小林由多香

八木 千代

尼 れいじ

原 章峰

竹治ちかし

小白金房子

名原 純子

神夏磯典子

小野 克枝

酒井 輝

角野 仁清

西原 艶子

山本 磔

園山多賀子

池 森子

小松原爽介

吉村 雅文

相馬 銀波

田辺 炎六

会 議

波多野 五楽庵 選



会議中目立ちたがりが一人いる
家族会議猫まん中に座を占める
激論を交わす会議で昼寝する
会議ともなればネクタイ締め直す
水面下で札束からむ多数決
リストラの会議に重い咳一つ
吸殻の山で遭難した会議
似顔絵をいつも書いてる会議中
上役の都合で会議のびました
弁当が出てから会議丸くなり
時節柄料亭会議やめました
結局は筋書通りになる会議
仲良しが寄り題名のない会議
会議の中へ割り込んできた祭り笛
沈黙を通すどうでもよい会議
会議室出てから女と会う電話
ブルータスがずらり並んでいた会議

榎本 路児
西口いわゑ
黒田 能子
楊井 二南
西村りつえ
出口セツ子
一本 勇太
酒井 一壺
大石あすなろ
石原 靖巳
板垣 草丘
黒川 紫香
高田美代子
田頭 良子
土橋 螢
宮西 弥生
嵯峨根保子

會議中詩人がひとり困らせる
 會議室一輪さしもかしこまる
 會議室出てからくしゃみ二つくる
 どんでん返し秘密會議がもれている
 鬼どもの會議は夜に限られる
 會議するたびに赤字が増えていく
 會議また堂々めぐりして終る
 家族會議の矢面に立つのはわたし
 採決のときだけ数に入れられる
 會議白熱夜叉と菩薩が睨み合う
 鶴の一声いつも会長會議決め
 最後には山が動いて會議終え
 西陽さす頃には會議終りたい
 延長の會議へパンが配られる
 リストラの會議積んだり崩したり
 少数派いつも歯ざしりしています
 春の睡魔がとっても好きな會議室
 卓袱台のみかんも口を出す會議
 フェインの髭が揺らせている會議
 船頭が多くて迷走する會議
 會議延長おれが責任負うてやる
 會議中欠伸いくつもかみ殺す
 ボケットにアクシデントがある會議
 會議室嘘がなかなか固まらぬ

木本 朱夏
 沢田 和子
 家守 政子
 岩本美智子
 田辺 鹿太
 氏林 洋敏
 清水 利武
 光井 玲子
 玉置 重人
 小野 克枝
 寺田 甚一
 竹治ちかし
 澤田 千春
 佐藤 治代
 坂上 高栄
 高須賀金太
 西出 楓楽
 玉置 当代
 中野 健吾
 妹背尽呂久
 船津とみ子
 小玉 満江
 榎原 公子
 原 章峰

正論は末席にいて騒がない
 絵に画いた餅をいじっている會議
 発言をしたら火の粉がふりかかる
 リングの芯残したままで會議閉じ
 野心家がポイントかせぐ會議室
 忍耐が試されている會議録
 騙されてあげよう會議好きだから
 感情がこじれ會議が煮つもらぬ
 マンネリの會議を破る導火線
 卑怯かと思う會議のヤジロベエ

佳

掃除機も火傷しそうな會議室
 貫禄の一喝會議黙らせる
 猫に鈴付ける會議がまだ続く
 神さまの會議で次の番が来る
 冬眠の蛇が會議で起される

人

荒縄でしばる會議をやっている
 どんぐりの會議転んでばかりいる

地

天

軸

會議室の花瓶の耳が大きいぞ
 病葉の涙でつづる會議録

中井 アキ
 宮園射月芳
 志田 千代
 田中由紀子
 早崎 和子
 藪野けい子
 福本 英子
 吉村さち子
 福士 慕情
 小松原爽介
 神夏磯典子
 吉村 雅文
 角野 仁清
 新家 完司
 門脇 晶子
 武田 帆雀
 楠 昭子
 古久保和子
 波多野五楽庵

さくら

時実新子選



ロビーからさくらが見える佳き日なり
逢いたい人に逢うたさくらに花が咲き
花冷えや浪人生と待ち合わせ
おとおんなおとおんなの夢さくら
舞いながらさくらは何を考える
人間を少しばかり撮るさくら
吊り橋を渡る背を押す花吹雪
さくらさくら私もパッと咲いた頃
さくら満開風狂の血をふところに
いい年をしてさくらに嗤われる
美しい老いをみつめる桜の芽
枯れそうなさくら私と同年
錯覚のようにさくらは散りました
葉ざくらになると誰方も知らん顔
人の道とはどんな道さくら咲く
忠実に咲けば眠とうなるさくら
桜から一步も出ない桜守り

辻川 慶子
伊藤 寿美
高須賀金太
岡本 花匠
澤田 千春
増田 紗弓
住谷 石舟
町田 達子
倉益 一瑤
恒松 町紅
田頭 良子
福本 英子
榎原 公子
田辺 炎六
早川 盛夫
黒川 紫香
土田 欣之

さくら散る風の誘いにうなずいて
倒産を知らずさくらは咲くだろう
さくらさくら後もどりする血糖値
さくら忍ばせない手紙書いてます
遠ざかる亡母へさくらが降りしきる
さくらさくらさくら話がまだつづく
さくらさくら死は遠いとも近いとも
白鳥と桜に永遠のすれちがい
方程式解けてさくらが咲きました
悔い一つわたしの中でさくら舞う
陰膳に花一枝の独り言
さくら咲くひとりの女しか知らず
さくらはらはら墓地のはなしを決めてくる
父の忌も母の忌もある山桜
年毎にさくら美し生命惜し
風邪ひいたぐらいで花見断れぬ
妖かしの桜に恋を見抜かれる
さくら五分咲いて決れの決意する
眼帯の奥にもさくら咲いている
二人してどんどん逸れる桜道
通り抜けまだ前向きに生きている
さくら散るまでは仕事の手がつかぬ
さくら百態未練がましく散る桜
いま呼べば来るかも知れぬさくら散る

神原まさと
堀端 三男
生嶋ますみ
道家えい子
玉利三重子
中田たつお
波部 白洋
松田 俊彦
川島颯云児
高橋 夕花
坂上 高栄
山本 礫
榎山 隆盛
福士 慕情
加島 由一
杉本 孝男
川端 一步
岸野あやめ
大石あすなろ
川田由紀子
太田扶美代
遠山 可住
米田 恭昌
筒井 丹悠

左遷地の桜に明かす胸の内

たこ焼のおじさんさくら見ては焼く

イエスノーさくらの返事待っている

さくら桜愛は先着順ですか

花子太郎今年も桜咲きますよ

愛犬を埋めた桜が庭にある

桜まだ六十年を生きただけ

さくらよさくら私の胸も花の乱

はらはらと桜自分史書き上げる

八十歳左近の桜植え替わる

佳

急がねば剥がれる唇のさくら

一分ずつ狂うさくらもわたくしも

死にぞこない生きぞこのうて見るさくら

さくらさくらおもいだせない母の顔

わたくしのうしろに立っているさくら

人

昨日ひらひら今日ほろほろと散るさくら

地

大人同士さくら見物して別れ

天

人がいっぱい死んでそれからさくら咲く

軸

さくらからさくらへ生きてきたような

久谷まこと

田中 亜弥

吉岡きみえ

金村 青湖

山本 義子

嵯峨根保子

山本希久子

宮本欣史子

岩佐ダン吉

秋元 てる

大村美千子

原 章峰

橘高 薫風

夕 風子

高田美代子

小林 周信

谷口 義

新家 完司

時実 新子

事前投句

丸

橘 高 薫 風 選



笑い仏の丸い肩から春になる

春を摘む丸い手籠を提げて行く

春の彩丸い器に盛り上げる

丸鍋に思い出がある春の雪

抜きんでるものなく鴨は丸丸と

故里の情けも山もまん丸い

ログハウス丸い情けはオラが城

丸い背に継ぐ子のいない田が残り

花丸へ孫はじけるる幼稚園

花丸は母と妻とのうまい鮎

両腕の大きな丸だ合格だ

なかよしの丸いポストがある学校

合掌のかたち母の背丸くなり

言い訳をする背中丸くなる

油断してわたしの背中丸くなる

添削をするといじけた丸になる

中田たつお

吉岡きみえ

岡本 久峰

森中恵美子

古川喜美子

月原 宵明

故芦田 静江

伊藤 寿美

長谷川呂万

垂井千寿子

柴本ばっは

森 茜

辻川 慶子

堀江 光子

立蔵 信子

原 章峰

初春に丸丸とした曾孫でき

爪丸く切り初孫に逢いにゆく

まるまるとフィルム一本孫の顔

この星を守るつぶらな瞳です

この月が丸くなつたら来てくれる

胃袋をまあるく回る今日の酒

盃の丸みで流す蟠り

日の丸を出してどっかり酒にする

戦友会生きて語れる丸い月

素晴らしい予感をくれた丸い月

身のほどがわかり始めて丸くなる

枯れてきてきれいな丸になつてくる

人情の町たこやきが丸く焼け

丸ビルのニュース見ている喫茶店

税務署へ丸い眼鏡に替えてゆく

丸とペけどちらでしようか閻魔さま

リハビリのために毎日円を描く

斜めから見た時檣円だとおもふ

根回しで丸を書かした過半数

妖怪が踊って丸い輪をつくる

クローン猿丸い目玉がいとおしい

日出ずる国日の丸が歪んでいる

丸かじりされて林檎は恥ずかしい

書く度に母という字が丸くなる

清水 利武

西出 楓楽

亀岡 哲子

樋口 冬虹

玉置 英子

吉村 一風

相馬 銀波

沢田 和子

小白金房子

木村 初子

大石あすなろ

玉置 重人

角野 仁清

児玉 蛙

住谷 石舟

福岡 雅風

氏林 洋敏

安藤寿美子

八十田洞庵

吉岡 美房

阿萬 萬的

杉野 睦郎

神原まさと

川上 富湖

相性が良いか丸味の出た夫婦

同心円妻がだんだん大きくなる

二重丸もらう夫になるまいぞ

まん丸になつたらあなたに影がない

丸い輪の縫い目が何処か分らない

コンパスの丸から逃げ道を探す

仁王さんに丸い心をいただきぬ

エンピツを尖らし丸い輪が書けぬ

丸暗記で十五の春も無事にすみ

あの人を入れたい輪なげとどかない

二人して見た睡蓮は丸くみえ

父らしい丸が残っている古典

佳

日の丸の小旗を持って亡兄がくる

子の巣立ちあなた花丸くれますね

より丸く月に寄りそう月の暈

誕生へひたすら転ぶ毛糸玉

まる描いてちよんそんな大臣ばかりなり

人

丸描いてその真ん中の人ざらい

地

日の丸のほかに父には丸がない

天

這い這いのボールは母の丸い膝

久谷まこと

志田 千代

簡井 丹悠

中井 アキ

福士 慕情

大村美千子

西口いわゑ

山口三千子

安平次弘道

高島 啓子

櫻庭 順風

増田 紗弓

町田 達子

永井三津子

八木 千代

楠 昭子

都倉 求芽

杉野まつ子

菱田 満秋

内田美也子

大会に参加して

出席者は

みんな身内

中井 ゆき

素晴らしい交流

波部 白洋

この大会には、うちの川柳文学からは、長老で顧問の堀江としをと主幹の私の二人が参加して、何とか責を果たしましたが、うちの句会、ご常連の柳宏子、萬的さんと顔を合わすと、早速御礼のことは言われ恐縮でした。もっとたくさん参加できる日が来ればいいのですが、いろいろ事情もあって、申しわけない次第です。

四年前の八〇〇号の時は、私と、同人の宮前秀子に参加したのですが、その時、どうしたのか、私、朝から声が出なくなって、投句をすまずと、すぐ退去いたしました。

今回は、声は大丈夫で、入選句発表の最後

までいて、呼名も何回かさせていただきました。両川洋々さんの見事な呼名をはじめ拝聴いたしました。田頭良子さんの呼名の見事さは、すでに有名で、今日も何回となく聴かせていただきました。しかし、全体として呼名は低調で、せっかくの大会なのに残念です。これを機に、みなさん、大声を出す訓練をやりませんか。

おはなしの寺尾俊平さんはおもしろく拝聴。いわゆるSSKのお三人のエピソードは、ほんとにうらやましいお話でした。お三人（新子・俊平・薫風）の結社を超えた結びつきは、これからの各社交流の見本を示すものです。私としても、今後も、結社を超えた交流を密にして参りたいと思った次第です。懇親宴は、一寸、体調わるく（かぜ）失礼しましたが、次の九〇〇号には、なんととしても最後まで残って、大いに楽しみたいと思っています。

（川柳文学社）

川柳塔八五〇号大会の余韻がまだ少し残る頃、大広間にぎっしりのテーブルで懇親宴が始まりました。東北なまりから米子弁関西弁広い世界が一つになって、和気あいあいの本当に心地良い空気があふれて居りました。

先生方に挨拶したり、上品な味の料理を頂きながらお酒も心地よく回りました。素晴らしいメイクで差す手引く手の芸達者な八木千代さん、若々しく可愛らしい澤田千春さんの踊りに、おひねりが飛び交いました。本職の方の河内音頭の熱演に、みんな怪しげな手振り足振りでグルグルと会場を回り、見ている方も、ついつい笑い出して、手拍子をとっていました。河内天笑御夫妻のプロ並のハワイアン、素晴らしい声の詩吟などETC……。本当に時間を忘れていました。川柳をして居てよかった、この大会に出席して良かったと、しみじみと思いました。たくさんのお席

者がみんな身内に思えて、こんなに大勢の友達も先生方もいらっしやうと思うと、これから先の人生に明りが点ったような心地にならせて頂きました。

大勢の先生方の丁寧なお見送りを頂いて、部屋にかえりました。川柳万歳・川柳塔万歳

初めての大阪

伊藤 寿美

川柳塔八五〇号記念大会出席の為、私達「川柳いずも」の参加者二〇名は当日の早朝五時発の貸切バスで出雲路を發った。幸い天候にも恵まれ目指す「アウィーナ大阪」葛城の間に到着したのは十時半であった。私にとって初めての大阪であり、本社句会は勿論、このような全国的な大会の出席は全くの初体験で、氣後れがして落着かぬ私を、柔らかな大阪弁で遠路を勞われ迎えて頂いた。お蔭で直ぐに大勢の輪の中に解ける事が出来、川柳という絆、温かさが身に沁みた。徐々に増えてゆく

薫風先生万歳、いささか酔いの回った心の中で、そう叫んでおりました。

本当に和やかな会でした。お世話くださった方々、お疲れが出ませんように、本当にありがとうございました。またお逢い出来ます日をたのしみに……。

柳友達のお故郷言葉があちこちで交わされる。

大会は予定通り午後一時開会、挨拶に続き全日本川柳協会事務局長山本翠公氏の祝辞、

そして川柳「塾」塾長寺尾俊平氏の軽妙洒脱なお話が魅了される。その後いよいよ入選句の披露が始まった。出席者三十四名、入選句五九句との報告がある。私にとって活字しかお目にかかることの無かった錚々たる方々の披露呼名、そして秀句の発表にどよめく会場を目の当たりにして、井の中の蛙は只々感激に浸りきった三時間であった。

つくづく川柳塔という大きな塔の中に居る縁に感謝し、この絆を大切にしていきたいと思つた。初対面の方とも数十年の知己のように打ち解けて話し合える川柳、この記念すべき大会に参加出来たことを本当に嬉しく思いました。終りに大会運営にお心を砕いて下さった多くの皆様に心より御礼申し上げます。

弘前からの

ちいさな旅

相馬 銀波

弘前のバスターミナル午後四時集合、主幹波多野五楽庵団長に七人の旅が始まった。

根雪が相当消えたとは言え、水田や樹園地の積雪量はまだ三〇センチはある青森空港から、関西空港へ約二時間のフライト、特に関西空港にはほとんどが初めての人達だけに、スケールの大きさには驚くばかりでした。

「川柳塔みちのく」編集長小寺氏の準備で「大阪クイドウラク」の集団での参加、早速天王寺駅前でその本領を發揮し、テーブルに山盛りのメニューで乾盃、午後十一時にホテルに向かった。

二日目は午前十時からの受付が始まり、本社のスタッフを拝見致しますと、ほとんどが女性で三百余名の参加者を手際よく捌いて居られ、さすがは本社のベテランの腕は違ふと感心することはかりでした。

兼題は、ゲスト選者の時実新子氏までの七

題と、主幹の「丸」の合計八題、三時間に及ぶ披露で大会のスケールの大きさを実感致しました。

そして最後の懇親会での賑やかさ、美味しさ、楽しさといった言う間の一日でした。

改めて大会の準備・運営、そして後始末の大変さが想像され、本当にご苦勞様でした。

最後になりましたが、鶴田哲郎氏による大阪のご案内で、法善寺横町・道頓堀の散策等々で楽しい思い出が生まれました。厚くお礼申し上げます。

人形芝居 観劇に寄せて

久保正剣

川柳塔八百五十号記念大会おめでとうございました。前日の役員会から大会終了後の観光文楽劇場第六回民俗芸能公演まで参加させていただきました。その折り観光の感想文を書くように頼まれ、その場は何気なくお引き受けしたものの、古典芸能に接する機会のない九州の田舎に住む非才な私には高尚な芸能

を批評する知識も眼力もありませんので、見たまま感じたままを正直に述べさせていただきます。

観劇参加は十四名、ホテルを出ていかめしい肩書の国立劇場文楽座に着いたのは十時三十分、開演までの三十分を文楽のかしら展で代表的なかしら二十数点の美しい細工を拝見しましたが、思ったほどの感慨はありませんでした。

「ふるさとの人形芝居」午前の部は十一時から上演されました。文献に依ると八世紀末に淡路出身の植村文楽軒と号する人が道頓堀高津新地に創設した文楽座で「操り人形浄瑠璃芝居」として上演したのが始まりで「義太夫節・三味線・人形」とがびつたりと一致して一つのものを語りを演ずる我が国独特の芸術とあります。

演目は操り式三番に始まり、口上人形、熊野合戦、のろま人形、源氏烏帽子折、山椒太夫などが上演されましたが、専門的な知識もなく感性の豊かさに欠ける私には抑揚豊かな口上（義太夫節）も理解出来ず、緩慢な人形の動作も迫力が無く、これが芸術だと理解するには時間がかかりそうです。もっとも、これはいわゆる文楽人形ではなく、文楽人形の原

点と言われる「ふるさとの人形芝居」ですから、芸術性を云々するよりもその素朴さを味わうものなのでしょう。

ともあれ「温故知新」を思い出させる二時間でした。ありがとうございました。

第9回 時の川柳交歓川柳大会

とき 5月10日（日）10時30分開場

ところ 神戸市立福祉センター5階

婦人会館（湊川神社西門前）

兼題 各題2句

「裏」

当日発表

「愛」

小林幸子選

「地」

長谷川紫光選

「宴」

奥田みつ子選

「感」

西川けんじ選

「飯」

梶川雄次郎選

「面」

小松原爽介選

特別課題 1句 入選句には景品進呈

「祭」

射場昭一選

会費 2000円（記念品・昼食・発表誌呈）

◎席題なし・欠席投句拝辞・締切正午

表彰 知事賞・市長賞ほか多数

懇親宴 5000円（当日受付）

八五〇号記念川柳大会参加者

総数 三三七名
敬称略・順不同

〔青森〕相馬銀波 岡本花匠 櫻庭順風
諏訪夕香 諏訪柳々 富士慕情
波多野五楽庵

〔東京〕播本充子

〔神奈川〕清水潮華 豊田羊子 菱田満秋

〔新潟〕高野不二 佐藤加津郎

〔富山〕酒井 輝 島ひかる 増田紗弓

〔静岡〕安本晃授

〔愛知〕早川盛夫

〔京都〕稲葉冬葉 高島啓子 筒井丹悠

都倉求芽 松田俊彦 山本 礫

〔大阪〕浅野房子 故芦田静江 安藤寿美子

阿萬萬の 井伊吉三 以倉菜々 生嶋ますみ

池 森子 石原靖巳 井尻民子 池田寿美子

板尾岳人 一本勇太 伊藤 武 指宿千枝子

伊藤尚子 稲本凡子 井上照子 妹背呂久

井上直次 江口 度 榎本洋子 岩佐タン吉

海老池洋 内海幸生 大内朝子 榎本日出国

岡本久峰 奥田良子 加島由一 太田とし子

籠島恵子 鍛原千里 梶本哲平 太田扶美代

角野仁清 金井文秋 金崎峰子 柿花紀美女

河内月子 河内天笑 川内叭笑 梶川雄次郎

川端一步 川原章久 川見絹子 片岡智恵子
神原 文 北村賢子 吉川寿美 神夏磯典子
橘高薫風 橘 昭子 児玉 蛙 鴨谷留美子
後藤正一 小西幹斎 小西小雪 川久保睦子
小林周信 近藤一途 酒井一壺 川島諷云児
坂上高栄 坂本晴美 里 小路 川田由紀子
沢田和子 執行稲子 志田千代 神原まさと
清水絹子 清水利武 杉澤 汀 岸野あやめ
傍島克治 田頭良子 田中正坊 北岡波留吉
高杉鬼遊 高杉千歩 高橋夕花 源田八千代
滝北博史 立蔵信子 谷口 義 小池しげお

玉置重人 玉置英子 辻川慶子 古今堂蕉子

土田欣之 妻谷重三 津守柳伸 小林トメ子

鶴田哲郎 寺井東雲 寺田甚一 澤村猪太郎

堂免路子 中井アキ 中川 楓 柴田英壬子

中澤孝子 中野健吾 西出楓楽 柴本ばっは

二永昭二 二宮山久 波部白洋 島崎富志子

早崎和子 濱田良知 板東倫子 瀬戸まさよ

樋口冬虹 平川幸枝 藤井正雄 田中由紀子

藤田泰子 藤村メ女 福岡雅楓 高須賀金太

福田満州 古野ひで 芳地狸村 高田美代子

坊農柳弘 堀 良江 堀江光子 谷平こころ

前たもつ 榎本露児 町田達子 綱木けい子

三好専平 宮西弥生 村上剛治 出口セツ子

榎山隆盛 森 茜 森下愛論 道家えい子

楊井二南 安永曉子 山本半銭 富山ルイ子

山本翠公 夕 風子 結城君子 中田たつお

吉岡美房 吉村一風 吉村雅文 西田柳宏子

久保田半蔵門 篠原いつふみ 西村りつえ

長谷川春蘭 長谷川呂万 平井美智子
平松かすみ 藤井二三 藤田頂留子
古川喜美子 堀江としを 本間真知子
本間満津子 宮崎シマ子 宮園射月芳
宮野美津江 宮本かりん 宮本欣史子
村上ミツ子 森川まさお 森中恵美子
八十田洞庵 藪野けい子 山川日出子
山本希久子 山本扶佐子 大谷篤子

〔兵庫〕秋元てる 井上俊二 内田美也子

井上信子 上田佳秋 氏林洋敏 岩倉キク子

亀岡哲子 刈田泰司 黒川紫香 緒方美津子

黒田能子 住谷石舟 田辺鹿太 奥田みつ子

遠山可住 時実新子 長浜澄子 門谷たず子

萩原典呼 林はつ絵 古川奮水 木村貴代子

山口美穂 山崎君子 山本義子 牧瀬富喜子

嵯峨根保子 西口いわゑ 船津とみ子

小松原爽介

〔奈良〕北山悟郎 杉野睦郎 伊藤シズ子

天正千梢 新田満江 宮口笛生 大村美千子

米田恭昌 杉野まつ子 玉利三重子

野邊喜美子

〔和歌山〕 榎原公子 川上大輪 岩本美智子

川上富湖 木村初子 木本朱夏 垂井千寿子

楠見章子 桜井千秀 武本 碧 古久保和子

田中みね 玉置当代 福井桂香 山口三千子

福重美子 福本英子 細川稚代 吉村さち子

堀端三男

〔鳥取〕 青戸田鶴 植田一京 奥谷弘朗

門脇晶子 倉益一瑤 澤田千春 小林由多香

新家完司 杉本孝男 田中亜弥 坂田和歌子

武田帆雀 土橋 螢 中井ゆき 永井三津子

西原艶子 野口節子 野坂なみ 橋本多哥由

光井玲子 宮木一夫 森 明美 八木千代

米田幸子 両川洋々

〔島根〕 青山久子 尼れいじ 大草おしえ

板垣草丘 伊藤寿美 大野島子 久谷まこと

岡あきら 金村青湖 岸 桂子 小白金房子

小玉満江 佐藤治代 銭山昌枝 園山多賀子

恒松町紅 恒松素子 富田蘭水 竹治ちかし

名原純子 原 章峰 森 茂美 舟木与根一

吉岡きみえ

〔岡山〕 井上富子 小野克枝 家守政子

小林妻子 田辺炎六 寺尾俊平 秀川直枝

福原悦子 森本文子 山本玉恵 矢内寿恵子

大石あすなろ

〔山 口〕 安平次弘道

〔愛媛〕 月原宵明

〔佐賀〕 久保正剣 仁部四郎 山門幸夫

山門タミ

〔熊本〕 岩切康子 永田俊子

● 当日欠席の事前投句者を含む

祝電拝受（敬称略・順不同）

京都都大路川柳社・奥山晴生・京都番傘川柳
会会長戸井田慶太・東野太八・川柳ねやがわ
竹原川柳会会長小島蘭幸・堀江正朗・堀江芳
子・越智一水・石倉美佐子・丹下美津子

御芳志御礼（敬称略・順不同）

時の川柳社・熊本川柳会・川柳塔おとり
川柳塔きやらぼく・川柳塔打吹・城北川柳会
川柳塔鹿野みか月・三幸川柳教室・翠洋会・
川柳塔まつえ吟社 鳥取ふうもん吟社
美研アート いずも川柳会 ローズ川柳会
川柳塔唐津支部 西宮北口川柳会
小松原爽介 時実新子 寺尾俊平 田辺炎六
森中恵美子 両川洋々 野口節子 木本朱夏
西尾美与子 内海幸生 奥谷弘朗 吐田公一
麻生アート 西村梨里 堀江正朗 堀江芳子
梶川雄次郎 坂本晴美 月原宵明 小島蘭幸
中田たつお 田口虹汀 山門幸夫 山門タミ

平成9年度年間賞

98ふあうすと川柳大会

とき 4月19日（日）午前10時開場
ところ 神戸市勤労会館7F大ホール

会場変更（JR三宮駅南東）

お 話 「近松文学の愛」

園田学園近松研究所所長棚町知彌先生

宿 題 「ガラス」 石部 明選

「橋」 板東 弘子選

「育つ」 安西まさる選

「紙」 奥田みつ子選

「自由」 梶川雄次郎選

「砂」 恩塚 治子選

「輝く」 伊佐次無成選

席 題 なし（各題2句・欠席投句拝辞）

出句締切 11時30分

開 会 12時30分

閉 会 16時30分（予定）

会 費 2000円（記念品・昼食・発表誌）

福元みのる 林 荒介 中原諷人 中原波香
中原みさ子 佐藤季頼 稲葉冬葉 井上照子
佐藤加津郎 土橋 螢 武田帆雀 山本義子
石倉美佐子 森井善居 原さよ子 西出楓楽
本間満津子 西口いわゑ 山本希久子
岡田たけを 神夏磯典子 奥田みつ子

「ジャンジャン町」復活

桑原道夫

大阪市の南部に、新世界と呼ばれる繁華街があり、その象徴として通天閣がそびえ立っている。NHKドラマ「ふたりっ子」の影響でこの地を訪れる人も増え、昨年七月にはレジャー施設のフェスティバルゲートとスパワールドも完成した。そのスパワールドの東隣に、飲食店や将棋クラブなどがたち並ぶ、通称ジャンジャン町がある。大正八年、新世界と飛田遊廓とを結ぶ路地ができ、新道路が大正一〇年に完成し、石見町ができた。それを、いつしかジャンジャン横まちとかジャンジャンまちと言うようになった。客を引くために仲居が三味線をジャンジャン鳴らしたのを、その名が付いたという。

ところが最近では、ジャンジャン横丁と言う人がほとんどだ。昭和五〇年から数年間、私はジャンジャン町にあった寄席「新花月」に毎週のように通ったが、その頃はまだ、土

地の人も芸人さんもジャンジャン町と言う人の方が多かったように思う。落語を聞いても明らかなように、東京は横ばいようであり、大阪は横まちだったのだ。

全国的に有名な法善寺横丁にしても、以前は法善寺裏と呼ばれていた。難波の元精華小学校裏に天ぶら屋の「天吉」があり、看板に「鴈治郎横丁 天吉」とあるが、初代鴈治郎（一八六〇—一九三五）が一時（明治一〇年頃か）住んでいた付近を、当時は鴈治郎裏と呼んでいた。法善寺横丁と名付けたのは、作家の長谷川幸延である。その著『笑説 法善寺の人々』によると、「決してテガラ話をするつもりはないが、昭和一五年四月『オール読物』に、この題名の小説を書く以前、法善寺横丁という活字はなかったのではないかと思う」とあるが、法善寺横丁という名が全国的になり、大阪の人もそう呼ぶようになるのは、もっと後のようだ。桂米朝の『四集・上方落語ノート』によると、「昭和三〇年頃まではジャンジャン横町とか法善寺横町なんて呼び名はなかった」とある。昭和三〇年の森繁久弥主演の映画「夫婦善哉」や、三五年の藤島恒夫の「月の法善寺横丁」などの影響によるものだと思うわれる。

横丁という活字を法善寺に付けたのは長谷

川幸延だと思われるが、よこちょうという呼び方は、実はそれ以前にもあったのである。昭和七年十二月発行の北尾鐸之助の『近代大阪』を見ると、法善寺横町（よこてう、とルビが振ってある）とあり、ジャンジャン町のことを、軍艦町（まち）・軍艦横町（よこてう）と記している。これは、どういふことか。

一八六八年、明治となり東京が日本の中心になった。経済的には、昭和四年の大恐慌や戦時中の統制経済で大阪は大打撃を受けたが、文化的には、もっと早くから東京のまねをしたがる風潮があったのではないか。明治四五年に新世界が誕生し、核となる遊園地を「ルナパーク」と名付けたが、この名は、すでに浅草の遊園地に付けられていたのを拝借したものであった。

ジャンジャン町のアーケードが昨年十一月に新装なったと聞き、先日訪れて驚いた。以前は、入口の看板が南陽通商店街、その下の垂れ幕はジャンジャン横丁になっていた。それが、商店街の中はジャンジャン横丁であるが、入口の看板がジャンジャン町になっていたのである。商店街の中で意見が分かれてこうなったらいいが、たとえ入口の看板だけでもジャンジャン町の名が復活したのが、ファンである私にとってはうれしかったのである。

在地物語

毎月25日締切・30句以内厳守

編集部

岸和田川柳会

長谷川呂万報

留守番を亡夫に頼み川柳会

欧州を地図で追ってる妻の留守

朝の膳一本つけた妻の留守

青春のレモンの香り染むレター

しばられて搾ってレモン捨てられる

風邪ひくな受験へ熱いレモン汁

グイェットまた妨げるレモン切る

初キッス青いレモンの味がする

レモンティーまだ美しい二人仲

酒の量ぐんぐん減って老化だな

身長が二センチ縮むこのショック

老化する兆しの言葉アレヤソレ

おしっこに脚も上がらぬ犬の老い

ホカロンをあちこち貼って冬の旅

老化したあかしにしがたんとある

ふるさとへ戻らぬ若いブーメラン

年でない若さ忘れず俺お前

吉兆を手にならぬ夫婦初夜

正論を若い若いと無視される

美津江

呂万

文時

洋

鹿太郎

辰郎

甚一

けい子

白光子

東雲

俣子

吉三

蛙城

金太

狸村

浪速子

敏光

盛之

一齋

和太鼓へ若さぶつけるオンデコ座

自画像に若い私が生きている

真つすぐに伸びた若木の清しさを

かね太鼓合図でうごく秋祭り

ウインクを愛の合図と見た不覚

合図する意味の通じぬおじいさん

年賀状元気で生きている合図

二人だけにわかる合図のバラ一輪

兄ちゃんに負けると母さんの合図

せつつ川柳万画会

延寿庵野鶴報

出発の支えになった空の青

年金の暮らし潤す茶の香り

羊水を離れ浮世の風に乗る

朝早く寒行の声街を練り

海外へじゃあねとだけで娘発つ

喜寿を越え四季の流れが早くなる

早いもの背中で泣いた子が二十

一日が早く一年なお早い

まだ早い思っているうち行きおくれ

飲むことにもたないつける茶の師匠

最愛の夫のためめ茶は断てぬ

お茶いかが夫婦げんかの仲裁に

どか雪で着物姿にスニーカー

曲水の宴で早技祖母の筆

雪だるまたどろんがなくて干し柿

孫の賀状年の暮れに来てました

雪降れば降ったで嬉しい余生かな

新雪に雪とこらんで雪まろけ

萬的

富志子

ひで

昭二

路子

基

苑子

さよ子

ダン吉

久美子

勇次郎

満寿蔵

好治

昌三

喜久造

英雄

吉昭

富美子

加寿老

晴子

真由美

多寿子

風琴

東園

鈴子

富江

野鶴

再出発新しい靴光らして

川柳若葉の会

宮崎シマ子報

根を張ってみればこの地も様変わり

オーロラを一生一度と旅さめる

整形をしても声まで治らない

他人さまに決めてもらうと楽になる

はずむ心で決定を待つ春の陣

悪友の誘い即決にて参加

決定も出来ずに愚痴をかかえてる

この人について行こうと決めて春

決心へ自動扉は有無もなし

川柳塔おっぱい吟社

木村あきら報

帰る家あるから猫も遠出する

老兵は去らず今年は歳男

家屋敷吞んでエンマに逢いにゆく

小石でもつまずく恐さ秘めている

寝たきりも僅かに見えてきた明り

明日ありと信じて生きる冬の蠅

見栄捨てて気楽にシルバー草むしり

一握りの私が這入る石の家

栄転で妻子や友が遠くなり

明るさが戻って安堵する家族

手さぐりの人生夫と三十年

最終便一人ボツチの月明り

双ツ葉も明るい方へ背伸びする

孫の手に明日が詰ったお年玉

栄転を祝ってくれる母がいる

夢之助

田実子

香住

清芳

能子

弘直

シマ子

欣史子

喜美子

あずき

ひかり

あきら

マツエ

はつ恵

かおり

吟笑

文仙

坊太郎

治延

放任

よしみ

貞月

輝夫

正雪

いさむ

若竹よ素直な心真つすぐに
北風に耐えて花の芽春を待つ
挿木して根付いた時は心湧く

とつとり川柳会

武田 帆雀報

葱刻む音を聞いている日の出前
日の出前潮目に鯛がよく釣れる
初日の出こんな日本に出にくから
お正月日の出と鶴の軸を吊る
勝ち馬に乗って日の出の勢いだ
メロス待ち日の出迎える気のゆらぎ
日の出には少し早いがラッパ吹く
日の出前妻が家を出してしまふ
馬齢六十日の出拜んだことがない
日の出から天の奴隷になつてゐる
新成人の孫に日の丸掲げてやる
旗色の悪い意見でそつと引く
旗振つてみたがだあれも従いて来ぬ
勝ち取つた旗は眩しく光つてゐる
諍いは嫌ひ中立の旗立てる
寄せ書きの旗がタンスの底に寝る
嫁ぐ娘に寿の旗織つてやる
スポーツの時に旗振らぬ日章旗
日章旗憎い尊いかわいそう
とつくりとおちよ描いて僕の旗
気が利かぬ友でチャンスをもた逃がす
懐に入るチャンスは蝶は待つ
チャンス来て握りこぶしを固くする
唇のチャンスのがした駄目なひと

なみ子
くに子
チカエ
舎人
蟹郎
圭一郎
玲子
かつみ
悦子
きみ子
和歌子
節子
正和
季芳
次男
粗粒
美恵子
輪多朗
行夫
石花菜
完司
静生
幸子
大漁
よしえ

シャッターチャンス美女が三人露天風呂
チャンスには先ず追い越しをかけてみる
バラ真紅チャンスは今か触れてみる
豊漁のチャンスカモメからもらう
チャンス皆潰し鳥合の衆にゐる

大原川柳社

矢内寿恵子報

父の座へ父どつしりと居てくれる
安泰を祈りダルマの目を入れる
安泰の足元ゆれる不況風
金利安老後の安泰遠くする
安泰を唄い文句にする政治
安泰のように聞こえる大欠伸
安泰と思うだけの満期額
安泰を神に感謝の屠蘇を酌み
安泰へ千里を駆ける寅の夢
脚光を浴びる二人に浦く拍手
脚光を浴びて舞台の袖に消え
脚光を浴びた主役の面構え
どたん場になつて脚光浴びました
脚光を浴びた子が父が打つ
安泰な一家の杭は父が打つ
脚光を浴びて男になつていく
裸木がじつと脚光待っている
脚光の涙ににじむ母の顔
脚光を浴びる夢見た年始め
脚光を受けて聖火燃えつがれ
脚光をいつも眺める側にゐる
脚光に磨きをかけると根性

和枝
孝男
忠良
帆雀
あすなろ
和子
昭子
ひでの
たづ子
みさえ
美佐子
朝代
敏子
幸子
喜美子
正己
巴子
たけよ
悦子
妻子
辰江
玉恵
さちこ
すみえ
あやこ
みづえ

脚光を浴びた宇宙のメッセージ
川柳塔ふくべ川柳会 橋本多哥由報

寿恵子

化けすぎて風呂にはとても入れない
きらきらと光る彼氏を連れてくる
転作の蕎麦にれんげを蒔いておく
失敗はハハハと笑うほどだった
もろくの垢風呂場で落す大晦日
馬鹿になり流れにうまくのりました
失敗を重ねる度に太くなる
脱衣箱間違え人のパンツ穿く
運鈍根もつそのどれも失敗だ
土石流山里呑んで溺が出来
そばがらの枕に春の夢託す
光る砂きつと流れた星だらう

和歌子
一夫
螢
はるお
美恵子
忠良
孝男
輪多朗
明美
つね
春恵
信子

佳句地十選 (3月号から)

坂田 和歌子

真ん中に明るいい人を座らせる
若者を諭す易者のうすあかり
三途まで二人の秘話は明かさな
事実だけ見据えて夢のないカラス
言い負けた背中に寺の鐘が鳴る
われおれに変わつてからのうまい酒
悪人は六法全書読んでゐる
逢うてきた傘の雫にある余情
極楽へ行った証拠はないお布施
白粉も紅も要りますまだ一人

透太
日出男
和枝
柳伸
公弘
紫香
恵子
あすなろ
可住
三郎

丸呑みにされたいほどの男ぶり
天と地の愛でできらきら芸をする

川柳塔みぞくち

小西 雄々報

感無量娘の晴着には目を細め
嫁ぐ娘の幸せ念じ晴着縫う

雨降って晴着氣にした疲れ出る
スタートへ晴着でこころ引き締める

ジーパンも晴着も似合うお年頃
晴着きた顔は希望にみち溢れ

成人式馬子にも晴着花が咲き
よそゆきの顔して写す晴着の娘

晴着きる娘見なおす親こころ
親の苦を知らず晴着で翔ぶかまえ

川柳東大阪

森下

愛論報

言にくい事もすらす夜夜の酒
一日の反省も書く夜の日記

昼の元氣夜に半分残しとく
感心感心と子供をすぐに褒め

百歳の食事うなずく事ばかり
感心ね言われて続く一万歩

雑踏の群れから小羊だけ逃げる
散骨の海へ弔意か鳥の群れ

ときどきは自分さがしに群れを出る
わたしを奪ってくれぬ人の群れ

この元氣母九十五越えそうで
恩讐を越えてこころが晴れてくる

倒産に裁量越えた罪がある

寛子
多哥由

静江

久子

康女

智恵子

弘子

正光

鈴枝

和代

公美枝

雄々

ばっは

信治

たもつ

文秋

緑

昭二

真柳

鐘の鳴る丘から吠えてくる狼火
鐘は孤独風のみたまを聞いて鳴る

名刺の鐘が重みを持った音
冬枯れた山越えてきた子連れ猪

梵鐘へ詫びたい事がたんとある

川柳クラブわたの花

吉村

立話よくも未だまだつづいてる
片言の孫の話に筋が出来

七五三妻の帯までさらになり
じわじわと星の終りを知らされる

弟の嫁を姑がよく褒める
出初式はしご天までとどくのか

発射したシャトルで描く地球の絵
エプロンがじわじわ攻める朝帰り

人生にリハーサルなし戻れない
帯とけば胸の秘密がこぼれ落ち

母さんの話で事が決まります
人恋し昔話が好きになる

仲直り話す糸口探り合
姑を味方に彼のハートを射止めたい

的を射た野鳥金柑くちばしに
載入りの愚痴をとことん聞いてやる

香港のにわとり風邪をひいたとか
ふるさとの雪のせて来た年賀状

餅焼いて夫の話裏返す
一つづつ告白したい仲となり

昼休み笑話に花が咲く
初詣で茶髪の振り袖しとやかに

初詣で茶髪の振り袖しとやかに

初詣で茶髪の振り袖しとやかに

初詣で茶髪の振り袖しとやかに

柳伸

雅文

庸佑

柳宏子

愛論

一風報

トシエ

まさと

明子

けいこ

いつふみ

春江

知佐子

美代子

民子

明

八寿子

宏

剛治

ミツ子

道子

話すき追いかけて来てまだ何か
良い話ある時にだけ身内ぶり
門松も無職の我が家立てもせず
食堂の話弾んで追い出され
あの話尾ひれがついてまいどる
釣り上げる針にはこちよい話
ひそひそ話こたつの中に猫がいた
おんなから思いもしないいい噂

高槻川柳サークル卯の花

川島諷云児報

新たなる決意気魄の土俵入り
絆みな断ち切ってまじした決意

決意して言葉すくなになつてゆく
決意するほどのことなく日々好日

仁王さんの口から貫つて来た決意
決意するたびに甲羅が堅くなる

決心のつかないままに地図たたむ
仕来りへ馴染まぬ嫁がいる同居

仕来りに合はせる嫁で悪なし
仕来りに合わせる勝手あります

仕来りに合わせる勝手あります
仕来りに合わせる勝手あります

仕来りに合わせる勝手あります
仕来りに合わせる勝手あります

仕来りに合わせる勝手あります
仕来りに合わせる勝手あります

仕来りに合わせる勝手あります
仕来りに合わせる勝手あります

仕来りに合わせる勝手あります
仕来りに合わせる勝手あります

仕来りに合わせる勝手あります
仕来りに合わせる勝手あります

仕来りに合わせる勝手あります
仕来りに合わせる勝手あります

仕来りに合わせる勝手あります
仕来りに合わせる勝手あります

仕来りに合わせる勝手あります
仕来りに合わせる勝手あります

仕来りに合わせる勝手あります
仕来りに合わせる勝手あります

友甫

逸子

美智子

朝子

一道

ますみ

鬼遊

泰雄

石舟

あやめ

よ志子

萬的

茶の子

女

白漢子

芳子

紫香

二南

ふみ

波留吉

艶子

亡母の詩を辿ると潤みだす眼鏡
時効にはしない女の記憶力
商店の悲鳴聞こえてくるチラシ

時どきは出番が来ますまだ女
一族の愛たしかめるお正月
情報洪水古い頭が流される

正月の三日天下の睨み鯛
食前の菜ちよいちい忘れま
ルミナリエの陰の涙が乾かない

横断歩道でいきなり笑出すデ
ンワ悔いすること多く重ねてきた馬齢

川柳後案吟社
從野 健一報

去る者は追わず素うどんする音
肩たたくロボットはぜんまい仕掛け
あべこべになつたら丁度いい夫婦

ブレーキとアクセル同時に踏む政治
真つ正直な喜劇を誰も笑わない
エピソードあの弱虫がこの快幸

夜が白む初日を拝む老夫婦
天井の木目に謎解きのヒント
役職が持つ権力に北風が吹く

人間の甘き時々毒になる
ロボットへ気楽な顔を見せておく
ぐんぐんと風引き揚げる冬の風

せりなずな根雪の下の数え唄
割勘で儲けたつもりの二日酔い
また一年願ひ託して初日の出

路地裏の隣も秋刀魚焼く平和

英一
しげお

正坊
故静江

高榮
秀夫

杜一
靖巳

求芽 諷云児
道博 健一
哲郎 淨美
拓治 秋月
照路 美智子
信善 吉秀
正秀 敏明
桃風 佐加恵
ひでお まさお

快樂の虚しさがある通り雨
都心の灯二人ばつちへ投げキッス
古時計百年前の音で鳴る

愛を持つ新春の足音杖も来る
美女の酌ぐ酒下戸も吞んでいる
気まぐれな風に揺れているのはわたし

雑草の春の息吹を靴裏に
とおい記憶に海を渡つた蒙古斑

うぶみ川柳会
西村 黙光報

終電に遅れたトラが大暴れ
大いなる夢には虎の巻がいろいろ
絵はがきのほとんどなかった景勝地

追伸のハガキ本音が添えてある
幸せな顔々並ぶ年賀状
絵ハガキの大きな花が梓はずれ

葉書には気持ち半分書いておく
一枚のはがきに罪を裁かれる
友情をひとつ裏切るはがき着く

後戻りしたはがきから出た尻尾
そつろの葉書に祖母の恋綴せる
絵はがきが私に夢をくれました

はがき一枚タイムトンネルくぐらせる
言い訳をするのに丁度いいはがき
役を終えはつと一息茶をすすする

鉢底の穴はしっかりと役に立つ
椅子取りゲーム役人に教わろう
美しい字のはがきにて毘におち

虎に勝つには笑うよりほかはない

邦季
青銅

忠成
博友

柳五郎
幸子

金吾
草風

鬼桜
宣子
孝男
静生
天雀
くにお
一瞬
黙光
雄人
ひろ子
葉土人
あづま
登美枝
ユリ子
正和
一揆
多哥由
螢

民営化するとはがきが迷いだす
おとなしい寅です夫はたててます
一年の無沙汰をわびる賀状書く
一枚のはがきで縁を拾ひあて

三幸川柳教室
三七

どん底に落ちて根性試される
逆境で根付いた力生き伸びる
六根清浄残照を無に生きている

根性が握りしめてる命綱
根腐りの花に過保護を論される
地下街を虚ろな根っこ這い回る

根回しの効いた冬芽は空を向く
道路工事が目立ち師走を知らされる
めつくりと減らなくなつた靴を履く

日の丸にめつくり減つた正義感
急がねば地球めつくり温暖化
めつくり増えたCO2が目に見えず

ややこしい話傍線引いておく
強引を男らしさと見た誤算
引き止めてみてみても詮ない朝の雪

我田引水やっさもつさの幕が閉じ
引くもまた勇ならん苦い喉仏
生きることは引きずるものが多すぎる

新しい命が潮を引いて来る
引き潮に乗せて返そう玉手箱
コーヒーの渦に誤解が解けてゆく

新仏巻き線香に導かれ
レコードの渦にわたしの青春譜

健一
天人
華子
一枝

保州報

嘉平
昭枝

満洲
正一

みね
和子
公子
秀男
正圃
忍
当代
章子
三千子
百合子
桂香
めぐみ
初子
保州
登美代
千秀
鉄治
美子
さち子

旋毛ふたつ持つて激しい女の子
かたつむりぐらいの角が丁度よい
男まさりにコマをまわした時遙か
巻き線香消えかけている通夜の席
善と悪渦巻いてる僕の胸
クローンへわたり独りでない指紋
満身創痍古木の根にも意地がある

サークル檸檬

小林

一夫報

澄んだ目にたじたとなる傷を持ち
特急通過 背筋のばして立っている
騙されたいやだまされてやったのだ
扉こじ開けて不幸はやってくる
ひよとして違う戸開けていたわたし
大豆ごはん遠い記憶の味がする
号泣で閉じる火葬場の扉
指切りを横目でみてるくすり指
午後の扉ゆっくり開けるレモンティー
あなたに会いたい湯どうぶがゆれる

川柳大坂

坊農

柳弘報

近頃は親しきなかに礼儀なし
今日あるは親の功德と感謝する
サンプルをそのまま渡す旅土産
親は子のサンプルですと背を正す
味見して買った野沢菜違う味
貧乏神不況と親しい間柄
サンプルを売る口先に負けた妻
ご先祖の功德を受けて生きている

美智子 親路 敏子 町子 朱夏 佳世子 碧 雅子 みつ子 房子 楓 榎 智恵子 正坊 喜美子 希久子 一夫 信 照 和 喜 川 かよこ 司 童 咲 笑

血税で金融の穴埋めてやり
スーパを梯子年金族自衛
功德つて遠い所にある言葉
サンプルの品より値札見て選ぶ
お年玉どこに預けよしも迷う
親しみが増すと独占したくなる
サンプルを持つて営業走り出す
古稀にして親しい友と旅談義
サンプルにはこりがつもる不況風
亡き父母の功德か私生き残り
のし袋華やかだけど軽すぎる
ふる里は民話残している平和
ぐち言える友の温さにありがと
夢枕虎より先に走ってる
サンプルに素肌美人を期待する
サンプルの海老が私に喋りだす
親しさに心の鍵をかけた忘れ
誘わないことも親友への思いやり
親しいが僕の彼女にありません
野仏がとて大事にする功德
乾杯に短い祝辞喜ばれ
タイオキシン天の功德を逆撫でし

南大阪川柳会

吉川

寿美報

本蔭棒 青道 河南子 雅果 まつお 比呂志 希久志 鉄心 敏 美花 洛醉 柳昌 三十四 朝子 ダン吉 柳宏子 柳宏子 金太 笑風 重弘 柳弘 楓 萬 的 千 里 信 治 文 秋

円空仏崇拝してますノミの跡
温い目と醒めた目でみる崇拝者
過去捨てて今は澄み切る尼僧の目
崇拝の恩師を憶ふ花手桶
すべり台からすが滑り喜ばれ
水源に春の息吹がほとばしる
向き合えば鬼でも蛇でもない憂
不器用ですが面白う生きてます
悠然ととびが輪を画く澄んだ空
調停案も口が滑つてもくあみに
水源地民話の郷が沈んでる
心澄むひとことだったありがと
旅人を見守っている道祖神
山河澄み万物命安らぎて
スムーズに登れぬ坂が見えている
澄んだ目で見られて悪の芽がしほむ
ふるさとの山を崇拝母達者
崇拝に近い恋した春もあり
スムーズに流れる春みな違反
スムーズにことが運んだ悪巧み
相思相愛とんとん拍子に式を挙げ
拝啓と書いて滑らぬベンの先
崇拝の仁徳陵に犬の糞
ポットから湯が出る疑問感しず
崇拝の背中に後光さしている

ほたる川柳同好会

井上

直次報

寿美 凡子 秋子 志華子 度 朝子 柳伸 直子 庸佑 頂留子 柳宏子 ダン吉 東雲 悟郎 たもつ 真砂 正博 哲郎 修 久峰 三男 蛙 章久 千梢 日出子 明光 博史

初日記不安不況の世を叱る

僕一人叱られなくて淋しがる

悪ガキを叱る教師は及び腰

ぼろくそに大蔵省を叱りつけ

叱られる人が無いのも寂しいね

わけへだてなく叱られて納得し

ママごとにも叱っているのはいつもママ

影薄く叱らぬ父が増えまして

はほえんで苦勞話さぬ亡母でした

親友の裏切り苦汁飲まされる

堅苦しい挨拶ハローで片付ける

青春は甘辛酸苦のブレンド味

金欠を苦にしなかった若かった

古語となる苦みばしったいたい男

苦勞性手相のままに生きている

無医村のあつて都会の医者余り

職業欄無職と書かず棒を引く

前例が無いとお役所首ひねる

無理のない歩幅で歩む老いの道

無口だが笑った顔に魅せられて

ユニホーム着れば勝負の鬼となる

川柳塔わかやま吟社

宮口

克子報

慕われてこの分校に根をおろす

子に遺す誠実その他何もし

罪のない喫茶房の灯がぬくい

分校総出森に巣箱をかけに出る

分校が廃校になる過疎すすむ

分校の机に残る墨の跡

馬洗

善守

正三郎

万之助

保子

久子

まみ子

セツ子

直次

正安

祥風

よろう

英子

敵子

昭子

たけお

清

喜美子

キヨ子

雪子

竹二

山ひとつ越えて分校育ちです

分校のドラマが語るダムの底

また一つ消える運命の活性化

分校に大志を抱く土筆の子

分校を一人占めする新入児

罪深い男が画いた設計図

生きていることが贖罪かも知れぬ

その指にたかると罪を深くする

罪を消す真についていた指紋

いい男かすかに罪の匂いする

自己チェックこんなにもある罪の数

罪深い男だ胡麻をすっている

写経する掌から転がる罪ひとつ

その他からもはみ出てピリを走ってる

割愛という名でその他切り捨てる

真実はその他の中に潜んでる

その他大勢殺され役に賭けている

健忘症その他どこも悪くない

注意書その他にあった落し穴

その他にはなれず正義の旗を振る

まな板に乗らぬその他のかくし味

真実の声はその他の中にある

ほどほどの寄附でその他に入れられる

その他に言い分ないか聞いてやる

岬川柳会

八十田洞庵報

豊太

さち子

由美子

泰子

富美子

重治

保州

鉄治

大輪

親路

和重

金太

富湖

紫香

射月芳

三男

千尋子

美子

紀久子

めぐみ

三枝子

精子

英子

克子

一言が運命分ける決意させ

三姉妹遺産分けではにらみ合い

除夜の鐘終る暦に寅の顔

震災の明暗分けた深い傷

思惑がはずれ悔しい形見分け

だらんらの声焼きいもが匂ってる

紅梅は一足早く春くくれる

子の登る山の難所を書き遺す

おだてられ登った木から降りられず

美しく老いたく願う花暦

駆け足で春をつけてる花暦

初暦どんなドラマがあるのやら

温暖化暦通りに春がくる

よい暦売っていませんつくるのよ

春立つは暦だけです厚着する

山坂で絶景眺めひと休み

梅咲いて賑わう雀花まつり

分け前で喧嘩するほど遺産ない

分け合うこと知らずに育つひとりっ子

きっちり分けた頭の写真ある

竹原川柳会

時広

一路報

ふくらんだ夢は七色でしようか

夢だけはいつばいもって生きようか

東京で私の夢が待っている

十四歳夢の話は止まらない

やさしくなれなれよと竹に節がある

竹の町美味しいお店尋ねられ

貞子

八重美

幸

中2 愛

中2 恵

高千枝

3史子

子

年子

洞庵

悦子

里子

ミチエ

鉄男

昌夫

とみ

朋子

令子

幸子

和美

信博

よし子

みつ子

庄六

みやこ

正美

ユミ子

住めば都か帰って来ない竹トンボ
風と遊んで竹はおしやべりだと思つ
一本の竹が男の腹にある

どの竹も老いて少うしずつ曲がる
竹笛の竹のいのちを月へ吹く
竹を割つたような氣立てに惚れました

千両万両春の庭に立て日向ぼこ
南天の赤い実初春の笑顔かな
むつかしい問題さげて春の客

左箸一寸氣になる孫がいる
夫婦箸並べてみても独りなり
通ぶつてくわえた箸が割りにくい

一人箸無言の行に慣れました
ぜんざいに箸そえておく外しぐれ
明朗な言葉で暮らす夫婦箸

めでたいな箸が転んで寅笑う
夢いっぱい詰めた風船ふわわり
初夢が思い出せない氣にかかる

ときめきの初夢でしたさめました
今年から奇麗な夢に染め替える
山ほどの夢を描いて若くいる

夢が叶うと次の虹見たくなる
竹馬の高さで見てたなあ夢を

城北川柳会

神夏磯典子報

どこを吹く不景氣風かイブの夜
滝壺に落葉のおしくらまんじゅう
初めからきれいな丸は書けません
萌え出するいのちの香りよもぎ餅

静佳 笑子 白狐 静風 不朽 蝸牛 夏喜 汎美 栄恵 千年恵 房子 笹舟 喜美子 幸子 美佐雄 眞由美 比呂子 年子 カツ子 喜久恵 一枝 菁居 一路

あの人はたのしい話題運ぶ人
たのしい方の傍で楽しい顔をする
お餅食べ体重氣にしてまた食べる

生きが身を見つめるんべタル踏む
友の身を案じて今日も顔見せる
七回忌父の日記に亡母が居る

たのしさとわびしさ交じり氣流
初日の出どこで拝むか孫の旅
年明けて値下げになって買う日記

想い出のたのしい話話めた壺
献体を心に決めて今日を生き
初仕事やっぱり御飯炊いている

元氣かと母の便りはかな五文字
八十路過ぎ今年も雑煮祝う幸
一年の計はたてないことにする

四捨五入四捨の痛みを誰が知る
動物忌十字切る罪二つ三つ
餅花にあすを託している希望

火の匂うページもあった日記帳
国民が火だるまになり年暮れる
ちりめんじや二百態を噛みビール飲む

当り年祝う益君なくて
初春の夢は大きく天に画く
老いてまだ女自負する紅の色

ロゼワイン昔話が好きらしい
母の座に母がいままさぬお正月

川柳塔唐津支部

久保

正剣報

長電話話の種がつきません

タミ

静枝 和歌子 小恵 藤子 美代子 トヨ子 博遊 登美子 あやめ ただし 高栄 とし子 あい子 久留美 千歩 一枝 昭子 寿美子 朝子 倫子 春蘭 義江 睦子 白峰 達子 公一

母在す屋根にときめく故郷帰り
梅凜と咲いて陽気な桜待つ
応接間食堂書齋娯楽室

久闊の雪と鬨うサッシ窓
愚痴言わぬ妻最高の紅生薑
二日酔水道水で生き返り

初白髪健康手帳に記入する
忘れ物捜し回った皺の数
滑降の度にケレンデ穴をあけ

三年めまではいびきも芸のうち
春爛漫四月の駅の忘れ物

いずも川柳会

園山多賀子報

苦勞してからは言葉飾らない
書庫の隅父のマルクス飾つてある
一点を飾って無駄な色を消す

飾らねばよかった嘘がすぐばれる
苦勞した指は飾りをはしがらぬ
色袴でひそかに飾る母の古稀

二回目演技をしない方がよい
再びは戻らぬ橋を振り返る
失楽園再び乱が起りそう

言い訳を再び三度する兎
受験生いるから日毎百度石
心では拝んでおいと呼んでいる

一心に祈ると心軽くなる
貧乏神拝み倒して出て貰う
礼拝の十指の中に鬼を飼う

拝まれて恋とこいと橋渡しし

幸夫 晴翠 虹汀 あき 勝視 弘 輝夫 實 高明 四郎 正剣 裕 芳枝 美佐子 しま子 おしえ 愛子 青湖 満江 純子 あきら まこと ちかし 治代 茂美 ひろし 要子

三猿になつて雑音気にしない

補聴器が春の足音連れてくる

音無しに構えて影が従いてくる

受話器おく音で私を責めている

建設の音は明日の夢がある

華やいだ音をなくして娘は嫁ぎ

足音で機嫌がわかるほどの仲

ふきのとう新芽で春の音を聞く

接待のない日休肝日と決める

無位無冠接待喜々として受ける

接待のお陰かもしれぬ橋かかる

接待の皿に企み盛つてあり

接待の手土産バッグに入れてある

西宮北口川柳会

亀岡

哲子報

チヨコレートに女心を遊ばせる

本命のチヨコ一つだと信じてる

擬似餌だと知らず貰ったチヨコレート

横に在る鬼と時とき手をつなぐ

両横に味方座らせ隙だらけ

優しさに飢えて聖書を横に置く

横波に明日の針路を試される

あつちや向いてはい思はず横を見てしまふ

横の席誰が来るかと気がもめる

煙草吸う人の横には座らない

横文字はよめぬがブランドはわかる

明いこと考えようよ 老いはなお

考える前に自然に動く手よ

傷つけぬように別れを考える

多賀子

房子

きみえ

久子

明子

英佐子

陽子

英夫

れいじ

ちえ

草丘

寿美

智子

いわゑ

貴代子

諷云児

たず子

しげお

澄子

香子

キク子

哲嗣

正坊

メ女

義子

富喜子

石舟

芝居気がなかなか抜けぬお父さん

プロポーズなかなか味なことを言う

ごめんさない一言なかなか言えません

咄嗟にはなかなか出ない賞め言葉

幸せがなかなかない無人駅

妬心ふつふつなかなか嘘がまとまらぬ

無駄話なかなかつきず長電話

時差ボケの人影を抱くエアポート

その一瞬メダルは神のみ手の中

赤ちゃんの命の重さ抱っこする

挨拶はそこそこのする一張羅

日曜日教会の鐘良きひびく

帳尻がどこかであつて生きている

お喋りの切れ目を抜ける立話

比べるに次元の違う祖父と孫

拷問のように重たくなるノルマ

川柳塔鹿野みか月

土橋

おだやかな日記を書いて今日終る

手におえぬ孫頼もしく後を追う

盃を一度交わしただけの恋

耳寄りな話に軽い腰になり

新しい靴手枕にしている孫

ペルシャ猫と花が咲いたら散歩しよ

放り投げた人のこころがわからない

残照に放たれている果し状

無記名で放られている粗大ゴミ

放つたら放りかえしてくる人だ

君の骨放るもんか粉にして飲む

透太

江美

みつ子

比ろ志

萬三

栄三

鹿太

ひろ子

能子

二南

トミエ

美智子

涼子

絹子

柳宏子

螢報

喜与志

弘子

幸枝

和子

はるお

きみ子

富久江

みさ子

睦子

汲香

石花菜

エゴという吹雪く嵐の中に立つ

電線は途切れ吹雪の夜が長い

永田町辺りを吹雪く黒い霧

異議ありと真ん中あたりから吹雪く

学童が荒れて校舎が吹雪く

吹雪く処刑を逃れたのかも知れぬ

ぬるま湯の中で吹雪の絵が描けぬ

道筋をのつべらぼうにして吹雪く

窓際に五七五と肘枕

天職と決めた漁師の波枕

篝火を焚けばお伽の国になる

かがり火に大将だけはよく見える

篝火にあやつり人形妖気たつ

胸の篝火鎌倉に炎あがる

篝火に映える優雅な薪能

篝火が赫あか邪念みな捨てて

篝火を囲み青年村おこし

消えかけた篝火ミルク温める

煩惱が篝火となり露となり

八尾市民川柳会

宮崎シマ子報

クローバーが間借りしている植木鉢

無難作に摘んだ草にもある主張

雑草の意地石垣にしがみつ

的を射た助言に迷い暗れました

やれ射つた青い小鳥は手で掴む

夜店の灯射的で招き猫もらう

税務署に射られないよう嘘を書く

真実は鼻のシラノが射たハート

茂

智恵子

節子

幸子

諷人

節子

隆風

かつ乃

美恵子

房子

きみえ

実満

和枝

八重子

くに子

公子

孔美子

螢

頂留子

千里

春子

剛治

シマ子

柳宏子

美幸

仁清

射るような視線に溺れゆくわたし

標的にされているなど知る背中

じわじわとアリバイ攻めてくるおんな

二番手につけてじわじわ追いあげる

快楽の目標にわじわくずれ出す

南極の水にわじわじわ割れが

麻酔から覚めてじわじわくる痛み

感激の涙にわじわ表彰台

目頭のあたりが濡れていく台詞

生徒同士何がありそな合言葉

兄弟が母の内緒の合言葉

青い地球六十億の合言葉

追いつけ追いつけ越せ一九にする合言葉

妻に内緒でまた弟に金を貸し

竹とんぼの思い出弟征ったまま

弟の城出来てお祝いの表札を

弟の上に五人の姉が居る

亡弟の分まで生きたさくらの木

川柳ささやま

酒井

靖子報

夕焼けに染まりあしたの血が騒ぐ

まだ一つ揃わぬものがあつて冬

添うてきた支柱がすこし頑固過ぎ

宴会の無事の進みを祈る燭

正月の余情が残る客蒲団

世の中が進んで老いはついてけず

好きな人まだ居てくれる夢の中

振り出しへ戻れる双六うらやまし

主婦の座を譲れば呆けが進みそつ

朝子

とみを

泰

ますみ

哲夫

賢子

夕花

柳伸

欣之

信博

弘直

たもつ

隆盛

一風

三男

東雲

弘一

森子

人生は所詮双六賽まかせ

忍と書く母の双六ふり続け

お正月蝶々結びをしてみよう

子等の声好きで淋しい石地藏

老い二人道中双六急ぐまい

友達から恋に変わった春の風

先達の杖は進路を迷わせない

今年また好きな軍手と春を待つ

京都塔の会

松川

杜的報

振出しに戻ればライバルもつけない

運命を双六に賭け賽を振る

双六で覚えた東海道之路

ふったサイコロに似た人生の浮き沈み

東京の街沈ませる雪だより

運勢は大吉東からよしとある

東から届く汚職をしたニュース

道聞けば西や東で言われても

嬉しい事があつて東が暗れてくる

馬耳東風儲け話は逃さない

東向きの部屋にわたしたの花はさみ

東の空一番星にも申す

おおよその勘があつていたカルテ

おおよそで物事決める日本人

神様の御名は知らず初詣で

景品の期待裏切るはずれ玉

景品に釣られて走る市場籠

景品の一泊二日が高うつき

合掌のかたちになつていく東

素水

とみ子

つや子

芳郎

和子

富美

可住

靖子

求芽

風云児

豊次

京子

とみ子

紫香

柳宏子

白溪子

克治

友熙

吉之助

芳子

正坊

メ女

百合子

波留吉

杜的

欣之

おおよその事は承知の皮財布

おおよその見当がつく茶番劇

景品で釣られるほどに甘くない

何もかも老母のふところ当てにされ

バリトンの魅力に溶けて狐を癒やし

良い事は顔全体で受けとめる

行く年の祇園町のにしんそば

つわの花ひっそりとして咲く内玄関

第九聞く人それぞれにある思い

一年の計ベットの分も入れてます

きのうも今日も陽があがり同じ陽が沈む

はびきの市民川柳会

芦田

絢子報

欲張りでストレスまでも離さない

傷ついて十指の立場見えてくる

子離れをせぬから出来ぬ親ばなれ

し残した事もあつたが大晦日

ロボットの押し出し食つて二度の職

注ぎこぼしされても上戸上機嫌

観覧車二人のたれにある宇宙

金融国会かかわりもなく落葉焚く

年金も小遣いほどで泣き笑ひ

歌舞伎座の三階小遣いを貯めて

役立てたいお小遣い地球儀を回す

小遣いが残つてせつなくなつてくる

点滴を連れて三時の面会に

面会へ秘書の手捌き口捌き

面会が許され空の青いこと

面会に母は信じていると去に

とし子

高栄

庸佑

笑女

達子

ただし

春蘭

年代

武庫坊

美穂

水客

みつこ

りつえ

晋

昭平

四三郎

かつみ

重人

猿沓

たけし

美代子

一屯

扶美代

辰子

美喜

ダン吉

洞庵

面会の花に疲れる時もある
会社へは来るなど言つてあつたのに

バック旅行買い物だけがいがしい
保育所へ急ぐ足から母になる

あゝ遅刻電車の中で走りたい
急いでも急がなくても日は暮れる

急がねば賞味期限の切れる恋
春の釣書は少し急いだ方がよい

何年ぶりイメーヂチェンジで同窓会
思い切りイメーヂ変える髪を切る

イメーヂのようににはゆかぬ試着室
二枚目のイメーヂ狂う河内弁

B面のイメーヂ誰もまだ知らず
ぼそぼそと本音を語る縄のれん

ローズ川柳会

山崎

君子報

うるさ方の集まりらしい止めておこ

いじわるもおしやれて集う同窓会
昨日今日明日に夢あてまだ八十路

春の光集めて君に贈らんか
平成もバラ色見えず茨道

あたたかい心持ち寄ること集う
御みくじは神の言葉と木に結び

バラ色の夢はそのまま成人す
わがローズ世紀をこえて咲きに咲け

芯のある女を生きている野薔薇
白いばら時に乱れてみたくなる

真紅のばらにあの日の返事託します
抱きしめてあげたい冬の赤い薔薇

金子

金太

悦子

敏

元紀

はるよ

庸佑

泰子

志洋

昭子

吐来

哲子

トミエ

貴代子

まさお

掘り出した鏡好奇心集め
逢いたくて今年も咲いた冬のバラ

なのおのこと真つ赤なばらと居る余生
バラ活けて少し華やぐ老いの部屋

尼崎尾浜川柳会

前田いわお報

脳細胞数がへつたか知恵にぶる
三年目神戸の冬はまだ厳し

父さんの煙がいやと毒外へ
知恵袋しぼんだままの幾十年

うっかりと女の知恵に乗せられる
困つたら知恵の泉のワンカップ

飲びも哀しみさえも神の知恵
酷使した両手両足謀反する

ドック入りして遺言を考える
音色まで冷たい冬のオルゴール

反省のチャンスをつくれた不況風
強引にチャンス奪つてから孤独

嫌われた娘から届くチョコレート
猫嫌いを一番猫が知っている

富柳会

池

森子報

老いたかな白がだんだんにしみる
もつ本音出る頃盃をまわす

すこし汚れた白とのんびり暮らしてる
手の中のゆらぐグラスに侘びがすむ

画家の名を聞いたらうまく見えてくる
大盃で祝うこの世のまん中で

民平

君子

義子

笑女

向美

向西

満寿蔵

勇次郎

澄子

昌子

石舟

鹿太

正治

弘治

夢之助

疑えば水の白さも濁りだす
哀しみが深く笑つてばかり居る

詮索は空にゴーンングマイウェイ
躓いた小石痛いと言つたかも

ふる里へ便りをのせた白い雲
ためらいの傷跡がある白い画布

祝盃に企みがある昼の月
盃を伏せて返事待っている

盃がいったり来たりする阿吽
盃を重ね合わせて海になる

川柳塔きやらぼく

政岡日枝子報

太陽を黒く塗つてる太郎の絵
明日の会私の踏絵となりそうな

巷には小鬼がナイフ研いでいる
ひそやかに咲く佐助よだから好き

門閥に縁もゆかりもない身肉
絵になる人のまわりに潜み落し穴

懐に懐妒だかせる失意の日
冬銀河だれにも言えぬこと話す

願いごとと叶へ過ぎゆく季節
あどけない子供絵から虹が立つ

幸せをこぼした指がやせて来る
美味かった好かつたコース途中下車

地を蹴つて飛び出す春のキューピッド
あの方は会議でどなるくせがある

春帽子少し春めくからかぶる
立春の言葉で起こす手紙書く

少年よ何故に硝子の靴を履く

紅紫朗

アキ

登久

昭水

絹歌

岳人

花梢

欣之

森子

保子

春枝

晶子

弘子

日枝子

蘭

うれし涙で亡父に送ったあのコース
ひと言を呑みこんでからの自虐
石に名を彫られて風にさらされる
源流を辿る道から駅になる

わかあゆ川柳会

松本はるみ報

見直せば孝行息子と気がついて
見直して見る気にさせる青い空
まとまらずやたら芯だけ削ってます
歳をとり見直しました掘炬燵
どことなく疲れが出て来た蝶番
一坪ヘニラと母と花作り
みやげなどいらぬわしの風上風
万歩計足の疲れに気付かない
変な夢寝覚めの疲れまだつづき
疲れたら帰って来いよを背なで聞き

川柳塔まつえ吟社

恒松 町紅報

弱虫が影を踏まれて泣いている
仏壇の前弱虫をさぐらげだす
強がりを言って本当は弱い虫
弱虫が子を生んだからもう泣かぬ
弱虫になって辞表を書いている
弱虫が私の中に巣くっている
ジーパンでもはくか心の憂さ晴らし
過ぎ去った失意の坂はふりむかぬ
失意にもめげず生き抜く母の意地
失意など微塵も見せぬ鬼瓦
失意から酒と艶歌を口ずさむ

晩秋のサルビア燃える失意の日
是が非でも逢いたい人を待っている
待っていた母は一気に話し出す
二杯目のコーヒーが来る待ちぼうけ
待たされた疑い深く身構える
待つ人がいるからいつも急ぎ足
引き算の答え出るまで待っている
急かされて化粧がのらぬ三面鏡
急に吹く風に飛ばされないうで
ぎりぎりの時間を急かす発車前

急かす声ほんやり聞いている失意
急かされても六十路の坂は風まかせ
急かすから遺書は早めに書いておく
粗末でもぬくい心を盛って出す
粗末ではあるが女房の熱い燭
品位にて粗末な品も映えている
お粗末な子ですと宝婿にやり
粗末には出来ない恩ある人だから
慣らされた粗末な戦後遠くなる

川柳高知

川竹 松風報

老い孤独鳩の輪の中餌を撒く
独身を看板にして楽に生き
赤い糸いろの城にあって今ひとり
のぞき窓女の城に隙がない
城跡の石に歴史を教えられ
開け渡す城へ誇りも見栄も捨て
出城から救護たのむと子の便り
城山に登り昔の風を聞く

占いを信じて損な道ばかり
占いをハシグする娘が嫁きさびれ
占いに縋る女の不仕合せ
花占いひとひらの恋遠ざかる
朝食をドラマに合わす老夫婦
来世まで続くドラマの夫婦役
四世代ドラマを混ぜる洗濯機
死ぬまでを妻と演じてゆくドラマ

豊中もくせい川柳会

田中

お母さん空にむかって呼びたい日
立たされてひとり見ている青い空
青空に昼の花火が消えたまま
青空に金銀銅が舞う長野
いつか泣く日のための涙を溜めておく
やり直そう涙は横へ置いて
さよならが声にならずに出る涙
下手だとは言うまい孫の稚い字
脇役という控え目な柄を着る
和服着る方が楽だと祖母が言う
居酒屋は儂い恋の独り酒
小さな綻び人生狂い出す
敷きふとんになった見合いに着た着物
チャンスの自信多くを語らない
職人の自信多くを語らない
老人性感情失禁という涙
寒くともカニを目指したバスツアー
山越えてきた手紙には春いっぱい
春や春逢いたい人が増えてくる

お母さん空にむかって呼びたい日
立たされてひとり見ている青い空
青空に昼の花火が消えたまま
青空に金銀銅が舞う長野
いつか泣く日のための涙を溜めておく
やり直そう涙は横へ置いて
さよならが声にならずに出る涙
下手だとは言うまい孫の稚い字
脇役という控え目な柄を着る
和服着る方が楽だと祖母が言う
居酒屋は儂い恋の独り酒
小さな綻び人生狂い出す
敷きふとんになった見合いに着た着物
チャンスの自信多くを語らない
職人の自信多くを語らない
老人性感情失禁という涙
寒くともカニを目指したバスツアー
山越えてきた手紙には春いっぱい
春や春逢いたい人が増えてくる

京子 孝雄 快風 千鳥

幸

英夫 松風

功

正坊報

博史

ベ女

路児

知香子

きく子

正三郎

慶子

正坊

石舟

紫香

一笛

悟郎

柳宏子

重人

寿美子

庸佑

英子

諷云児

川柳ねやがわ

江口

度報

くそみに陰でけなしていて拍手
エベッサン僕の拍手聞えとか
敗者にも拍手を送る思いやり
拍手ない舞台自分で幕を引く
愛らしい拍手孫からひまこから
はよ済んでよかった拍手しておこ
祝福の拍手は惜しみなく叩く
隠し芸本職以上の拍手来る
親子共演わが子の方に湧く拍手
盛大な拍手ファイト弾みだす
成人式わが子に拍手して送り
青虫のおまけが付いてきたキャベツ
まっ先に虫食っていた新鮮さ
新鮮な答えをくれた谷の水
一日のスタート新鮮なたまごから
青虫も産地直送便に乗り
イメージが新鮮なうち見合せす
たこの足とれとれでつせと吸いつかせ
新鮮な心で待った初日の出
新鮮な命が湯気を立てている
福を呼びそうな男が見つからぬ
誰とでも仲良くなれる福寿草
標札を福の迷わぬよう磨く
福々し妻の居る絵があつたかい
何故我が家だけを素通り福の神
少し福欲しく近くの戎っさん
逆境もプラス志向が福を呼ぶ

小路 度報 一笑 権太 勇太朗 ルイ子 文秋 恵子 高栄 光子 波留吉 亜也子 仁清 茜 とし子 英壬子 かすみ 亜成 頂留子 三郎 時弘 磔 雅文 一風 朝子 一途 たもつ 庸佑

無一文なのに福耳立派すぎ
禍を福にやっとなじした父の汗
エプロンの白さ嬉しい朝の幸

川柳塔打吹

米田

幸子報

救医者割には金を溜めている
救名乗る医者はおおかた名医です
藪柑子ひっそり赤い灯をともし
遺産分け裏の竹藪まで処分
金融の藪に陽ざしは通らない
藪深くはいりこんだか日本丸
ネクタイを締めると虎もいい男
藪だけが見ていた藪の中の事
人嫌いの虎が藪から出て来ない
特別に亡母の残した花が咲く
嬉々として餅搗く幼児頼もしい
とらの子を妻に内緒で壺に入れ
とらよりも怖い地球のエルニーニョ
花吹雪ちよつと狂つてみたくなる
減反で田畑の草木藪になり
藪刈れば見たくないもの見えてくる
考古学藪を掘つたら金貨出る
とらさんの映画が今も忘れられぬ
祥福の子虎が招き猫に見え
逢い引きの古い言葉に似合う藪
とらの子を慕つて孫がおめでと
暖冬に虎の毛皮が邪魔になり
元旦や色さまざまな虎が来た
強くなる虎の巻なら所望する

真柳 洋 度 かつみ 玲坊 よしえ 季芳 松盛 小康子 きみ子 石花菜 雄々 多哥由 セツ子 楨元 和枝 和歌子 逸子 芳光 一夫 一京 佳女 猿沓 孝恵 睦子 玲子 美ッ千

自分から藪と言つて医者がいる
毒蛇が眠るころの奥の藪
バトン受け虎がしぶしぶ駆け出した
新年は妻もかわいい寅になり

倉吉川柳会

松本よしえ報

アザラシが流水にのり嫁さがし
流水に春百選の奏を聴く
寝たきりになつても君は忘れな
いウンと汲んで福祉課戸を閉める
白髪にひとりの罪を軽くする
流水を力割りにして飲んでいる
情念を汲むには少し青すぎる
白髪染め私十歳さばを読む
流水は行き四島は還らない
ナイフでは君の人生守れない
細君は君より稼ぐ優れもの
君だけは守り通すと言つたはず
借りのある君で頭が上がない
流水が職員室を取り囲む
女がおんなを憎いと思う東ね髪
少年の哀しみを汲む匙がない
泥棒か君子になるか金次第
多数決という流水につぶされる
居酒屋で意外な顔の君を見る
末席の意見も汲んで輪が丸い
火を掴む覚悟で君を好きになる
君の手からうけた電流忘れない
寂しさを汲んであげたい落ち椿

弘朗 完司 節子 幸子 一夫 和歌子 明美 帆雀 陸子 幸子 和枝 紀美子 康子 よしえ かつみ 石花菜 美ッ千 完司 次男 季芳 はじむ 玲子 ゆり子 常代 きみ子

髪カット私も春は若返る

雪ふる日娘二十の髪を結う

眉毛の白髪一本だけがよくのびる

横浜あおば川柳会

菱田

満秋報

お迎えの来るまで女捨てないで

北限の猿は湯冷めなどしない

寝るだけの北向きの部屋安く借り

柱の傷母に届かぬ場所となる

下北の浄土に邪念おいてくる

美男子を目で追う私まだおんな

都合よい時だけ女おしつける

越してみても馴染んだ家のよさを知る

恙ない証に今朝も雨戸繰る

檜山へ必ず行くが日は未定

どんぐりも比べるときは背伸びする

私の中のおんなが演技する

心得て焦らす男の発火点

おつかいにしつこいほどの念を押す

北国の祭り短い夏に燃え

泣き止んで女はやがて何か食べ

すれ違ふ毛皮を見栄が値踏みする

零コマ以下の数字で一位二位

北風が今夜のメニュー決めさせる

比べればやはり特価は特価品

負けまいと背伸びしてみる入社式

ままごとで必ず仕切る女の子

うつり気な女でいつも孤独です

げんまんの姿をさがす参観日

園節子

ちよ子

菩句

省子

充子

雅子

八重子

かづ子

為佐子

多留

のぶ子

純子

ふみ

嘉信

芳江

絹子

サト子

和可

見早子

広和

羊子

亜希子

街湖

達也

笑子

道子

良子

子が巣立ち女が息を吹き返す

おんなの背すでに答を出している

おんな去る毛皮の値札裏にして

先生という物指しを常を持つ

尼崎いくしま川柳会

春城

年代報

晩鐘のリズムで祈り深くなり

筆運ぶりズム沸騰点に立つ

雨だれのリズムで生きて恙なし

毀れたリズムで少年たちが笑う

肩書きの鬼變応には弱い

傷だらけの鬼が呑みでる舞台裏

正直に喋ると鬼の眼が笑う

人様の役にたつて鬼も居る

左腕鬼に切られた亡父の樹よ

鬼の女房で一期の縄を縛っている

胎動が母という字を自覚さす

一日をふるに動いてよく眠る

発想の転換エンピツ動かない

我が歳を考え妥協の席につく

へたつてもお気張りやすと肩叩く

電線に鳩一列に朝の点呼か

図書館のポスト吞み込む艶笑文学

カレンダー一枚めくって春に近づく

僕を信用している僕の影法師

わたくしの噂は高い木に吊るす

どんな山にも一番高いところがある

シーソーのやがて男が軽くなる

ナイフとは人刺すものか林檎剥く

早智

潮華

政勝

満秋

比ろ志

歌子

義芳

祥文

弘治

光穂

向西

紫香

ヤス子

芳子

三代子

昌子

美子

武庫坊

一笛

愛

薰

キク子

夢之助

とみ子

求芽

富美子

年代

新同人紹介

小枝

ふさ系

—五楽庵・易推薦

井上

松煙

—薫風・正雄推薦

緒方

美津子

—薫風・正雄推薦

井上

信子

—薫風・正雄推薦

野下

之男

—薫風・正雄推薦

寝て起きて答を探す旅に出る
何もせず何事もなく今日も暮れ
二世紀にまたがる命一つ持つ
失業のお膳に妻のあたたかし
失恋の涙をためているグラス
日を追つてとほけ上手な翁面
妥協した弱気を年の功にされ

川柳藤井寺

高田美代子報

エルニーニョ 勘が狂った冬の漁
雪道に絵を描いている落ち椿
万一を思う日もある梅田地下
世紀末 欲望電車脱線す
歩くのも本腰になる万歩計
失楽園 子供の目には強すぎる
ふと見れば雪に紅さす落ち椿
ゆきずりにふと惑わせる後ろ影
ふと吐いた本音が重くのしかかる
ある日ふと妻に他人の顔を見る
ふと思ふ眠れぬ夜の泣き黒子
ああ美人 赤信号をふと渡る
ふと胎動母なる人へメッセージ
温い手だこれが愛だとふと気付く
毎日がドキドキだった頃をふと
筆を自在にふと遊ばせる癖がある
満たされて無くしたものにふと気付く
冬ざれの真っ只中にふとがある
逆転に望み九回裏がある
追伸に望み捨てずとある未練

伊三郎 千恵 久子 ハツエ 白溪子 澄子 晴生
恒雄 キミ子 敦子 宗一 史郎 利武 悦子 昌子 志洋 かつみ 三郎 修六 三夫 鐘造 和子 元紀 扶美代 美代子 正一 大八

まだ望みあるのか灯ついている
願望が多くて神を困らせる
ポケットの隅の望みをたしかめる
これ以上望みはしない父の傘
駄菓子屋の塩せんべいにある望み
望むもの見えそう峠へと急ぐ
手に持てる望みで今日も生きている
胸張って望み叶って聞く校歌
まだ望みあるかも知れぬ南風

翠 洋 会

柴田英壬子報

葬送の隅にひっそり佇つ女
モンローのおんなっぽさも好き嫌い
世間ずれて善いやら悪いやら
結構な女おんなのよい時代
本当の女鏡の奥にしまっている
平仮名のおんなさなくなってきた
隙間風子の将来をふと思ひ
見栄を捨て世間相場の寄付の額
匂いたつ女の時期もなく老ゆる
山茶花の女の業を掃いてやり
隙間からここと風が話しかけ
仮設住宅隙間風が多すぎる
世間なみの葬儀思えば寝られない
動乱に堪えた女の太い腕
消しゴムで消せる世間をあまくみる
節分の鬼ビーナッツ食べている
老いて一人世間の隙間泳いでる
生きるため頭を下げる妥協点

絹歌 昭子 桂子 花梢 岳人 一屯 和樹 美房 六点
蛭 さと美 綾子 叔子 東雲 正坊 真砂 光子 蕉子 英壬子 志華子 千梢 絹子 久峰 喜美子 千枝子 照子 正雄

加藤 理村・金太・ダン吉推薦 基

原 理村・金太・ダン吉推薦 子

堂 理村・金太・ダン吉推薦 子

津村 文秋・柳宏子・東雲推薦 子

石森 理村・金太・ダン吉推薦 子

杉澤 薫風・隆盛・よつじ・まさよ推薦 子

窓閉めて世間を見ない事に
消去法最後に残るのはおんな
普段着て暮らす世間が温かい
掌をかざし指の隙間に悟る運

この辺で頭を下げておとしよう
生き方を変えたから見えて来た世間
ブライドが世間なみでは許さない
横座りおんな本気で聞いてない

折り返し過ぎても同じ女道
世間体気にして二人元の鞆
闇抜けるひたすら頭低くして
悪人が外車に乗っている世間

川柳塔おとり

原
みさを報

出張のみやげに軽い風邪もらい
弱り目に風邪は好んで転げ込む
風邪薬煎じ静かにひとり寝る
肩書の消えた名刺が羽伸ばす
支払いが少し残っている暗着
厄払い信じ明日へと元氣出す
豊かさの陰で心が風邪をひく
胃の検査回りはみんな風邪ばかり
雪がふる払っても横む葉に似て
肩の力抜けば許せることがある
支払いが別々ですと老夫婦
不景気で懐だけが風邪をひき
ライバルに肩貸すほどの余裕もつ
歩で終る男の肩が丸くなり
宇宙への夢が拡がる肩車

佳秋 澄子 靖巳 周信 千歩 宣司 石舟 義 希久子 恭昌 楓楽 鬼遊 由多香 崇 伝住 幸次郎 清子 みさを せつ子 登美 芳之 庸二 雄々 舍人 黙光

押売りに茶の間で老父の咳払い
ささやかな稼ぎに払うことばかり
腹をきめりストラ組の肩たたく
肩書はいらぬ自由に生きていく
肩の荷をおろして明日の虹掴む
肩の手のぬくみに意欲湧いてくる
疑問符を払うと青い天がある
温暖化風邪も東西南北に

川柳塔みちのく

小寺

花峯報

記憶力ばんやりかすむ終戦日
焼きイモをグルメにしている米余り
焼芋がピエロになって街へ出る
故郷の訛りも包む焼きいも屋
言い訳のマスクは派手に演技する
焼きいもを丸い笑顔がつついてる
愛一途甘いマスクにある殺意
焼きいもやビルの谷間でもてている
マスクして美人に見えるから不思議
飛び込んだ風呂は菩薩の顔ばかり
身構えるバラは心にマスクする
焼芋を食うのも女見栄をはる
焼きいもの中でふる里あたたまる
才媛も甘いマスクに骨抜かれ
頬杖で棚ぼた待つ日が暮れる
夢はまだ煮えぬ火力が弱すぎて
妹の窓の真下に焼きいも屋
焼きいもの匂いに消えたダイエット
放心の目から夕日が離れない

野草 和子 敬之助 真一 風花 艶子 千秋 小生 落花生 井蛙 慕情 銀波 順風 花匠 生恵子 一光 大吾 ヒサ子 柳々 隆樹 一花 ツネ 黙人 島 花峯 五楽庵

堺川柳会

河内 月子報

行く先の楽しみ捜すカレンダ―
白馬の空ベガサスが翔ぶジャンプ台
こわい親少なくなつて子がこわい
終章の構図へ届くありがとう
大男の谷間に金の清水君
感動が少なくなつて来た不安
恋ひとつ抱いて口数減ってくる
花束が届き二人が揉めている
カーリングこれなら僕も出来そうで
湯煙のたなびくここが仮の宿
原田さん失速呼んだ魔風吹く
煙幕が張られりモコン届かない
少子化で甘やかされる子の暴拳
友情を食べてしまった風見鶏
天国の父にも届け金メダル
誘惑のタブーに触れてからの闇
やわ肌のをそれなりに枯れ平和です
この想い届けてほしいチョコレート
投げ縄の届かぬところでアカンベ―
悠然とたたか大蔵官僚め
年相応の肌を恥じてはいけません
少な目の飯にも慣れた血糖値
何百回転んからの五輪新
宇宙から星の恋文届くかも
肌色の違いもひとつ五輪の和
小包みに愛も届けた定期便
しわくちやの肌で家族をリードする
喜代子 深雪 寿恵子 アキ 洞庵 千代 扶美代 満州 頂留子 冬虹 勇太 昭子 りつえ 八千代 紀美女 金三郎 哲平 東雲 菜々 かりん 小雪 楓 美代子 健吾 泰子 ちゃ子 ちや子



芦田静江さんを送る

川 島 諷云児

二月二十日、突然、ご長女から御逝去の報告。何かの間違ひではないかと、一瞬耳を疑った。お話によると、二月十六日家の中で倒れ救急車で病院へ、十時間余りの開頭手術を受けられたが、その甲斐もなく、二月二十日十二時二十三分、温かいご家族に見守られ、八十二歳の優雅な生涯を閉じられた。

二月十一日の大阪川柳人クラブ総会では、元気に談笑されていたのが、最後になろうとは神のみぞ知る人の運命というものであろうか。生者必滅会者定離とは言いながらあつけないお別れとなつてしまった。

思い起こせば昭和五十九年五月、川柳サークル卯の花の結成時から、薫風、紫香両先生を師と仰ぎ、爾来十三年川柳をこよなく愛されて来られた。川柳の他に、俳画、書道、茶華道等々、十指に余る趣味に没頭された。

円満な人柄に、会員からのたつての要望で

卯の花の副会長に推されると共に、高槻市文化団体協議会委員として活躍された。平成八年七月川柳塔社同人となられ、多忙な身もいとわれず卯の花のために他柳社との親睦交流に率先して出席された。飾り気のないおらかな人柄に、年を追って近郊各地から、卯の花の句会に参加して頂く方が増え、お蔭で今日の卯の花に成長した。否、して頂いたと言っても過言ではない。

これからという矢先の御逝去は、天命とは言え痛恨の極みで卯の花にとっては、何物にも替えがたい大きな痛手である。あの笑顔、あの声が、もう句会で見られない、聞かれなくなつてしまったことが、返すがえすも悔しく残念である。

残された私達は、あなたのご遺志を受け継ぎ、あなたが築きあげられた川柳サークル卯の花のより一層の発展へ、会員一同切磋琢磨

することを誓います。どうか天国から見守ってください。

あなたの思い出の句を拾えば、枚挙にいとまがないが、お元気だった頃の句を並べご人徳を偲びたいと思います。

時どきは出番が来ますまだ女

女悲し伏せの姿勢で耐えている

夢と現実わたし悲しいヤジロベエ

水中花あなたと恋におぼれよう

草萌えて春に咲く絵の具皿

恨むまい愛は枯れゆくものだから

花束のように初孫抱きあげる

最後にあなたが敬愛されていた諸先生方から弔吟を拝受致しました。

天国で、ごゆっくりお読みください。

江静か御霊は鐘に送られて

あの世でも披露されそう趣味多彩

二月十一日の未だ残つて掌の温味

気をつけて行きや浄土は春だろう

妙法・芳光院妙篤日静信女位

(合 掌)

柳界展覧

め切り・席題なし・会費1000円・投句料500円
〒564-0012 吹田市
南正雀2-19-6 西川景子
方川柳悠美まで。

▽同人消息△

★川柳あしなみ会は、平成9年度年間賞を決定、1月句会で表彰した。あしなみ杯最多賞に村木信子さん。

〈新天守賞〉

母の味じっくり煮込む落とし蓋 小林 節子

〈ユーモア大賞〉

説明書読めば読むほど判らない 森 正朗

★『川柳公論』97年度の蒼塔賞の作家賞に本社同人の池森子さんが選ばれた。

★中尾藻介しのぶ会が4月13日(月)13時から、吹田市岸部市民センター大ホール(阪急京都線正雀駅下車)で開かれる。宿題と選者は万華鏡『西川景子▽杖』岩井三窓 各題2句・14時締

■3月号『P58(秀句鑑賞)』上段17行目「人は皆善なり目線あつたとき」

▽P39(川柳塔) 下段3行目「耳かきのこけし私のお友だち」を本人の申し出により削除します。

▽訂正△

■鳥取県八頭郡の上田俊路氏(同人)は町の側面的支援もあり、待望の郡内はじめて地元に「かわはら川柳会」を一月から発足させた。

3月号『P84(渺湖抄)』下段6行目「屋台骨写すカメラが欲しくなり」の作者は横浜市・北沢街湖さんでした。お詫びして訂正します。

▽計報△

■芦田静江さん(高槻市・同人・高槻川柳サークル卯の花副会長)は2月20日、脳出血のため死去。82歳

■桜井栄次氏(同人・桜井千秀さん夫君・和歌山市)は2月25日、急性肺炎のため死去。79歳

■田中好啓氏(倉敷市・ふあつと川柳社名誉同人・元副主幹)は3月1日、急性肺炎のため死去。86歳

▽おことわり△

■2月号『P12(川柳塔)』上段8行目「人は皆善なり目線あつたとき」

■P18・13行目

松川杜的(ととき)ととき

■P21・15行目

美田旋風(よしだせんぷう)

「よみたせんぷう」

■P28川柳塔社役員

参与に阿萬萬的氏を追加

■P28役員・理事

坊農柳宏→坊農柳弘

オール川柳誌上コンクール

「めがね」 佐藤真砂延選

「広告」 野谷 竹路選

「旅」 山倉 洋子選

「筆」 北川絢一朗選

2000円・5月26日締切

「釣る」 鈴木柳太郎選

大阪市浪速区恵美須西2

「健康」 木原 広志選

1-8-11葉文館出版オー

「効く」 辻 晩穂選

556-0003 川柳誌上コンクール係

「岬川柳会」公開講座開催

岬川柳会5周年記念句集「みさき」発行

とき 5月17日(日)午後1時から

ところ 岬町淡輪公民館(南海電鉄淡輪駅下車)

◎入場無料・先着百名に記念品進呈

「川柳のお話」

橘高 薫風氏

「作品添削講評」

河内 天笑氏

「ジュニア川柳について」

牛尾 緑良氏

4 月 各 地 句 会 案 内

句 会 名	日 時 と 題	会 場 と 投 句 先
尼 崎 いくしま	3 日(金)午後 1 時から 花・流れる・雑詠(A・B)	サンシビック尼崎3F 阪神尼崎駅南西徒歩 5 分 〒661-0035 尼崎市武庫之荘5-25-17 春城年代
堺川柳会	9 日(木)午後 1 時から 昨日・火花(共選)・ふたり(折句)	堺市総合福祉会館 南海高野線堺東駅市役所西入る 〒593-8305 堺市堀上緑町2-16-3 河内天笑
八尾市民 川 柳 会	10 日(金)午後 6 時から ぼんやり・蹴る・花・模様	八尾市文化会館4F 近鉄八尾駅東へすぐ 〒581-0845 八尾市上之島町北1-15 宮崎シマ子
川 柳 塔 まつえ	11 日(土)午後 1 時半から 才女・宴・詠り	松江市雑賀町 雑賀公民館 〒690-0056 松江市雑賀町1686 恒松町紅
川 柳 塔 わかやま	12 日(日)午後 1 時から 影・落第・逃げる	近鉄カルチャーセンター JR和歌山駅前 〒641-0012 和歌山市紀三井寺111-2 牛尾緑良
西宮北口 川 柳 会	13 日(月)午後 1 時から 古都・褒める・惜しい・自由吟	西宮市立中央公民館 阪急西宮北口駅南出口徒歩 5 分 〒662-0841 西宮市両度町2-19-515 山本義子
ほたる 川 柳 同 好 会	14 日(火)午後 1 時から 飾る・虫・まさか	豊中市立蜷池公民館 阪急・モノレール蜷池駅西へ150米 〒560-0033 豊中市蜷池中町3-10-28 井上直次
高槻川柳 サークル 卯 の 花	16 日(木)正 午 から 歩幅・寿司・うかれる・自由吟	高槻現代劇場306号室 阪急高槻駅徒歩 7 分 〒569-1142 高槻市宮田町3-8-8 川島凜云児
南 大 阪 川 柳 会	17 日(金)午後 6 時から 体形・対象・多事・袂	玉造老人憩いの家 JR環状線玉造駅西徒歩 3 分 〒543-0012 大阪市天王寺区空堀町15-18 寺井東雲
岸 和 田 川 柳 会	18 日(土)正 午 から レンズ・浪人・わがまま・煽る	吟行句会「五風荘」 岸和田城横 〒569-0827 岸和田市上松町610-85 芳地狸村
川 柳 ねやがわ	19 日(日)正 午 から わさび・荷物・邪魔・自由吟	寝屋川市民会館 寝屋川市駅からバス市民会館前 〒572-0063 寝屋川市春日町9-9 高田博泉
もくせい 川 柳 会	20 日(月)午後 1 時から 一回・パイプ・支える・自由吟	豊中市立中央公民館 阪急曽根駅南東歩 5 分 〒561-0826 豊中市島江町1-3-5-801 田中正坊
富 柳 会	23 日(木)午後 1 時から 家・ためらう・自由吟	富田林市立中央公民館 近鉄富田駅南出口徒歩 3 分 〒584-0043 富田林市南大伴町4-1-10 池 森子
京 都 塔 の 会	24 日(金)午後 1 時から 席・ぼんやり・定刻	ハートピア京都 地下鉄丸太町駅南改札東出口すぐ 〒600-8428 京都市下京区弁財天町328 都倉求芽
東大阪市 川 柳 同 好 会	25 日(土)午後 6 時から ラーメン・別れ・地味・水	東大阪市立社会教育センター2F 近鉄布施駅北長堂小学校隣 〒578-0925 東大阪市稲葉3-3-21 片岡湖風
はびきの 市 民 川 柳 会	26 日(日)午後 1 時から 未来・忍ぶ・スタンド・「差」	羽曳野市立陵南の森公民館 近鉄高鷺駅北東歩10分 〒583-0882 羽曳野市高鷺8-31-11 塩岡 敏

★日時・会場などが変更になる場合は、高須賀金太(0724-43-4889)へご連絡ください。

編集後記

★八五〇号記念川柳大会もみなさまの御協力で盛会のうち、無事終了することができ感謝申し上げます。

★短い準備期間ではあったが、何とか大過なく終えることが出来た。しかし、振り返ってみると反省点も多い。広告・ちらしの書き方

当日の接待など、よく検討して次回に役立たせたい。

★個人的なことではあるが、当日、お忙しい中、また遠いところを折角出席された方々、もっとゆつくりお話をしたかった。声をかけてくださっても、忙しにかまけて失礼ばかり重ねたことをお詫びします。

★句会・大会の楽しみは、佳い句に接すること、また自分も佳い句を作ることではあるが、それと同時に、

たくさんの人々とお逢いできることである。初めての方、久しぶりの方、周りの人々の挨拶を聞いているだけでも嬉しくなってくる。

★初対面でも、誌上で名前を拜見しているの、初めてという気がしない。社会的地位など関係なく、みんな仲間、川柳仲間として対等に話できる。話をして

いて、人柄に川柳が生まれる背景を垣間見ることがあり楽しい。やはり「川柳は人なり」だと感じる。

★どのような人間関係でも大切なのは信頼だと思う。カレンダーにも「約束は信頼の上に成り立つ」とあった。信頼がなければ絆は結べない。信頼とは人を責めることからは生まれず、許し合って初めて築けるものではないだろうか。

★川柳塔の太い絆をありがとうございました。(み)

〇「縁起でもない」とお叱りの向きがあるかも知れないが、「死」は誰一人避けることが出来ない事実だから、お許しいただきたい。

〇夫の両親、父、特に夫を西方浄土へ送ってからは、ぐつと身近に「死」を感じ考えるようになった。

川柳塔建立

北浜で月電話料二萬圓也を納める株屋が居るという。商売だが二萬圓の通話料も流石に株屋らしい豪気である。一口に二萬圓とい

えは何でもないが、今これをA B Cの三人に与えたとしたら、

Aは信託に預金して晩年の安逸を楽しむだろう。

Bは其の半分を出して何か事業を計画するだろう。

右は『川柳雑誌』昭和十年九月号の一文、筆者は西いわを氏(K)

Cはスッポリ相場に出ずとする。この二萬圓はこうして使われ、迂余曲折して行くのに株屋さんではモシモシを一ヶ月続けて費してしまふ。蓋し勿体ない限りだ。

僕にくれるとしたら如何する？川柳塔でも建立して後世に残すとするか。ある日そんなことを考えた事がある。

〇参考のため、日本尊厳死協会の資料を取寄せると、その中に「尊厳死の宣言書」があった。不治の病で死期が迫っている場合や、植物状態に陥った時、一切の生命維持措置をやめて欲しいということと、苦痛を和らげる処置は最大限に実施して欲しいという宣言書で、それに署名捺印して協会へ提出する。協会はそれを登

録しコピーを手元にもらう。〇その書類は必要が生じた時医師に示すのだが、もし理解して貰えなければ、協会から話してもらえんとか。会費は年三千円、終身だと十萬円。これは登録、会員証の交付、会報、講演会等に使われるそう。

〇何やら尊厳死の沙汰も金次第などと思わないでもない、と言えは不謹慎の謗りを受けるだろうか。(ふ)

〇自分には納得できるようにせいはいばい生きられても、納得のできる死に方ができ

るだろうかと言うことが、

提出する。協会はそれを登

川柳塔・水煙抄投句用紙

種目「

」発表（6月号）

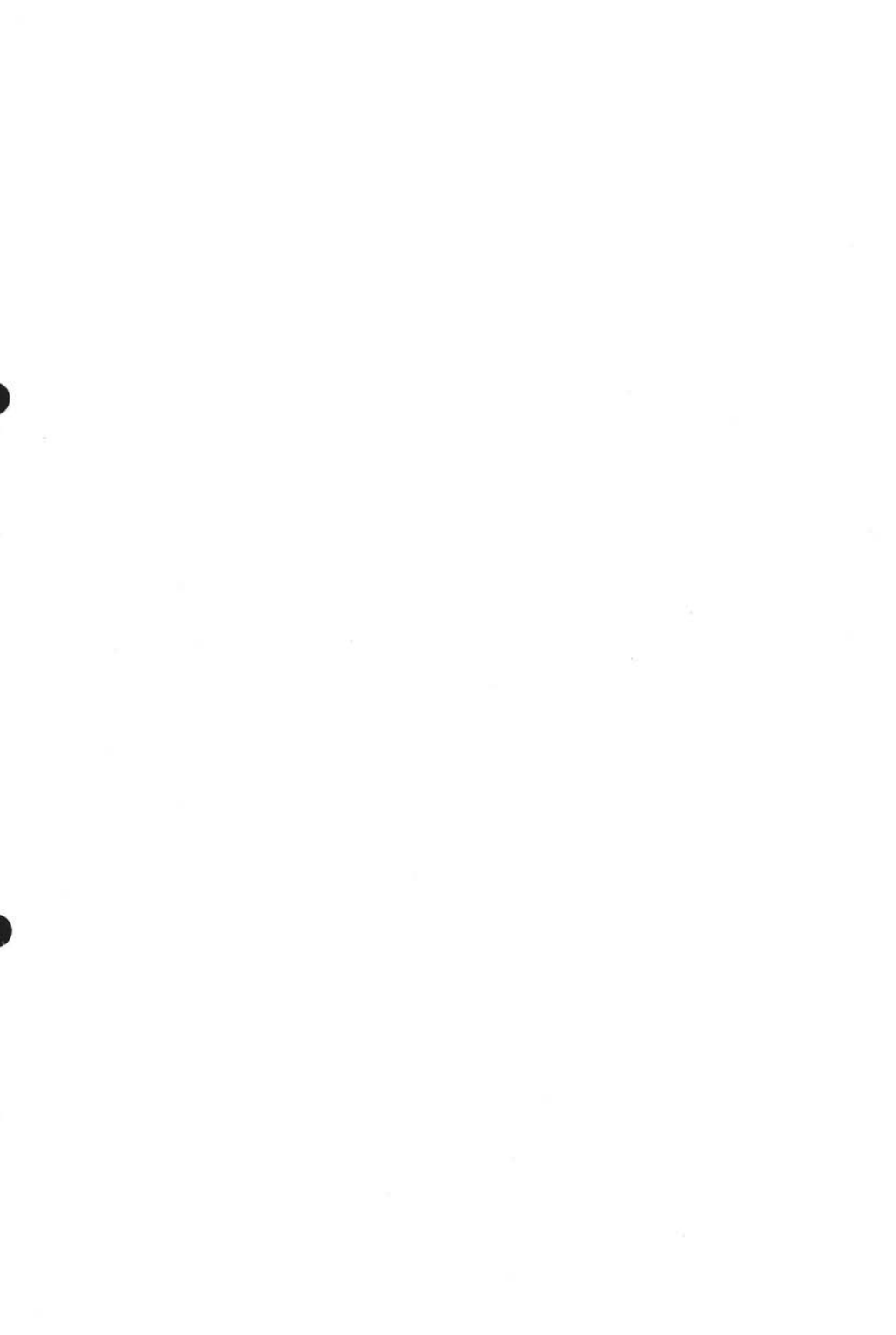
地名

雅号

きりとりせん

◎ 8句を楷書で正確に書き、15日までに到着するようお送りください。

同人・誌友 マルで囲んでください。



作品募集

初歩教室 「口」(3句) 吐田公一担当

課題吟 (3句)

「再」 「素」 「振」 「朴」 「る」

中島正博選 田村きみ子選 岩津ようじ選

荳香の花 (3句)

宮西弥生選 八木千代選 西田柳宏子選 橋高薫風選

水煙抄 (8句)

川柳塔 (8句)

6月号発表 (4月15日締切)

7月号 課題吟 「川」「ささやか」 「変」「化」

初歩教室 「上」「る」

本社4月句会

とき 4月7日(火) 午後5時半

ところ アウィーナ大坂 3階

兼題 「傾く」 「すっかり」 「食べる」 「閑心」 「苦手」

席題 1題 当日発表(各題2句以内)

会費 500円 投句料 400円

地下鉄谷町9丁目徒歩8分・近鉄上本町徒歩3分

天王寺区石ヶ辻町19-12 電06・772・1441

高田美代子選 宮園射月芳選 岩佐ダン吉選 西出楓楽選 橋高薫風選

本社5月句会 7日(木) 予定

兼題 「にこにこ」「声」「達筆」 「慌てる」「温泉」

夜市川柳募集

第11回「声」 大野風柳選

ハガキに3句 4月末締切

投句先 〒593-8305 堺市堀上緑町2-16-3

河内天笑方 堺川柳会

「NHK川柳」について

NHKラジオ川柳は、4月から装いを新たに東京からの放送となり、選者も交替しますので、作品募集欄は中止します。

「川柳塔」への投句について

- ①川柳塔欄への投句は同人、水煙抄欄へは誌友(誌代半年分以上前納の定期購読者)に限ります。
- ②澎湖抄・荳香の花欄および一路集(課題吟)への投句は、同人・誌友に限ります。ただし荳香の花欄は女性だけ。
- ③各欄への投句は、必ず氏名と住所(県・市名)を明記してください。

〒545-0005

定価 六百元 (送料84円)

半年分 四千元 (送料共)

一年分 七千九百元 (同)

平成十年 四月一日発行

編集兼 発行人 橋高 薫

印刷所 美研アイト

大阪府阿倍野区三好町二一〇一六

ウエムラ第2ビル202号室

発行所 川柳塔社

電話 (06) 691-1436

振替 〇〇九八〇一五二三六八番

第22回 全日本川柳山口大会

とき 6月14日(日) 午前10時開場
ところ 萩市民館・大ホール

宿題 第1部(事前投句・5月10日締切)
(萩市江向495-14)

「豊か」 小林 由多香 選
「輝く」 小島 蘭 幸選
「ほのぼの」 永石 珠子 選
◎3.5×18cmの句箋1枚に1句宛記入、各
題2句、無記名、封筒に住所・氏名を
明記、投句料1000円(定額小為替
現金書留)を同封して左記へ郵送。
投句先 〒530-0041 大阪市北区天神橋2丁目北1-11
ステッピン南森町702号

宿題 第2部(当日出句・午前11時半締切)
全日本川柳協会大会係

「仲間」 月原 宵明 選
「揃う」 黒川 笠子 選
「現役」 猿田 寒坊 選
「大物」 太田 紀伊子 選

会費 3000円(昼食・記念品代共)

観光 6月13日(土)・3000円

前夜祭 同日午後6時半・8000円

◎宿泊・観光・前夜祭の申込は5月10日まで
に左記へ

申込先 〒758-0057 萩市堀内170-15 遠藤竹生方

全日本川柳山口大会事務局

本のことならご相談を...

- 川柳・俳句・短歌集
- 画集・写真集・絵本
- 社史・小説・エッセー
- 創業・喜寿を祝う記念誌
- 故人を偲ぶ追悼誌
- 郷土誌

図書出版 教育情報出版

〒557 大阪市西成区千本南1-12-8
☎06-658-8741(代) FAX. 06-652-2928